であらせられた元明天皇が、御代の初に國事多端であるのを御軫念遊ばされたのを、御姉宮が雄々しくも御心を慰め奉り、且は激まし給うた其の力強く美しい御心情が、よく一首の上に現れて居る。

和銅三年庚戌春二月、從二藤原宮一遷二于寧樂宮一時、御輿停二長屋原一
遥望二古郷一御作歌

七八　飛ぶ鳥の　明日香の里を　置きて往なば　君が邊は　見えずかもあらむ
飛鳥　明日香能里乎　置　而伊奈婆　君之當者　不所見香聞安良武

【釋】○和銅三年云々　續日本紀に據れば、藤原宮から平城京への遷都の議は元明天皇の和銅元年二月に起り、次いで九月に御巡幸になつて其の地形を御視察遊ばされ、同月阿倍宿奈麻呂・多治比池守を平城京司の長官に任命し給ひ、十二月に地鎮祭があつて直ちに造營の工を起し、二年八月及び十二月に行幸があり、和銅三年に工を終へ三月に遷都せられたのである。然るに此の題詞には「二月」とあつて、遷都の年月に一箇月の相違があるので、考には「二月」を「三月」の誤とし、攷證には遷都は三月であるけれども、此の作者は其の前の二月に移り給うたのであらうと云つて居る。恐らく攷證の說の如く二月に移轉し給うた時の御歌であらう。因みに平城京の位置は添上郡・添下郡（添下郡は今は生駒郡に編入せられてゐる）の二郡に跨り、都制は左右兩京に分れ、東は今の奈良驛附近から、西は生駒郡伏見村西大寺の西に及び、又北は西大寺附近から南は生駒郡郡山町九條に及び、東西約四十町南北約四十五町の地域であつた。而して宮城は添上郡佐保村法華寺の西南方、卽ち今の生駒郡都跡村の地に在つた。なほ平城京に就いては後に詳しく說明する機會がある。○長屋原　「長屋」は和名抄に「山邊郡長屋奈加也」とある地に當る。今の山邊郡朝和村大字永原（丹波市町の南方約二十町の地）は、長屋原の名を傳へたものであらうと云ふ。永原は藤原宮の地を距ること約二里半である。○御作歌　此の上にあるべき作者名を脫してゐるので、從來種々に解釋せられた。考には御名部皇女の御歌であると云ひ（攷證・檜嬬手同說）、僻案抄には元明天皇の御製であるとして居る。（新古今集羇旅歌に此の御歌を元明天皇の御製として揭げて居る。）なほ左註に「一書云太上天皇御製」とあるのに就いて、小琴には持統天皇の御時飛鳥から藤原に遷都せられた時の御製であるのを、文武天皇の御代の人が記したから、太上天皇と申したのであると云ひ、又題詞に「和銅云々」とあるのに就いては、當時持統天皇は旣に崩御になつてゐるけれども、文武天皇の御時に申し慣れた儘に「太上天皇御製」と記したのであつて、「和銅三年云々」は誤傳であらうと云つてゐる。かやうに諸說があるけれども、題詞によつては作者を斷定することは出來ない。但し「御輿」と云ひ「御作歌」とある點などから考へると、高貴の方の御歌である事だけは確かである。

○飛ぶ鳥の　「明日香」の枕詞。其の意義に就いては種々の說がある。冠辭考には「白鳥の鷺坂山」や「天飛ぶや輕路の池」の類で、「飛ぶ鳥のあすか」と云ひ續けたもので、「あすか」は「いすか」のことであらうと云つて居る。又上田秋成の『楢の枾』には「飛ぶ鳥の朝たつ」を「あすか」に云ひ懸けたのであると云ひ、古義には「飛ぶ鳥の足輕」といふ意から懸つたのであると云ひ、豐田八十代氏の新釋にはアスカのアの音を隔てて「巢」に懸つたのであらうと云つて居られる。要するに未だ定說が無い。さて「飛鳥」をアスカと訓むのは、「春日」をカスガと訓むのと同類で、枕詞を其の下に來る語によつて訓んだのである。○明日香の里　「明日香」は今の高市郡飛鳥村・高市村一帶の地

名。小琴・略解・燈等に此の御歌を飛鳥から藤原に遷都せられる時のものと見て居るのは、此の「明日香の里を置きて往なば」の句に注目して立てた説である。併し明日香は藤原を距ること僅かに十町許りの所であるから、美夫君志の説の如く、飛鳥の里に住んで居られた皇族の方などに對して、名殘を惜しんでお詠みになつたものと見るのが妥當である。○置きて往なば　後に置きて往なばといふ意。卽ち飛鳥の里を後にして新京の寧樂へ去つたならばの意である。○君が邊は云々　「君が邊」はなつかしい君の住む邊の意。「見えずかも」の「か」は疑問の助詞、「も」は感動の助詞。（註に「一云君之當乎不見而香毛安良牟」とある。是に從つて「邊を」とすれば、結句は見ようとしても見えぬの意に解くのである。）

【譯】飛鳥の里を後にして遠く寧樂に移つて行つたならば、なつかしい君の住む里の邊は、もう見えなくなるかも知れない。まことに名殘惜しいことである。

【評】飛鳥は推古天皇が都を置かせられて以來一百年間帝都のあつた地であつて、（その間一時難波宮・大津宮等に都遷りが行はれた事はあるが）藤原宮といふもつまり飛鳥の地續きである。然るに種々の事情の爲飛鳥地方を永久に去つて、寧樂に遷都せられる事になつたのであるから、舊都に別れる名殘惜しさはさこそと想像せられる。當時新都の繁榮を計られる爲、又古京を思ひ切らせる爲に、飛鳥に永く居た百官の邸宅や藤原氏の氏寺の興福寺を始め元興寺・法興寺等の大寺を、續々寧樂に移さしめられたと云ふことであるから、舊都を立ち去るに忍びなかつた人の多かつた事が推察せられる。それらの人の作は集中に散見してゐる。

七九　或本從二藤原京一遷二于寧樂宮一時歌

天皇の　みこと畏み　にぎびにし　家をおきて　隱國の　泊瀨の川に　舟浮け
天皇乃　御命畏美　柔備爾之　家乎擇　隱國乃　泊瀨乃川爾　烋浮

て　吾が行く川の　川隈の　八十隈落ちず　萬度顧みしつつ　玉桙の　道行
而　吾行　河乃　川隈之　八十阿不落　萬段顧爲乍　玉桙乃　道行

き暮らし　青丹よし　寧樂の都の　佐保川に　い行き至りて　我が寢たる　衣
晚　青丹吉　楢乃京師乃　佐保川爾　伊去至而　我宿有　衣

の上ゆ　朝月夜　さやかに見れば　栲の穗に　夜の霜降り　磐床と　川の氷凝
乃上從　朝月夜　清爾見者　栲乃穗爾　夜之霜落　磐床等　川之氷凝

りて　冷ゆる夜を　息ふことなく　通ひつつ　作れる家に　千代までに　來ま
冷　夜乎　息　言無久　通　乍　作　家爾　千代二手　來座

せ王よ　吾も通はむ
多公與　吾毛通　武

【釋】○或本從二藤原京一遷二于寧樂宮一時歌　「或本」とあるのはもと原本には無くして、一本に載つてゐたのを、編纂者又は校合者が書き加へた歌である事を示したのである。○天皇の　流布本に「天皇」をスメロギと訓んでゐるが（僻案抄・考・燈同訓）、宣長は斯かる所はオホキミと訓むべきであると云ひ、又久老も槻落葉別記に當代の天皇を

申す時には、オホキミと訓むべきであると云つて居る。宣長久老の説に從ふべきである。○みこと長み　「みこと」は御言の義で「みことのり」(詔)のこと。「長み」は「長し」といふ形容詞の語幹「かしこ」に、活用語尾を添へた「長む」といふマ行四段活用動詞の連用形。「長む」は長多く思ふ卽ち長まる意である。「みこと長み」は遷都の詔を長まりての意。以上の二句は常套語句として集中に屢用ゐられてゐる。假名書の例には「於保古美能美許等可之古美」の如きが幾らもある。○にぎびにし　動詞の「にぎぶ」の連用形に、過去完了の助動詞の「にし」が附いたのである。「にぎぶ」は「あらぶ」の反對の意を表す。其の語幹の「にぎ」は「和妙」「和稻」「柔膚」「和海布」「賑はふ」等の「にぎ」にあり、又「和物」「和毛」等の「にご」と語根を同じうするのであつて、漢語の柔軟平和・殷賑等に當る意を表す。次に「にぎぶ」の「ぶ」は、「荒ぶ」「健ぶ」等の「ぶ」と同じく、それらしくする意味を添へる接尾語である。さてここの「にぎぶ」を、考には民家が賑はふ意とし、燈や攷證には久しく住み馴れて居心地のよき意であるとし、講義には相和して睦じく樂しく暮らす樣であると解いてある。此の歌の意味から考へると、燈・攷證等の説(古義・美夫君志等同説)が妥當であると思ふ。○家をおきて　原文の「家乎擇」に就いては從來種々の説が現れた。流布本の訓にイヘヲエラビテとあるが、僻案抄には「擇」を「釋」の誤としてミヤコヲオキテ又はイヘヲオキテと訓み、考には「乎」は「毛」の誤、又「擇」は「放」の誤であるとしてイヘヲモサカリと訓んでゐる。又略解・燈には「擇」を「放」に改めてイヘヲサカリと訓み、攷證には「擇」は「別」の意である事を考證して、原文の儘をイヘヲワカレテと訓み、古義の一説には「擇」を「釋」の誤としてイヘヲオキと訓んで居る。なほ新訓には「擇」を「釋」に改めてイヘヲステと訓んである。今は僻案抄の一訓及び古義の一説などに從つて、イヘヲオキテと訓むことにする。なほ講義に「擇」と「釋」とは古くは相通じて用ゐられたのであらうと云はれたのも併せ考ふべきである。此の句は藤原京の家を後にしてといふ意。○隱國の　「泊瀨」の枕詞。(既出)○泊瀨の川　今の大和川の上流の初瀨川で、其の支流の一の佐保川に會ふまでの間の名である。磯城郡上之郷村に源を發し、初瀨町を過ぎ西へ三輪山の南麓を流れ、西北に轉じて山邊郡川西村あたりで、南流して來た佐保川と合流して大和川になつて居る。○舟浮けて　舟を浮べての意。原文の「艌」は小舟の義。「浮く」は四段活用の時は自動詞で、他動詞の場合には下二段に活用する。「難波津に船を宇氣須惠」(四四〇八)の例がある。さて此の舟は作者が奈良へ通ふ爲のものであるが、或は建築材料等をも運搬したのであらうと思はれる。○川隈の　川の曲つてゐる所をいふ。「隈」は前に講した「道の隈」の「隈」と同じ。○八十隈落ちず　「八十」は實際の數を示すのでなく、唯數の多い事を示す爲に用ゐてある。「八十神」「八十國」「八十島」「八十日」「八十氏」などの「八十」は何れも同樣。其の多くの曲り目毎にの意。「落ちず」は洩れずの義。前に「隈も落ちず」といふ例があつた。なほ「道の隈八十隈ごとに」(三二四〇)といふ例もある。○玉桙の　「道」の枕詞。代匠記に「玉」は美稱の辭で、鉾の如く直なる道といふ意で懸けたのであると云ひ(此の他二説を擧げてゐる)、冠辭考に鉾の身といふのを「道」に懸けたのであると云つて居る。又宣長の『國號考』には、古の鉾の柄に手に取つて引き擧げる爲に「ち」(幕の乳といふのもこれである)といふものを著けたから、「みち」の「ち」に懸けて枕詞としたのであると云ひ、又此の説に幾分の修正を加へて、鉾の乳は小幡を著ける爲のもので、孔のある突起であるとする説などがある。此の他折口信夫氏の『萬葉集辭典』には、刄物と血との聯想から、「ち」卽ち「道」に懸けたのであると言はれてゐる。なほ後の研究を俟つべき枕詞である。○道行き暮らし　考に「人は陸にのぼりても行

く」(攷證同說)と解いてゐるのは誤であつて、代匠記以後の諸註にある通り、泊瀨川を下り佐保川を溯つて行く中に、日が暮れたことを歌つたのである。「道」はここでは舟路の義である。○青丹よし　「寧樂」の枕詞。(既出)○佐保川　源を春日山に發し佐保山の南を過ぎ、佐保村法華寺邊から南へ向ひ、平城京の朱雀大路に沿うて南流し、初瀨川に落ちて大和川になつて居る。今は川幅が僅か三四間ばかりになつて居るが、當時は舟を通じ得る程の大きな川であつた。○い行き至りて　「い行く」の「い」は語調を強める接頭語。〔一七〕に「い隱る」といふ用例があつた。○我が寢たる　舟の中で夜を明かしたのである。○衣の上ゆ　此の句を流布本にコロモノウヘニと訓んであるが、美夫君志にコロモノウヘユと訓んだのがよい。考に「衣」を「床」の誤と見て、此の二句を「假屋なれば夜床ながら月影の見えて」と解いてゐるのは從ひ難い。此の句は下の「さやかに見れば」に懸る句である。翌朝目覺めて、著て寢てゐる衣から首だけ出して周圍を見る樣を歌つたのである。○朝月夜　アサヅクヨと訓む。「朝月夜」は「夕月夜」に對する語で、有明の月の照る曉のことである。此等の「月夜」は月を主として言ふのであつて、「夜」の意は輕い。此の句は「朝月夜に」の義で、有明月の光であたりを見るのである。○さやかに見れば　考に此の句をサヤニミユレバ(新考・新訓同訓)と訓み、略解にサヤニミレバと訓んで、共に月が見える意に解いてゐる。然し前後の關係から見ると此の訓は穩當でない。流布本の訓のサヤカニミレバに從つて、古義美夫君志等の說の通り、月の光によつて邊の景色をはつきり見ると、の意に解くべきである。○栲の穗に

「栲」は俗字で「栲」が正字である。「たへ」は既述の如く織物の總稱にも用ゐるが、此所は栲(楮に同じ)又は穀(楮に酷似してゐる)の樹皮の纖維を採つて織り上げた布をいふ。其の色が白いから白栲ともいふ。「ほ」は「穗」「帆」「秀」(「秀つ枝」「國の秀」等いふ)「焰」(火の穗の義)「浪の穗」等の「ほ」で、物の著しく現れ出た部分を指す語である。最後の「に」は狀態を示す助詞で、のやうにの意。「穗に」の用例には赤い色の著しい事を「丹の穗にもみづ」(三一六六)と言つた例がある。從つて此の句は、白栲が著しく目立つやうに白くの意であつて、下の「夜の霜降り云々」に懸る修飾語である。○夜の霜降り　美夫君志の說の如く、夜の間に降つた霜を朝に見て歌つたのであるから、特に「夜の」と云つたのである。○磐床と　「磐床」は川底や淵瀨などに、磐石が床のやうに平らになつてゐるのを云ふ。ここは川の水が凍つた有樣を形容してゐる。「と」は動作や狀態の標準を示す助詞であつて、の如くの意を表す。○川の氷凝りて　流布本に「川之氷疑」とあるが、「疑」は多くの古寫本に「凝」とあるから其の誤であらう。「氷」は類聚古集・冷泉本に「水」とある。僻案抄・燈は「氷」を「水」の誤と見て、前者はカハノコホリテと訓み、後者はカハノミヅコリ(新訓・全釋同訓)と訓んでゐる。又考は「川之氷凝」をカハノヒコゴリ(略解・攷證・美夫君志同訓)と訓み、檜嬬手・古義等にはカハノヒコホリ(新考同訓)と訓んでゐる。燈の訓も一理はあるが、併し流布本に從つて「川の氷凝りて」と訓んで意味を成すから、今は原の儘にして置く。「凝る」は凡て液體が凝固する事をいふので、凍る意味のみではない。○冷ゆる夜を　「冷」を代匠記にヒユルと訓み、又考にサムキ(燈・攷證・講義同訓)と訓んで居るが、今は流布本の訓に從つてサユルと訓んで置く。○息ふことなく　原文の「息言」を流布本を始め拾穗抄・燈等にヤムコトと訓み、古義にヤスムコトと訓み、僻案抄・考以下一般にはイコフコトと訓んでゐる。「息」に「憩」の意味があるから、此所はイコフコトと訓むべきである。○通ひつつ　舊

都の藤原から新京の平城まで通ひつつの意。「つつ」とあるのに依つて、此の「通ふ」は一度ではなく、幾度も通ふ意である事は明かである。○來ませ王よ　「來座多公與」を流布本にキマセオホキミトと訓んでゐるが、これでは意味がよく通じない。講義には此の訓に從つて「おほきみ」は上に對しては呼掛となり、下に對しては補格となると解かれたが、なほ穩當でない。代匠記にはキマスオホキミトと訓んで、新都に遷り來て千代までも坐します大君と共に我も云々の意であると解き、考には「來」を「爾」の誤として上の句末に附け、「多」を「牟」に改めて此の句をイマサムキミトと訓んで居る。（略解・古義・美夫君志・新考等考に從ふ）此の他燈には「多」を「牟」に改めてキマサムキミトと訓み、其の「きみ」は此の家の主人と見て、句末の「と」をと共にの意味に解いてゐる。（新訓・全釋同説）以上述べた諸説は何れも多少穩當を缺くやうに思はれる。此等の説は皆句末の「與」をトと訓んで、と共に若しくはとしての意の助詞と見てゐるが、私見を以てすれば、これはヨと訓んで呼掛の語の下に附く助詞と見るべきであらうと考へる。「與」と記して助詞の「よ」を表した例は集中に幾らもあり、「よ」を呼掛の意の助詞に用ゐた例には、「隱口の泊瀬小國によばひせす吾がすめろぎ與云々」（三三一二）がある。又格調の方面から見ても「來ませ王よ」で一旦切つて、最後に「吾も通はむ」といふ句を添へたものと見る方が表現が力強い。現に此の歌の作者は、次の反歌に於て第四句までを續け、「吾も通はむ」で一旦切つて、更に「忘ると思ふな」を結尾句として添へてゐるのである。斯樣な點をも參考して今は原文の儘をキマセオホキミヨと訓んで解く。以上の二句の意は、此の家に來りて末永く千年までも住まひ給へ、我が仕へ奉る君よといふのである。「おほきみ」は此の場合は前後の關係から見て天皇ではなく、文字が示す通り親王・王・女王などの稱である。○吾も通はむ　「吾も」は「王」に對して言つたのであつて、自分も行末永く此の家に通つて仕へ奉らうの意。君が永く此の宮に坐しますと共に、將來自分も永く通つて仕へ奉らうと言つて、新築の宮を祝賀する句で歌ひ收めたのである。

【譯】大君の遷都の勅命を畏まつて、久しく住み馴れた舊都の家を後にして、泊瀬川に舟を浮べて漕ぎ行く川の曲り目に來る毎に、幾度か後をかへり見ては、名殘を惜しみつつ行くうちに日は暮れて、やがて寧樂の都を流れる佐保川に行き著いて、一夜を明して自分の寢てゐる夜著の上から、有明月の光にはつきり見ると、白栲のやうに夜の間に置いた霜が眞白く見え、川には岩床のやうに氷が一面に張りつめてゐる、かやうな寒い夜も休む事なく通ひながら造つた此の家に、遷り給うて千代の後までも變る事なく坐しませ、我が仕へ奉る君よ。私も末永く通つて、此の宮にお仕へ申し上げませう。

【評】此の歌は最初に、勅命の儘に人々が新京に居所を移す事から歌ひ起し、藤原から寧樂まで通ふ道筋を敍し、次に冬の寒い日も厭はず通つて造營に從事した勞苦を歌ひ、最後に宮が出來上つて其の新築を壽ぐ言葉で結んである。一首の中「我が寢たる」以下の冬の曉の景を敍した部分は、印象的に巧みに表現せられてゐる。守部は檜嬬手に「通ひつつ作れる家」とあるから、此の作者は木工頭で、作つた家は高貴の方のであらうと云つてゐる。上古では建築が終ると、親族知人を招いて新室を壽ぐ爲に宴を張る風習があつた。此の作はさういふ場合の歌であらうと思はれる。次に此の歌を誦んで特に感を深うする事は、滄桑の變の著しい事である。初瀬川といひ佐保川といひ、今日は何れも川幅僅かに二三間に過ぎない流で、而も川床が高くなつてゐるが、此の歌などを見ると、當時は川幅も廣く水量も豐富で、舟を通ずるに十分であつたと見える。なほ當時は高圓山を始め佐保山・佐紀山の如

きも今と異なつて、春日山と同様に鬱蒼たる森林で蔽はれてゐたものと思はれる。從つて高圓山の紅葉佐保川の千鳥佐紀山の櫻生駒山の鹿の聲等、四時の風物が頻りに歌人の情緒を動かしたのも偶然でなく、平城京裏は四周の雄大な風光と共に、花鳥風月の優美な景趣をも備へてゐた事が想像せられるのである。

反歌

八〇　青丹よし　寧樂の家には　萬代に　吾も通はむ　忘ると思ふな
青丹吉　寧樂乃家爾者　萬代爾　吾母將通　忘跡念勿

右歌主未詳

【釋】○寧樂の家　「家」は前に「通ひつつ作れる家」と歌つた其の家で、寧樂の新京に造つた作者の主人の家である。○萬代に吾も通はむ　長歌の結尾句の「千代までに來ませ王よ吾も通はむ」に對して、少しく語を變へて歌つたのである。○忘ると思ふな　四句までで一旦歌ひ切つて、更に此の一句を添へたのである。此の句の意味は考に「今よりは長く親しみ通はんに、うとぶる時あらんとおぼしそとなり」と解き、又古義に「今こそあれ末はいかがと主人は思ふべけれど、さらにさる心にあらず、千代萬代までもかはらずここに通ひ來むと思ふぞ、忘ることありと思ひ給ふなとなり」と解いて居る通りである。

【譯】新たにお造りになつた寧樂の此のお家には、いついつまでも變らず、私も通つてお仕へ申しませう。決して君の御事を忘れるやうな事があると思つて下さいますな。

和銅五年壬子夏四月、遣長田王于伊勢齊宮時、山邊御井作歌

八一　山邊の　御井を見がてり　神風の　伊勢處女ども　相見つるかも
山邊乃　御井乎見我氐利　神風乃　伊勢處女等　相見鶴鴨

【釋】○和銅五年云々　此の事は續日本紀に載つてゐない。○長田王　古寫本の訓には多くはヲサダノオホキミと訓んでゐるが、ナガタと訓む説もある。續日本紀に長田王は三人見えてゐる。其の一人は和銅四年夏四月の條に「從五位上長田王授正五位下」とある方で、其の後近江守衛門督攝津太夫に歴任せられ天平九年六月に卒した方である。而して攷證には天武天皇の皇子なる長親王の御子であらうと言つてゐる。今一人は續紀天平十二年十一月の條に、「甲辰授從四位下長田王從四位上」と見える人である。從つて此所の長田王は其の孰れであるか明確でない。○伊勢齊宮　「齊宮」はイツキノミヤと訓む。正しくは「齋宮」と書くのであるが、古義に云ふ如く「齊」と「齋」は古くは通用せられたのである。「齋宮」は神宮に奉仕せられる齋王の坐します宮をいふ。齋王は天照大御神の御杖代として、神宮に仕へ奉る未婚の皇女又は女王であつて、其の任期は天皇御在位の間と定められ、御代が更れば新たに齋王を卜定し給うたのである。齋王を置かれたのは崇神天皇の御代から後醍醐天皇の御代に至るまでであつて、此の間七十二代(重複を除く)の齋王をお立てになつた。齋宮は齋宮寮の管下にある。齋宮寮の舊址は今の伊勢國多氣郡齋宮村大字齋宮(宇治山田市の西北二里半)である。○山邊御井　卷十三に「山邊の五十師の原にうち日さす大宮仕へ云々」(三二三四)と歌つた長歌の反歌に、「山邊の五十師の御井はおのづから成れる錦を張れる山かも」(三二三五)とあるのと同じ御井である。是に就いて宣長は『玉勝間』卷三に、此の御井の跡を伊勢

國鈴鹿郡石薬師驛の東北方に當る山邊村であると述べ、此の說が通說となつてゐる。其の地は今の河藝郡河曲村大字山邊(四日市市の西南二里半、鈴鹿川の北岸の地)であつて、現に山邊の御井と傳ふる井が存し大井神社が祀つてある。一說に山田博士は河曲村大字山邊は、當時の大和から伊勢神宮への下向の順路より北方約十里隔たる地であるから、此の說は信じ難いとし、更に『御鎭座本紀』に豐受大神が伊勢に遷り給ふ時の順路を記した中に、「次山邊行宮御一宿(今號壹志郡新家村是也)」とあるのを擧げて、山邊を壹志郡新家村(今の一志郡桃園村大字新家の地)とする時は、順路と地理がよく一致する旨を述べて居られる。(『萬葉集講義』卷第一、三六七頁參看)さて此の御井は、當時神宮への行幸や齋王の群行(齋王が神宮へ赴き給ふ時の行列)などの時に、一宿せられる爲に設けられた頓宮に在つたものであらう。

○御井を見がてり　御井の事は既に說いた。「見がてり」の「がてり」は、今いふ「がてら」と同じ接尾語である。集中に「がてり」と「がてら」と兩方とも用例がある。例へば「穗向見我底利」(三九四三)「片待ち我底良」(四〇四一)の如くである。○神風の　「伊勢」の枕詞。『伊勢國風土記』の逸文(『仙覺萬葉抄』所引)に、伊勢國を領有した伊勢津彥が其の國土を神武天皇に獻る時、夜半に大風を起し波濤を立たせて、信濃國へ移つた事が見えてゐて、其の最後に「古語云三神風伊勢國一者蓋此謂之也」とある。併し既に代匠記にも論じてゐるやうに、「神風の伊勢」といふ語は、神武天皇の御製(古事記所載)の中にも見えてゐるから、右の記述は信ずるに足らぬ。冠辭考に「神風の息」といふのを省いて、「い」の一音に言ひ掛けたのであると解いたのは稍穩當である。神代紀に風神の名を級長津彥命・級長戶邊命としてゐるのは、「級長」は息長の義であつて、此の神の息氣が卽ち風であると考へたのである。又息氣を古語に「い」と言つたことは、古事記神代卷の「吹棄氣吹之狹霧」や、大祓の詞の「氣吹戶」などの「氣」といふ語の存在する事によつて明かである。從つて「神風の」は、息の古語の「い」から「伊勢」に言ひ懸けたものであるとする眞淵の說が、從來現れた諸說の中では最も穩當である。併し卷二にある人麻呂の長歌(一九九)に、伊勢神宮が神風を吹かせ給うた事が見えて居り、また神宮內に風日祈宮(俗稱風宮)を古くから鎭祭して、七月朔から八月の晦まで、日毎に風雨の災害の無き事を祈る神事があつた事などを參考すれば、「神風の」は伊勢神宮と關係のある語として說明せられるやうにも思はれる。○伊勢處女ども　流布本にイセノヲトメラと訓んであるが、略解にイセヲトメドモと訓んだのがよい。地名を直ちに「處女」に冠した例は、集中に「泊瀨處女」「可刀利處女」「菟名日處女」等がある。此の「伊勢處女」を代匠記に、其の御井の水を汲む美女を指したものと見て居り、考略解・古義等も亦美しい處女と見て居る。其の他攷證には齋宮の宮女とし、美夫君志には京の處女と異なつた風俗の伊勢處女を、興味を以て眺めたのであると解き、講義には其の宮に奉仕する宮女、殊に水部の女孺であらうと述べてある。要するに上に「御井を見がてり」とあるから、此の處女は御井の水を汲みに來た者共であるらしく、又其の處女は特に「伊勢處女」と歌はれて居る點から考へると、頓宮の附近の美しい少女達であつたであらうと思はれる。「伊勢處女ども」の下には助詞の「を」があるべき所である。○相見つるかも　逢つたことであるの意。

【譯】御使として山邊の頓宮に來て、かねて聞き及んでゐた御井を見るつもりで立ち寄つた所、思ひもかけず美しい伊勢の處女までも見たことである。

【評】由緖のある頓宮の冷泉のほとりに、風俗の變つた地方の村孃を見て詠んだ作である。其の情景を想像すると、

旅中に在つて御井も又併勢處女も見ることの出來た、其の滿足の氣持が表れてゐて面白い。是と相似た感情を歌つた作に「燒津邊に吾が行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし兒らはも」(二八四)がある。

八二　うらさぶる　情さまねし　ひさかたの　天の時雨の　流らふ見れば

浦佐夫流　情佐麻彌之　久堅乃　天之四具禮能　流相見者

【釋】○うらさぶる　前に(三三〇)の「うらさびて」の所に解いた通り、「うらさぶ」は心が淋しくなつて慰めやうのない狀態になるのをいふ。「うらさぶる」は動詞「うらさぶ」の連體形で、次の「情」に懸る。○情さまねし　「佐麻彌之」の「彌」は代匠記精撰本に云ふ如く「禰」の誤であらう。「さまねし」の「さ」は「さ遠み」「さ走る」「さまよふ」「さ渡る」などの「さ」と同じく、音調を整へる爲の接頭語で、「まねし」は後の「あまねし」に當る形容詞である。而して「あまねし」の「あ」も亦接頭語である。「まねし」の用例には「君が使の麻禰久通へば」(七八七)「朝暮に聞かぬ日麻禰久」(四一六九)又「さまねし」の用例には「月重ね見ぬ日佐末禰美」(四一一六)などがある。意味は繁く多い義であつて、上の句から續けて解くならば、頻りに寂しい情がつのる意である。○ひさかたの　「天」の枕詞。其の他轉じては、「空」「光」「雨」「日」「月」等の天象に關する語の枕詞として用ゐる。其の意義の解釋には諸說があつて未だ定說を見ない。試みに主なる說を擧げるならば(イ)久堅の義で、天は永遠に變らぬ意であると云ひ(燭明抄・代匠記)、(ロ)久方の義であると云ひ(僻案抄)、(ハ)天は丸く空虛で瓠に似てゐるから、瓠形の天といふ意であると云ひ(冠辭考・冠辭考續貂)、(ニ)日刺方で日のさす方の義である(槻落葉別記)とも言はれてゐる。要するに語義に就いてはなほ考究を要する。○天の時雨　天から降り來る時雨の義。時雨は晩秋初冬の頃の、降りみ降らずみの雨をいふ。○流らふ見れば　訓は考に據る。「流らふ」は「流る」に繼續作用を表す助動詞の「ふ」が添つた語形である。此の「ふ」は既に述べた通り、四段活用動詞の未然形を承けて、四段に活用するのが通例であるが、此所は下二段活用の「流る」に附き、而も下二段に活用してゐるのであつて、「ふ」の特殊な用法である。「流る」は水平に移動する時ばかりでなく、垂直に移動する場合、卽ち雨や雪などの降ることをも云ひ、又時には花の散るのも「流る」と歌つてゐる。例へば「天より雪の那何列來るかも」(八二二)「沫雪かはだれに降ると見るまでに流倍散るは何の花ぞも」(一四三〇)などの如きである。

【譯】空から時雨が降り續くのを見て居ると、さらでも遣る瀨なく寂しい旅の憂ひが、ますます繁くなるばかりである。

【評】此の歌と次の歌とは左註に「右二首今案不レ似二御井所一作云々」とある如く、前の御井の歌と同じ時の作でない事は明かである。併し作者は御井の歌の作者と同じ人であらう。時雨の降る憂鬱な空を仰いで、寂しさをかこつ作者の心情が調の上によく表れて居る。一首の音調が美しい流をなして居るのは、ラ行音サ行音などが頻繁に現れて來る爲である。

八三　わたの底　沖つ白浪　立田山　いつか越えなむ　妹があたり見む

海底　奥津白浪　立田山　何時鹿越　奈武　妹之　當見武

右二首今案不レ似二御井所一作。若疑當時誦二之古歌一歟。

【釋】○わたの底　「沖」の枕詞。「わた」は海の義であり(前出)、「底」は上下の極まる所を指すばかりでなく、平面的に遠くの果をも指していふ。ここは海の遠き彼方を指して、「沖」の枕詞としたのである。「おき」(沖)は「おく」(奥)の轉じた語である。○沖つ白浪　沖に立つ白浪の義で、「立つ」といふ意から同音の「立田山」に懸けて枕詞としたのである。講義に此の句を沖の方より寄せ來る浪と解かれたのは妥當でない。さて「わたの底沖つ白浪」の二句は「立田山」を導き出す序である。○立田山　「立田」は「龍田」とも記す。「立田」は大和國生駒郡龍田町及び其の西の王寺町を總稱した地名であつて、龍田山は王寺町大字立野の西に在る一帶の山で、信貴山の南方に當る。今は此の山名は用ゐられてゐない。龍田山の南麓を大和川の南岸に沿うて、河内國中河内郡へ越す峠道が通じて居る。當時は此の立田越を經て河内に出て、それから難波に行くことになつてゐたから、立田山は集中の旅の歌に屢歌はれてゐる。さて「立田山」の下には助詞の「を」を補つて解くべきである。○いつか越えなむ　「か」は疑問の助詞であり、「なむ」は未來完了を表す助動詞である。いつあの立田山を越える事が出來るであらうかといふ意。○妹があたり見む　此の歌は四句目で切れてゐる。從つて此の句は上を承けて、早くあの立田山を越えて、妻の家の邊を見たいと思ふといふ意味を表す。立田山から妹の住む家の邊が見えるといふのではなく、立田山を越えたならば、遙かに愛妻の住む里の邊を望む事が出來るので、かう詠んだのである。○右二首云々　此の左註に云ふ如く、右の二首は御井を見ての作とは別の時に詠まれたものである事は明かである。又左註に疑ふらくは當時古歌として諷誦した作であらう、と云つて居るのも一應尤もであるが、既に諸註に見えてゐる通り、恐らくは長田王の作歌であらう。併し題詞が無いから如何なる場合の作であるかは詳かでない。

【譯】何時になつたらかの立田山を越えることが出來るであらうか。早くあの山を越えて、懐しい妻の家の邊を見たいものだ。

【評】初句から三句までが體言の連續である事、四句目と五句目とを歌ひ切つてゐる事、一首の上に堅い感じのする夕行とカ行の音が多く響いて來る事などが、此の歌の格調上の著しい特徴である。此等によつて一首の聲調は自ら流暢でなくなる筈であるが、實は反對に快い響が傳はるのは、母音のアとオが連續的に響くのと、タ行カ行の音の間に、マ行ナ行の音が介在して音調を和げてゐる爲である。

萬葉集卷第二

解説

【組織】巻第一が全部雑歌を集めた巻であるのに對して、此の巻の前半には相聞の歌を、後半には挽歌を收めてある。作品の排列法は巻第一と同一方針であつて、相聞の部は、「難波高津宮御宇天皇代」(仁德天皇朝)、「近江大津宮御宇天皇代」(天智天皇朝)の順序に、それぞれ天皇の御代を標記して其の御代の歌を掲げ、又挽歌も「後崗本宮御宇天皇代」(齊明天皇朝)から「寧樂宮」に至るまでを標記して、それぞれの御代の作品を年代順に排列してゐる。【時代】作品の時代は相聞・挽歌を通じて仁德天皇の皇后の御歌を最古とし、元正天皇の靈龜元年の作に至るまで、前後約四百年間に亙つてゐるわけである。尤も巻頭に掲げた仁德天皇の皇后(磐姫皇后)の御作と傳ふる四首は、皇后の御作として傳誦せられてゐたものであつて、必ずしも皇后の御歌であるとは信じ難いから、確實な所は齊明天皇の四年から靈龜元年まで六十年足らずの間の作である。なほ挽歌の一小部分には題詞に作歌年月の記載がある。要するに此の巻の歌は、殆ど全部巻第一と同樣に、近江・飛鳥・藤原朝時代の作品である。【作者】作者は大部分は巻第一と同樣に皇室の方々であつて、上は天智天皇・天武天皇・持統天皇を始めとし、天智天皇の皇后倭姫・有間皇子・高市皇子・大津皇子・日並皇子・舍人皇子・長皇子・弓削皇子・穗積皇子・大伯皇女・但馬皇女・鏡女王・額田王があり、又臣下には藤原鎌足・柿本人麻呂・長奥麻呂・三方沙彌・久米禪師・石川郎女等の諸歌人がある。歌の最も多いのは人麻呂で、其の作品が長歌十首(異傳の歌二首を含む)短歌二十二首(異傳の歌四首を含む)を占めて居る。【歌數】歌數は總計百五十首で、其の中相聞が長歌三首(異傳の歌一首を含む)短歌五十三首(古事記の歌謠一首異傳の歌二首を含む)であり、挽歌が長歌十六首(異傳の歌一首を含む)短歌七十八首(異傳の歌四首を含む)である。【編纂】巻第一の條に述べた通り、此の巻は巻第一と共に同一編纂者の手に成つたものと覺しく、而も其の編纂の時期は種々の事情から推して、奈良朝初期であらうと考へられる。【用字法】巻第一と同樣で、主として漢字の正訓と正音とを併用して書き記し、なほ略音及び借訓をも諸處に用ゐてある。【歌風】相聞は主として對人的の愛情を、挽歌は人の死に對する哀慟の情を素材とするのであるから、相聞と挽歌とから成る此の巻に、眞率なる感情の流露した作品の多い事は當然である。而して此の巻の作品は概ね奈良朝以前の素朴な歌であるから、率直な力强い表現法を用ゐた歌が多いことは巻第一と同樣である。藤原朝の代表歌人人麻呂の作は、此の巻を通じて異彩を放つてゐる。殊に彼の作に係る對句や枕詞を豐富に用ゐた、堂々たる數篇の長歌の挽歌は、何れも哀情切々たるものがあつて、集中の傑作たるを失はない。かの萬葉集中の最大雄篇たる高市皇子尊城上殯宮の時の人麻呂の作歌は、此の巻の挽歌の部に收められてゐる。

相聞

難波高津宮御宇天皇代

大鷦鷯天皇

磐姫皇后思二天皇一御作歌四首

八五　君が行　日長くなりぬ　山尋ね　迎へか行かむ　待ちにか待たむ
君之行　氣長　成　奴　山多都禰　迎　加將行　待　爾可將　待

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉。

【釋】○相聞　從來之をアイキキ(童蒙抄)、アヒギコエ(考)、シタシミウタ(古義)などと訓讀してゐたが、寛永本にサウモムの假名を振り、又『犬鷄隨筆』及び美夫君志に、大須本(名古屋市眞福寺の所藏であつて、「正中二年四月廿日以二藤大納言爲世卿本一書寫訖云々」の奥書がある)にサウモムの假名があるのを證として、古くから字音で唱へたものであると言つて居る。次に「相聞」の文字の典據並に之を音讀すべき理由については、山田孝雄博士の「相聞考」(『心の花』二十八卷二號所載)に詳かである。同氏は此の語の出典を『漢書』『搜神記』『文選』『玉臺新詠』其の他の諸書から求め、且此等の書に於ける用法から歸納して、「相聞」は往復存問の義を表す語である事を明かにし、而して此の語は用にしては消息を通じ意見を交換するの義で、體にしては往來の信書の意であると解かれた。なほ我が國に於て此の語を用ゐた最古の文獻は、聖德太子の御撰である『勝鬘經義疏』であるとし、萬葉時代には通用の語として字音のままで用ゐられたのであつて、「あひぎこえ」の如き國語があつて、それに當てた文字ではない事を詳かにせられた。卽ち「相聞」は問答歌といふが如き名稱であつて、男女間の贈答卽ち戀歌のみに限らず、廣く親子・兄弟・姉妹・朋友などの間の往復贈答の歌を一括した名稱として用ゐられたのである。○難波高津宮御宇天皇代　仁德天皇の御代である。「難波」は後の攝津國の古名で、今の大阪市を中心とする地域の舊名である。「高津宮」は日本書紀の仁德天皇の條に、「元年春正月丁丑朔己卯、都二難波一、是謂二高津宮一」とある。其の舊蹟は、後世地形の變遷が甚だしい爲素より明かでないが、今の大阪城の邊の高臺に當ると云はれて居る。○大鷦鷯天皇　「難波高津宮御宇天皇」の註記であつて、卽ち仁德天皇である。此の天皇がまだ皇子であらせられた時の御名を大鷦鷯皇子と申したのを、やがて天皇の御名にも唱へ奉つたのである。○磐姫皇后　古事記には「大后石之日賣命」と記して居る。葛城襲津彦の御女、武內宿禰の御孫であつて、仁德天皇の皇后となり、履仲・反正・允恭三天皇の御母であらせられた。「皇后」はオホキサキと訓む。后の中の嫡后を特に「大后」と申したのであつて、皇太后の意ではない。○思二天皇一御作歌四首　「天皇」は仁德天皇である。此の四首は此の集には磐姫皇后が、仁德天皇を偲び奉つて詠ませられた御歌として傳へて居るが、果して皇后の御歌であるかは疑はしい。此の事に就いてはなほ後に述べる。

○君が行　「ゆき」は「旅行」「御幸」「道行」などの「ゆき」と同じく、「行く」の連用形を名詞に用ゐたのである。此の外にも「吾が行は久にはあらじ」(三三五)「君が往もし久ならば」(四二三八)などの用例がある。動詞から名詞を造ることは、上代に於ては比較的自由に行はれた。「君が行」は天皇が何處かへ行幸になつて居る事を指し給うたのである。○日長くなりぬ　日數を多く經たといふ意。「け」は「朝に食に常に見れども」(三七七)「長き氣を待ちかも戀ひむ」(四三三一)「草枕此の旅の氣に」(三三四七)などの「け」と同じで、日の意である。「三日」「五日」などの「か」、又「暦」(日讀)の「こ」は此の「日」の轉訛である。古事記傳に「日」は「來經」の約まつた語であると解いてゐるが從ひ難い。○山尋ね　「山多都禰」を流布本にヤマタツネ(代匠記・攷證・古義・註疏等同訓)と訓み、童蒙抄に「禰」

を「能」の誤としてヤマタヅノ（略解・新考同説）と訓み、美夫君志に「禰」にノの音があると云つて、原文の儘をヤマタヅノと訓んで居る。ヤマクヅノと訓む説は、左註に引用してゐる古事記の歌に「山多豆乃」とあり、又本集巻六に「山多頭能迎へ參出む君が來まさば」（九七一）とあるのに據るのであるが、今は原文を尊重して流布本の訓のままにヤマタヅネと訓んで置く。「山尋ね」は山の中を尋ねての意である。此の句を「やまたづの」と改めれば「迎へ」の枕詞となる。其の場合の語義は（九七一）に解く事にする。○迎へか行かむ　お迎へに行かうかの意。「迎へか」の「迎へ」は名詞で、下に「に」があるべき所である。「か」は疑問の助詞。○待ちにか待たむ　「待ちに待たむか」といふのと同じ。「待ちに待つ」の「待ちに」は、下の「待つ」を修飾するのであつて、其の動作が專ら行はれる意を強く表したのである。是と同樣の語形を用ゐた例に、「ここだくも狂ひに狂ひ思ほゆるかも」（七五一）「春されば」をりにをり鶯の鳴く」（一〇一二）などがある。○右一首歌云々　此の左註の意味は、右の一首は憶良の『類聚歌林』にも磐姫皇后の御歌として載せてあるといふのであつて、是は此の巻の編纂後に加へられた註であらう。『類聚歌林』に就いては（一八）參照。

【譯】我が君がお出まし遊ばしてから多くの日數を經ました。山を尋ねてお迎へに參らうか、それとも何時までもかうしてお待ち申して居らうか。早くお歸り遊ばせばよいに。

【評】お迎へに行かうか、お待ち申して居ようか、何れにすべきかと御心を定めかね給うた御歌ではあるが、結局お待ち申してゐるより外はあるまいと諦め給うたのであつて、切な御思ひがよく現れて居る。此の御歌は古事記には第三句以下が、「やまたづの迎へを行かむ待つには待たじ」となつてゐて、作者を輕大郎女（衣通王）とし、御兄なる木梨之輕王が罪によつて伊豫國に流され給うた時に、兄君をお慕ひになつて歌はれた作としてゐる。古事記と萬葉とによつて、作者を異にする此の類歌に就いては種々の説がある。考には此の集のは『類聚歌林』に古事記の歌を誤り傳へてゐたのに基づく後の僞入であるとして、集から之を除いて居る。古義には此の御歌は古事記の歌を誤り傳へたものであるとし、又美夫君志には元來異なる二首の歌であつて、相似てゐるのは暗合であるとして居る。又澤瀉氏は此の歌は古事記の類歌の異傳であつて、兩者の異同は既に萬葉集編纂以前に發生してゐたのであつて、此の異傳の歌は他の三首と共に、皆磐姫皇后の御作ではなくして、萬葉集の編纂以前に斯樣に傳へられてゐたものと解釋すべきであらうと云はれた。（『國語國文の研究』第十七號所載「上代歌謠鑑賞の態度」參照）最後の説は最も傾聽すべきもののやうに思ふ。

八六　かくばかり　戀ひつつあらずは　高山の　磐根しまきて　死なましものを
如此許　戀乍不有者　高山之　磐根四卷手　死奈麻死物乎

【釋】○かくばかり　「ばかり」に就いて『奈良朝文法史』に、「或點を指示し他の類似せる事情と區別す」と説いてある。「いかばかり」の「ばかり」も是と同じである。此のやうにといふ意を強く表した句である。○戀ひつつあらずは　「ずは」は「ずば」ではない。ズバと訓んで否定の助動詞「ず」の未然形に、假設條件を表す助詞の「ば」を添へたものと見る時は、一首の意味は通じなくなる。宣長の『詞の玉緒』以來諸註に、此の歌の場合をズバと訓んで、「何々せんよりは」の義であると解いたのであるが、これは熊谷直好の説（拾解所引）や黒澤翁滿の『言靈指南』の説な

どに從つて、否定の助動詞に輕く「は」を添へた一種の古格であつて、何々せず又は何々せずしての意を表すものと見るべきである。此の「ずは」に就いては橋本進吉博士が、嘗て「奈良朝語法研究の中から」(『國語と國文學』第九號所載)なる論文中に詳論せられた。同氏は「ずは」の適例として、卷二十の「たちしなふ君が姿を和須禮受波世の限にや戀ひわたりなむ」(四四四一)を擧げて、「忘れずは」の「ず」は必ず連用形であつて、それに「は」が附いた場合はただ「は」の意味が附け加はるだけで、連用形それ自身の意味職能は少しも變化しない。從つて連用形をとつて居る「ず」の他の語に對する關係は、「は」があつても無くても何等の相違を來さない事は、「過ぎは行けども」「善くはあらず」「賜ふべくはあれど」などの如き場合と同じである事を明かにせられた。即ち「戀ひつつあらずは」は「戀ひつつあらず」と大體同じ意味になるのであるから、これほどに戀ひてばかり居ないで、と譯すべき語法である。なほズハと訓んで何々せずしての意に取るべき例は、他に「後れ居て戀ひつつ不有者追ひ及かむ」(二一五)「長き夜を君に戀ひつつ不生者喚きて散りにし花ならましを」(三八二)などがあり、又「我が袖は袂通りて濡れぬとも戀忘貝取ら受波行かじ」(三七一一)「布勢の浦を見受波上らじ年は經ぬとも」(四〇三九)などの「ずは」も、同樣に、すしてはの意味に解くべきである。○磐根しまきて　「磐根」は既に出た。「根」は接尾語。「し」は強く指示する助詞。「まきて」は枕にしての意。此の「まく」の用例には「大和女の膝麻久どとに」(三四五七)「枕を離けず卷てさ寢ませ」(六三六)などがある。是は元來「卷く」と同じ動詞で、枕とする意である。名詞の「枕」は此の「まく」から派生した語であるが、更に「まくら」を語幹とし、それをカ行四段に活用させたのが「まくらく」といふ動詞である。其の用例には「聲知らぬ人の膝の上吾が摩久良可む」(八一〇)などがある。「まくらく」も亦枕とする意である。さて此の句を考に「葬りてあらんさまをかくいひなし給へり」と言ひ、(略解攷證美夫君志同說)なほ講義には古貴人を葬る際には、石槨を構へ石棺に納め石枕をして安置したからであると解かれた。然し此の句は古義や新考の說のやうに、言葉通りに解いて、磐を枕に死ぬるといふのは、野山に行き斃れとなつて死ぬる意に解くべきである。人麻呂が石見國で死に臨んで歌つた作に、「鴨山の磐根しまける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ」(二二三)とあるのを參考すべきである。○死なましものを　「まし」は非現實的な動作狀態を假想する意の助動詞。活用は未然形に「ませ」、終止形及び連體形に「まし」がある。ここは連體形。「ものを」は「もの」と、感歎の意を表す助詞の「を」とから成つてゐて、強い感動を表現する時に用ゐる。即ち「死なましものを」は死んでしまはうものをの意であつて、「死なまし」といふより遙かに感動を強めた表現法である。

【譯】これ程までに戀ひ續けてゐないで、いつそのことお後を慕つて、險しい山路の磐を枕に斃れ死にをして、死んでしまひたいと思ふ。

【評】遣る方もない悶々の情と、燃ゆるばかりの熱烈な至情が迸り出て一首となつた歌である。「高山の磐根しまきて」の強い響や、「死なましものを」の熱情によつて、如何にも切實な感情がよく現れて居る。人氣ない野山を尋ね廻つて行き斃れとなつても、戀ひつつ待ちわびる苦しさよりはましであるといふ所に、苦しい思慕の情が切實に現れてゐるのである。是に較べると、大伴家持の作「かくばかり戀ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして」(七二二)には、實現不可能の事柄を假想して居る所に觀念的な作爲的な跡が見えるが、右に講じた歌は何處までも眞率なる感情の現れである。

八七　ありつつも　君をば待たむ　打ち靡く　吾が黒髪に　霜の置くまでに
在管裳　君乎者將待　打靡　吾　黒髪爾　霜乃置　萬代日

【釋】○ありつつも　代匠記・考・攷證・美夫君志等に、此の歌を前の作と關聯させて、思ひに堪へて生き長らへてといふ意に解いて居るが、下にある「或本歌曰」（本書には省いた）の第一句が「居明して」となつてゐて、寢ずに夜を明す意であるのを參酌すると、此の「ありつつも」は略解・古義・新考等の說の如く、此の儘にしてゐてといふ意に解くのが穩當である。○打ち靡く　冠辭考・攷證・美夫君志などに之を「黒髪」の枕詞と見てゐるのは穩かでない。「黒髪」に懸る形容的修飾語である。「打ち」は接頭語。○霜の置くまでに　此の句を攷證・檜嬬手・美夫君志・講義等に、黒髪が白くなるまでの意としたのは穩かでない。古義及び新考の說の通り、夜が更けて黒髪に霜が置くまでも內へ入らずして、君の還り來給ふのを待ち奉らうといふ意味に解くべきである。集中には白髮になる事を霜雪などの譬喩によつて歌つた例もあるが、此の御歌に對する「或本歌」に「居明して君をば待たむぬばたまの吾が黒髮に霜は降るとも」（八九）とあり、又卷十二に「君待つと庭にし居れば打ち靡く吾が黒髮に霜ぞ置きにける」（三〇四四）と歌はれて居るのを見ると、此の場合は黒髮の上に霜を置くまでの意である事は明かである。「置くまでに」の「まで」は、動作或は狀態の及ぶ程度の極限を示す助詞で、「に」は其の動作の歸著點を示す。

【譯】この儘かうしてゐて君をお待ち致さう。此の私の黒髮の上に、白い霜を結ぶ時までもお待ち申して居らう。

【評】前の御歌は、寧ろ死んだ方がましであるとまで、お思ひになつた時にお詠みになつたものであるが、此の御歌は又更に思ひ直して、夜が更けて曉近くなるまでも、屋外に佇んで待ち奉らうと決心せられた時の心情をお歌ひになつたものである。前の御歌と同時の連作ではなからうが、此の二首を對照して見ると、感情の移動もあつて、共に感銘が深い。

八八　秋の田の　穗の上に霧らふ　朝霞　いづへの方に　我が戀やまむ
秋之田　穗　上爾霧相　朝霞　何時邊乃方二　我　戀將　息

【釋】○穗の上に霧らふ　「穗」は稻穗の意。「霧らふ」は「霧」に對する動詞の「霧る」に、作用の繼續を表す助動詞の「ふ」が附いた形である。「霧る」は前に說いた通り、霧や霞が立ち籠める意。○朝霞　朝立ち籠めてゐる霞。後世は春には霞と言ひ、秋には霧と言つて、春秋によつて名稱を區別するのが普通であるが、萬葉には秋に霞と歌つた例が幾らもある。例へば卷八の七夕の歌に、「霞立つ天の河原に君待つと」（一五二八）と歌ひ、又卷十の秋相聞に、「朝霞飼屋が下に鳴く蝦」（二二六五）と歌つてゐる。○いづへの方に　何れの方にの意。「いづへ」の「いづ」は不定稱代名詞で、何處の意に用ゐられる事は前に述べた。此の「いづ」に處の意を表す接尾語の「く」或は「こ」を添へたのが「いづく」「いづこ」で、是は代名詞「こ」（此）「そ」（其）に同じ接尾語を添へて「ここ」「そこ」と言ふのと同じ關係である。「いづへ」の「へ」は「後方」「行方」「退方」などの「へ」と同じく、方角を表す接尾語である。從つて「いづへ」は何れの方といふ意になる。其の用例には「時鳥伊頭敝の山を鳴きか越ゆらむ」（四一九五）がある。（「いづへ」と同じく不定の方角を示す代名詞に「いづち」がある。）さて「いづへの方」は重複した言ひ方であるが、意は「いづ方」と同じである。○我が戀やまむ　第四句の「いづへの方に」から讀み續けて見ると、「やまむ」といふ語が

多少異樣に聞えるので、此の句は種々に解釋されてゐる。新考には集中に思ひを遣ると歌つた例の多い點から推して、「將息」は「將遣」の誤であらうと云つて居られる。併し何れの古寫本にも「將息」と記されて居るから、誤字と見るのは妥當でない。今は原の儘にして、第四句の下に思ひを遣つたならばの如き意味を補つて、第五句の意を我が此の戀が止むであらうと解いて置く。さて此の歌の三句までは、眼前の景色を述べて、思ひの晴れない事の譬喩に用ゐたものである。

【譯】秋の田の稻穗の上に一面に立ち籠めてゐる朝霧のやうに、晴れやらぬ此の胸の思ひを、いづれの方に晴らし遣つたならば、私の苦しい戀は止むであらうか。

【評】廣茫たる稻田の面に霧が立ち籠めてゐて、泣きたくなるやうな朝景色の中にお立ちになつて歌ひ給うたものと思へば、此の一首の妙味が容易に了解せられる。此の場合は朝霧は譬喩であると同時に、夜もすがら悶々の情を抱いてやつと明け離れた朝に、屋外に立ち出で給うた時の、皇后の御胸中を其の儘に示した象徴でもある。戀を歌つた歌は古今を通じて限なくあるが、以上の四首の如く貞淑にして純情、而も熱情の迸り出るやうな力强い歌は尠いのであつて、此等は上古の歌風の特徴を代表するものである。

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

内大臣藤原卿娉二鏡王女一時、鏡王女贈二内大臣一歌一首

九三　玉櫛笥　覆ふを安み　明けて行かば　君が名はあれど　吾が名し惜しも

玉匣　覆　予安美　開　而行　君　名者雖　有　吾　名之惜　毛

【釋】○近江大津宮御宇天皇代　天智天皇の御代である。（既出）○内大臣藤原卿　藤原鎌足である。「卿」（前つ君の義）は尊稱。○娉　「娉」は考にツマドヒと訓んである。卽ち「娉」の字義は娶で、古語の「妻問」に當る。○鏡王女　考に「鏡女王」の誤であるとし、其の後の諸註は考の說に從つてゐるけれども、諸本に悉く「鏡王女」と見え、目錄にも同樣に記してあるから誤ではない。「鏡王女」は鏡王の女の義で、額田王の御姉なる鏡女王である。鏡女王は始め天智天皇の寵を蒙つてゐたが、後に鎌足に賜はつて其の嫡妻となつた人である。鏡女王が鎌足の嫡妻となつた事は、『興福寺緣起』に「至二天命開別天皇卽位二年歲次己巳冬十月一、内大臣枕席不レ安、嫡室鏡女王請曰云々」とあるのに據つても明かである。日本書紀に鏡女王は天武天皇の十二年七月五日に薨ぜられたとある。○玉櫛笥　「玉」は美稱の接頭語。「櫛笥」は櫛を入れる器の義であるが、櫛に限らず凡て婦人の化粧道具を入れる箱をいふ。「笥」は食器その他一般に容器をいふ。「桶」（麻笥卽ち績んだ麻緒を入れる器の義）「土器」（瓦笥の義）などの「け」がそれであり、又「聽」「平瓮」などの「か」も其の「け」の轉訛である。さて櫛笥には蓋があるから、「玉櫛笥」を「ふた」「開く」「身」などの枕詞に用ゐるが、ここでは其の蓋を覆うたり開けたりするのがた易いといふ意によつて、初の二句を「明けて」の序詞に置いたのである。○覆ふを安み　櫛笥は蓋で覆ふ事がた易いのでといふ意。從つて開ける事も容易であるといふ意味で、次の「明けて」に懸る序になつてゐる。「安み」は前に出た「痛み」「茂み」「遠み」などと同じ語形であつて、一句は副詞的修飾語になつてゐる。○明けて行かば　「行者」を元暦校本

及び略解檜嬬手等にイナバと訓んでゐるが、流布本の訓のユカバの方がよい。夜が明けてからお歸りになつたらばの意。○君が名はあれど　君の浮名の立つのはさることながらの意。卽ち君は男のことであるから、浮名が立つてもさほどにも思し召すまいから、それは別としてもといふ意である。○吾が名し惜しも　「吾が名し」の「し」は强く指示する助詞。「も」は感動助詞。私は女の身であるから名の立つのが惜しいといふ意。代匠記精撰本及び略解には、古今六帖に下句を、「我が名はありとも君が名惜しも」として載せてあり、又卷四所收坂上大嬢の歌に「吾が名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立たば惜しみこそ泣け」(七三一)とあるのを參考して、此の歌の第四・第五句の「君」と「吾」とは位置が顚倒したのであらうと云つてゐる。併し此の歌の場合は、天皇の寵を蒙つてゐる作者の立場から考へても、原の儘の方が作者の眞情がよく現れてゐるのであつて、古今六帖のは此の歌を改作したものと見るのが當然である。

【譯】夜が明けてからお歸りなさいましたならば、あなたのお名が立つ事はさておき、私の浮名の立つのが口惜しうございます。

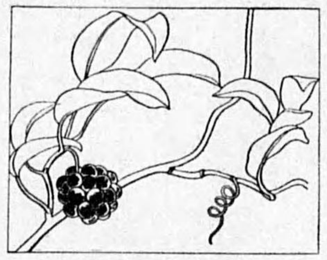
【評】此の一首を二人の間に交はされた對話の形式に引直して見ると、「もう夜も更けたから、いつそ夜が明けてから歸ることにしよう。」「いえいえ、夜が明けてからお歸りになりますと浮名が立ちます。あなたは男子でいらつしやるからお構ひないとしても、私は女の身でありますから、名の立つのが口惜しうございます。どうか早くお歸り下さいまし。」とでも言ふのであらう。公然夫婦になつてゐない間に、とかくの評判が立つ事を心苦しく思つた作は他に幾らもあるが、此の歌は序から起る聯想によつて、如何にも上品な貴族的な感を伴なふのである。

内大臣藤原卿報二贈鏡王女一歌一首

九四　玉櫛笥　みもろの山の　さな葛　さ寢ずは遂に　ありかつましじ

玉匣　將見圓　山乃　狹名葛　佐不寐者遂爾　有勝麻之自

【釋】○報贈　童蒙抄にコタヘオクルと訓んでゐる。○玉櫛笥　櫛笥の身といふ意によつて、「みもろ」の「み」に懸けた枕詞である。○みもろの山　原文の「將見圓山」を流布本にミムマトヤマと訓んでゐるが、童蒙抄にミムロノヤマと訓み、其の後諸註は之に從つてゐる。然し講義には原文の「將見」はミムであり「圓」はマロであつて、ここにミムマロと訓むべき字を以て記したのは、ムとマの中間音のモを示す爲であるから、ミモロと訓むべきであると言はれた。他に「美母呂」「三毛侶」「三諸」と記した例もあるから、此所は講義の訓に從つてミモロと訓むべきであらう。「みもろの山」は御室山の義で、神の坐します山を指すのであつて、飛鳥の三諸山(今の高市郡飛鳥村大字雷にある雷岡)や、龍田の三室山(生駒郡龍田町大字神南に在る)などは著しい例であるが、其の他此の名で呼ばれた山は出雲國などにもある。ここは三輪山を指す。三輪山に就いては旣に述べた。(註に「或本歌云玉匣三室戸山乃」とある。此の「三室戸山」も山城國宇治郡其の他にあるが、此の歌は大和で詠まれたのであるから、本文の「三室山」の方が穩當である。)○さな葛　一名「さねかづら」と言ふ。「さね」の「ね」が母音同化によつて「な」に轉じた



さねかづら

のである。漢名を「南五味子」（略稱「五味」）と云ひ、俗に「美男葛（びなんかづら）」と呼ぶ。山野に自生する蔓性植物であるが、常綠の葉を愛して庭園にも栽培する。葉は厚く光澤があり、暮秋の頃裏面が紫赤色に色附く。七八月頃に葉腋に淡黃白色の花を開き、果實は小球の集合狀をなし、紅くて美しい。昔は莖に含んでゐる多量の粘液を採つて、頭髮を塗り固めるのに用ゐた（故に「美男葛」の名稱がある）が、又製紙の糊にも用ゐた。さて第三句までは序であつて、「さな葛」のサナといふ音を繰返して「さ寢ずは」に言ひ續けたのである。○さ寢ずは　「さ」は接頭語。寢ずしては の意。「すは」に就いては（八六）に說明した。○ありかつましじ　此の一句は流布本に「有勝麻之目（アリカテマシモ）」とあるので、從來アリガテマシモと訓んでゐたが、元暦校本や類聚古集に「目」が「自」となつて居るのに從つて、「麻之自」をマシジと訓むのが正しい。「かつましじ」に就いては先年橋本進吉博士が『國學院雜誌』第十六卷第九・十・十一號に「がてぬ・がてまし考」と題する研究を發表せられた。（其の大意は『萬葉集新考』三三五―四三頁にも揭げてある。）同氏の說によれば、「がてぬ」「がてね」「がてに」「がてなく」は、否定の助動詞の「ぬ」及び其の活用形の「ね」「に」「なく」によつて、否定の意を表してゐるのである。次に「かて」の活用を見るに、此の語は「かて」から否定の助動詞に續く外に、「越し介氐務（カテム）かも」（崇神紀）といふ例があつて、未來を表す助動詞「む」も「かて」を承けてゐる。否定の助動詞「ぬ」も未來の助動詞「む」も共に未然形を承ける助動詞であるから、「かて」は未然形と見るべきであつて、此の動詞は「かて」「かつ」「かつれ」と下二段に活用した事が知られる。從つて「かて」「かつ」を從來難しの義と見たのは誤であつて、是は堪ふ・敢ふ・得の如き意義を表した動詞であり、常に他の動詞の連用形を承けて用ゐられたのである。然し平安朝以後其の多くの用法を失つて、唯「がてに」のみを殘し、其の後「がての」「がてを」といふ新しい形が發生し、意義に於ても原義を失つて、正反對の難し又はかぬの意を表すに至つたのである。なほ「かて」「かつ」は本來は淸音であるが、他の動詞の下に來る時は、それと複合して連濁を起して「がて」「がつ」となるのである。次に「ましじ」は奈良朝時代には廣く用ゐられた助動詞で、宣命に屢見えて居るが、又日本書紀には「おもしろき今城（いまき）の中は倭須羅度麻旨珥（ワスラユマシジ）」（齊明天皇紀）の例があり、此の集にも「有勝麻之目（アリカツマシジ）」（七二三）「由吉可都麻思自（ユキカツマシジ）」（三三五三）「和須良由麻之自（ワスラユマシジ）」（四四八二）の如き用例が幾らもある。此の助動詞は形容詞的の活用を有する否定推量の助動詞であつて、ざるべし・まじと云ふが如き意を表すもので、動詞に接する時には右の用例に據つて明かである如く、其の終止形を承けるのである。故に「かつ」に續く場合は「かて」を承けるのではなく、終止形の「かつ」を承けるべきであつて、從來アリカテマシモと訓んだのはアリカツマシジと訓むのが正しい。以上が橋本博士の所說の概要である。なほ『奈良朝文法史』には、「ましじ」は其の意義に於ては「まじ」と同一であるが、「ましじ」と「まじ」の孰れが本來の形であるかは斷言する事が出來ないと述べて居られる。然し用例から見ると、「ましじ」は奈良朝及びそれ以前に一般に用ゐられ、之に反して「まじ」は平安朝以後に一般に用ゐられてゐて、奈良朝時代に用ゐられた確證は無いから、「ましじ」を本來の形とすべきである。要するに「ありかつましじ」は「有り得ましじ」と同じで、有り得られまいの意である。

【譯】夜の明けない中に歸れと仰しやるけれども、私はあなたを完全に我が物にしないでは、到底長らへてゐられますまい。

【評】第一句に「玉櫛笥」を置いたのは、鏡王女の歌の初句を取つて答へたので、前に講じた額田王と大海人皇子と

の間の贈答歌に「紫」を用ゐたのと同じく、當時歌の贈答に行はれた一般的慣例である。鏡王女の歌の消極的な所に女性の弱々しさが見えてゐるのに對して、鎌足卿の歌が極めて積極的であり男性的であるのが、恰好の對照をなしてゐる。

内大臣藤原卿娶二采女安見兒一時作歌一首

九五　吾はもや　安見兒得たり　皆人の　得かてにすとふ　安見兒得たり
吾者毛也　安見兒得有　皆人乃　得難　爾爲　云　安見兒衣多利

【釋】○藤原卿　これも鎌足である。○娶　童蒙抄にメトル、考にメトセル、古義にエタルと訓んで居る。「娶」は女を取る義であるから、メトルと訓んで置く。○采女安見兒　采女の事は〔五一〕の所に述べた。「安見兒」は采女の名である。○吾はもや　此の句を古義にアハモヤと四音に訓んでゐるが、ワレハモヤ又はアレハモヤと五音に訓む方がよい。「も」「や」は何れも感歎の意を添へる助詞。「もや」と續けて用ゐた例には、「置目母夜淡海の置目」（古事記）「家も知らず母也」（日本紀）などがある。○得かてにすとふ　「得かてに」の「かて」は前の歌に於て說明して置いた。「かてに」の「に」は、前に「たづきを知らに」の條に述べた通り、古くナ行に活用した否定の助動詞の連用形である。否定の助動詞「ず」には下に直ちに他の動詞が來る事はないが、此の「に」の下には屢動詞の「す」若しくは「思ふ」などが接續してゐる。即ち「得かてにす」の外には、「鶯の待ち迦豆爾勢斯梅が花」（八四五）「門出をしつつ出で可天爾世之」（三五三四）、又「に」が「思ふ」に接した例には「行き過ぎ勝爾思有ば」（二五三）などがある。此の點は同じく否定の助動詞ではあるが、「ず」と「に」の用法の異なる所である。さて「爲云」を流布本にストイフ、童蒙抄にスチフ、考にストフと訓んで居る。孰れも誤ではないが、今は集中の「齋く等布」（四二二〇）「領巾振りき等敷」（八八三）「玉藻刈る登布」（三六三八）などの例に倣つて、ストフと訓んで置く。皆の人々が得ることが出來ないと云ふの意で、次の「安見兒」に掛つてゐる。

【譯】自分はまあ何といふ果報者であらうか。采女の安見兒を手に入れることが出來た。皆の人が得ることの出來ないといふ、あの安見兒を私は娶る事が出來たのだ。

【評】天皇の御寵遇の篤かつた鎌足は、前に鏡王女を賜はつたのであるが、茲に又采女の安見兒をも賜はつたのである。一體采女は極めて神聖な職にあつたから、素より犯し難き者とせられてゐたのである。右の歌に「皆人の得かてにすとふ」とあるのも、此の意味に外ならない。采女を犯したといふ嫌疑の爲に、嚴罰に處せられようとした傳說は記紀に幾らも記されてゐる。其の采女安見兒を鎌足卿は特に勅許を蒙つて賜はつた爲に、喜悅の情を滿面に湛へて此の歌を詠んだのである。此の歌は第一句で切れ、第二句で切れてゐて、一首の調子が如何にも雀躍して喜んでゐるやうに響いて來る。第二句の「安見兒得たり」を結句に繰返したのが、此の場合は殊に感情を有效に現してゐて面白い。又偶然ではあるが、采女の名がたやすく見るといふ意に通ふ「安見兒」で、實はたやすく得難い采女であるのも面白い。包み切れぬ欣喜の情が、自然に其の儘に表現せられてゐる古樸純眞な歌である。

久米禪師娉二石川郎女一時歌五首

九六　みすず苅る　信濃の眞弓　吾が引かば　うま人さびて　否と言はむかも　禪師

水薦　苅　信濃乃眞弓　吾　引　者　宇眞人佐備而　不欲常將　言可聞

【釋】○久米禪師　久米氏で出家した人である。傳未詳。「禪師」は禪門の人、卽ち佛道に入つた人の尊稱。禪師に戀歌があるのは出家以前の作であらうと一般に言はれて居るが、當時の出家は後世のやうに嚴格な生活をしたのではないから、必ずしも出家以前の作と見る必要はない。下に三方沙彌や滿誓沙彌の戀歌もある。○石川郎女　傳未詳。「郎女」は既に述べた通り、名門の子女の稱であつて、男子を「郎子」といふのに對する語である。此の外集中には石川郎女の名が幾度も現れてゐる。それらを同名異人と見るべきか、同一人と見るべきかに就いては、更に下に述べる。

○みすず苅る　「水薦苅」を流布本にミクサカル、元暦校本・金澤本・類聚古集等にミコモカル（代匠記・古義同訓）、童蒙抄にミスズカル、考に「薦」を「篠」の誤字としてミスズカル（略解・檜嬬手等同說）と訓んでゐる。これは童蒙抄の訓に從つてミスズカルと訓むべきである。さて「薦」を「篠」の誤とする眞淵の說に就いて、美夫君志に「篠」は金の韓道昭の著『五音篇海』に始めて見えて「篠黑竹也」とあるが、此の書は金の明昌承安年間（本邦の後鳥羽天皇朝に當る）に成つたものであるから、萬葉時代に用ゐられる筈はないと云つて、「薦」の字を正しい文字と認め、「薦」は茂草の義であるが、茂生の小竹を表す爲に假に用ゐたのであると述べてある。「薦」の用例は日本書紀にもあつて「五百箇野薦」をイホツヌスズと訓んである。さて「水薦」の「み」は「眞」と同じく接頭語であつて、すず竹を苅る信濃といふ意による枕詞である。而して「すず」は「すず竹」で、俗に「山竹」と言ふ細い竹で、葉は大きく稈は強靱であるから、編んで籠などの細工物を造るのに用ゐる。本邦中部以北の山地に多いが、信濃國は古來此の竹の產地として知られてゐるので此の枕詞がある。今は此の枕詞に因んで信州に「みすず飴」を賣つて居る。○信濃の眞弓　「眞弓」の「眞」は美稱の接頭語。（既出）攷證に「檀」といふ木の名は、眞弓を作るのに用ゐられる爲に得たのであると云つて居る。古事記に「梓弓・檀弓」と言ひ、此の集に「白檀弓」とある「檀弓」は檀の木で造つた弓を指すのであるが、此所は唯弓のことである。信濃は古く弓の產地であつたから、「信濃の眞弓」と歌つたのである。古甲斐や信濃から弓を貢に獻上した事は、續日本紀や延喜式などに見えて居る。例へば續日本紀の大寶二年三月の條に「甲午、信濃國獻二梓弓一千二十張一、以充二太宰府一。」又慶雲元年四月の條に「庚午、以二信濃國獻弓一千四百張一、充二太宰府一。」とある。さて此の句までは次の「引く」を言ふ爲の序である。○吾が引かば　自分に依り靡くかどうか、私があなたの心を引き誘つたならばの意。此の「引く」を袖を引く意に見るのはよくない。○うま人さびて　「うま人」は形容詞の「うまし」の語幹を名詞の「人」に冠したので、貴人の義であり、「さび」は前に出た「神さぶ」の「さぶ」で、それらしく振舞ふ意を添へる接尾語である。○否と言はむかも　原文の「不欲」を流布本には「不言」と記してあるが、今は元暦校本・金澤本・類聚古集等に據つて改めた。「不欲」をイナと訓むのは義訓である。「不聽」または「不許」と記してイナと訓ませた例もある。「かも」の「か」は疑問を表す助詞。

【譯】信濃の弓を引くやうに、此の賤しい私があなたの心を引き誘つたならば、あなたは貴人ぶつて「いやですよ」と仰しやるでせうか。

【評】豫め相手の返事を忖度して歌つてゐる所に、極めて消極的な態度が見える。此の歌はさほどの熱意を以て詠まれたものではない。

九七　みすず苅る　信濃の眞弓　引かずして　強ひざるわざを　知ると言はなくに　郎女

三薦　苅　信濃乃眞弓　不　引爲而　強　佐留行事乎　知　跡言　莫君二

【釋】○みすず苅る云々　此の二句は右の歌の上二句を其の儘借りたのである。○強ひざるわざを　「強佐留行事乎」の「佐」は流布本に「作」とある。「作」はサと訓み得るが、今は元暦校本・金澤本・類聚古集・古葉略類聚鈔等に「佐」とあるのに從つた。流布本の「強作留」を代匠記初稿本に「弦作留」の誤としてツルハグルと訓み、以下諸註に「強」を「弦」に改めて、童蒙抄にヲツクル、考にヲハグル、古義にヲハクルと訓んで居る。而して考には一首の意味を「弓を引かぬ人にて、弦かくるわざをば知りつといふ事はなし。其如く我をいざなふわざもせで、そらにわがいなといはんをば、はかり知り給ふべからずと云なり」と解いて居る。攷證・美夫君志等にも考の解釋を其の儘引き、其の他の註釋書にも大體同樣に解いて居る。なほ講義には考の說を修正して、「引かずして」は弓を引くといふ事を實地にせずしてといふ意味で、弓に弦を懸けるには弓を撓めるのであつて、其の樣が弓を引いた時と相似てゐるから、弓を撓むるわざをせずしてといふ意を、「引かずして」の句によつて表したのであると解かれてゐる。然し原文の「强」を「弦」に改め、一句をヲハクルワザヲと訓んで、之を考や講義の如く解くのは、稍穿鑿に過ぎて穩當を缺くやうに思はれる。然るに玆に代匠記以來の誤字說を否定したのは新考であつて、初二句の序に弓を詠んで、第四句に至つて又弓に緣のある弦を歌ふのは後世の風であるから、輕々しく「强」を「弦」に改めるべきでないと言はれ、又澤瀉氏も原文を尊重して此の句をシヒザルワザヲと訓んで解釋されて居る。(『國語國文の研究』第二十一號誌上)今は流布本の訓に從つて解釋する。さて「强ひざるわざを」は、私に向つて强ひて靡けとも仰しやらない事であるものをの意である。最後の「を」はなるものをの意の感動助詞。○知ると言はなくに　「言はなく」の「なく」は、前に「吾無けなくに」の條に述べた通り、否定の助動詞の未然形の「な」に、用言及び助動詞を體言化する語尾の「く」が添つた形である。「言はなく」は言はぬことの意で、次の「に」は餘情を添へる助詞である。さて一句の意は知ると言はぬ事なるにの義であるが、「言ふ」は輕く添へた語であるから、此の句は知らぬことなるに、卽ち知れるものではないのにの意を表す。同樣に「在りと不言爾」(一六六)「言ふと云莫苦荷」(六八四)は、それぞれ「在らなくに」「言はなくに」の意である。

【譯】信濃の眞弓を引くやうに、私の心を引いても見ずして、强ひてとも仰しやらないことでありますから、其の成行などは知れるものではありますまいに。(それを恰も私の心を豫知したやうに仰しやるのは、をかしいではありませんか。)

九八　梓弓　引かばまにまに　依らめども　後の心を　知りかてぬかも　郎女

梓弓　引　者隨　意　依　目友　後　心乎　知　勝　奴鴨

【釋】○梓弓　古の弓は多く梓の木で作つたから「梓弓」と云つたので、一般に弓を云ふのである。ここは「引く」の枕詞。○引かばまにまに　「引かば」は弓を引く事と心を引く事とを懸けてある。「まにまに」は「まに」といふ副詞

を二つ重ねたのであつて、「まに」は「己が欲しき末仁」（賞命）又「まにまに」は「馴るる麻爾末仁」（三五七六）「惜しき我が身は君が末仁麻爾」（四五〇五）「大君の引の眞爾眞荷」（一〇四七）の如く、用言の連體形又は助詞「が」「の」等を承けて用ゐる。意味は「任」「隨」又は「隨意」「任意」などの義書を用ゐてゐるのによつて明かである如く、打ち任かせて或は隨つての意である。「まにまに」の最後の「に」を省いて「まにま」と言つた例が集中にあるが、「まにま」は更に約まつて今日用ゐて居る「まま」となつたのである。さて此の句は引かば引かるるままにの意。○依らめども　寄り靡きも致しませうけれどもの意。○後の心を　行末の御心をといふ意。○知りかてぬかも　「かてぬ」の「かて」は前に述べた「かつ」の未然形。「ぬ」は否定の助動詞の連體形。「かも」は感動の助詞。知ることは出來ませんの意。

【譯】本當に私を愛して私をお引きになつたら、引かれるままにあなたに靡きも致しませうけれど、行末のお心がわかりませんので案じられますこと。

九九　梓弓　弦緒取りはけ　引く人は　後の心を　知る人ぞ引く　禪師

梓弓　都良結取　波氣　引人者　後心乎　知人曾引

【釋】○弦緒取りはけ　原文の「結」は元暦校本に「緒」とあるので、ヲと訓むべきは明かである。「つらを」の「つら」を古義に「連」の義としてゐるのは妥當でない。「つら」は「つる」と同じ語であつて、「弦」「蔓」「綱」「葛」「釣る」などは何れも同じ系統の語である。又「つらぬ」「つらなる」「つらぬく」などは、此の「つら」から更に派生した動詞である。「を」は緒の義。即ち「つらを」は弓弦を指す。次に「取波氣」を考にトリハゲ（略解・攷證・檜嬬手等同訓）と訓んでゐるが、これはトリハケと清音に訓むのが正しい。「取り」は接頭語。「はけ」は「人にありせば大刀波氣ましを」（古事記）「牛にこそ鼻繩波久例」（三八八六）などの用例によつて知られる通り、下二段活用の動詞で、佩かせる又は掛けるの意。（東歌に「安太多良眞弓云々都良波可めかも」（三四三七）とある「はかめ」も是と同じ語であるが、「はかめ」は「はけめ」を訛つたのである。）さて「弦緒取りはけ」は弓に弦を掛けての意で、此の句までは次の「引く」に懸る序である。○引く人は　歌の表面では弓を引く人を指し、實は郎女の心を引く人即ち禪師自らを云ふ。○後の心を云々　「後の心を知る」は前の郎女の歌の句を其の儘借りたのであつて、ここは後々までも心變りする事はないと、自ら信じてゐる人の意である。

【譯】梓弓に弦を取り著けて引くやうに、あなたの心を引く人ならば、必ず行末までもと思ひ定めた心がおつて引くのであります。御案じなさるには及びません。

一〇〇　東人の　荷前の箱の　荷の緒にも　妹は心に　乘りにけるかも　禪師

東人之　荷向　篋乃　荷之緒爾毛　妹　情爾　乘　爾家留香問

【釋】○東人の　此の句を元暦校本・金澤本等にアツマツノ、類聚古集にアツマウトノ、神田本にアツマヒトノ（代匠記・古義・新考同訓）と訓んである。又童蒙抄・考にアヅマドノと訓み諸註之に從つてゐる。美夫君志や講義に述べてある通り、フミヒトをフビトと言ひ、クビヒトをタビトと言ふのに倣つて、是もアヅマドと訓むのが穩當であ

らう。「東」は東國卽ち遠江・駿河・信濃以東の諸國を指す。「東人」は邊鄙の地の人の意にも用ゐるが、ここは原義である。○荷前の箱の荷の緒にも　「荷の緒」の「緒」は原文に「結」とあるが、元暦校本・金澤本・古葉略類聚鈔等に據つて改めた。「荷前」はニサキの音の轉じたもので、荷前は毎年諸國から奉る初物の貢をいふ。朝廷では之を神嘗祭に、伊勢大神宮を始め諸山陵に奉らしめ給ふのである。荷前の品は絹布・木綿・絲・綿・麻を始め堅魚・鰒・鹽その他山海の產物である。「荷の緒」とあるのは祈年祭の祝詞に、「陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り、長道間無く立ちつづけて」とあるやうに、陸路を經て奉る貢物は之を入れた箱の緒を堅く結んで、馬で搖れても差支のないやうに用意をしたのである。攷證に「西國は貢物を船にて送り奉り、東國は船のかよはぬ所も多かれば馬にて送り奉る也」と言ひ、初句に「東人の」と言つたのも其の爲であると述べてゐる通りである。さて「荷の緒にも」は荷の緒の如くにもの意。○妹は心に乘りにけるかも　原文に「妹情爾」とあつて、「妹」の下に助詞を表す文字が無いので、「が」を置く說と「は」を置く說とがある。流布本を始め從來の諸註に「が」を置いて訓んで居るが、童蒙抄及び考にはイモハココロニと訓んで居る。また新考にはイモガココロニと訓んで、「妹ガココロニは妹ガ我心ニといふ意なるべし」と解釋してある。近時佐伯梅友氏は、萬葉集中の「の」「が」に就いての差異の研究を發表せられたが、（『國語國文の研究』第二十二號所載）其の中に「妹が心に乘りにけるかも」と訓んだ集中の歌六首を擧げて、「妹が」と「が」を置いて主語とする時、詠歎の「かも」で結ぶのは穩かでない事を主張し、「妹は」と訓み改めるべき事を說かれた。今此の說に從つて、從來の訓を改めてイモハと訓む。（なほ「かも」の「も」は原文に「問」とあるが、元暦校本等には「聞」とある。）意味は妹の事が常に自分の心の中にあつて、忘れる事が出來ないといふのである。

【譯】東國の人が獻る荷前を入れた箱の上を、堅く縛つてある荷の緒のやうに、貴女の事がいつも私の心に乘つてゐて、忘れることが出來ません。

【評】右に講じた五首は、最初禪師が一首を贈り、それに對して郎女が二首を返し、更に禪師が二首を贈つて和へたのである。此の五首を通じて讀む時には、二人の間の交渉が次々に展開してゐるやうで極めて興味がある。次に技巧の方面から見ると、最後の一首を除く他の四首は、何れも弓に關係のある事象を敍べて居り、而も〔九七〕の郎女の作は、禪師から贈つた歌の上二句、卽ち「みすず苅る信濃の眞弓」を其のまま襲用し、更に〔九九〕の禪師の歌は、郎女の〔九八〕の「後の心を云々」の句を巧みに利用してゐるのであつて、兩人の勝れた技巧的手腕は相伯仲してゐる。かくて右の五首は一面から見ると、單に機智頓才を互に鬪はしたに過ぎない感もあつて、眞劍な氣持は乏しいやうである。

明日香淸御原宮御宇天皇代　天渟名原瀛眞人天皇

天皇賜二藤原夫人一御歌一首

〔一〇三〕吾が里に　大雪降れり　大原の　古りにし里に　降らまくは後

吾里爾　大雪落有　大原乃　古爾之鄕爾　落卷者後

【釋】○明日香淸御原宮御宇天皇代　天武天皇の御代。（旣出）○天皇　天武天皇。○藤原夫人　日本書紀天武天皇

の二年の條に、「又夫人藤原大臣女氷上娘生三但馬皇女一、次夫人氷上娘弟五百重娘生三新田部皇子一」とあるから、鎌足の女の氷上娘と五百重娘は、共に宮中に召されて夫人となつたのである。攷證には、此の集卷八にある藤原夫人の歌〔一四六五〕の藤原夫人の註に、「明日香淸御原宮御宇天皇之夫人也。字曰三大原大刀自一、卽新田部皇子之母也」とあるのを引いて、ここにある藤原夫人は妹の五百重娘であらうと云つて居る。「夫人」をオホトジ・ミヤスドコロ・キサキなどと訓む說もあるが、當時の國語で何と云つたか詳かでないから、姑く音でフニンと訓むべきである。攷證・美夫君志等にはフジンと訓んで居る。大寶令によれば、皇后の下に妃二員・夫人三員・嬪四員を置かれたのであつて、妃は皇族から、夫人は三位以上の者から、嬪は五位以上から選ばれる事になつてゐた。

大原の里の現狀

○吾が里に　皇居のある地卽ち飛鳥淨御原を指し給うたのである。○大原　今の高市郡飛鳥村大字小原である。此の地は淨御原宮址を距たる東南六町の所で、小原の西端に村社大原神社があつて、鎌足誕生の邸址であると云ひ傳へて居る。先年まで其のほとりに大織冠產湯の井と稱するものが存してゐた。此の夫人を「大原大刀自」と言ふのは、大原の地に生れたからである。此の御製は夫人が大原の實家に居た頃に、贈り給うたものである。

○古りにし里　「古り」は上二段活用動詞で、「古りにし里」は「故郷」といふのと同義である。「故郷」に二義があつて、其の一は「古郷の飛鳥はあれどあをによし平城の明日香を見らくし好しも」(九九二)「藤原の古郷の秋萩は咲きて散りにき」(二二八九)などの「古郷」で、嘗て榮えてゐたが、今は衰へて荒れはてた里の意である。今一つは「心ゆも我は思はざりき又更に吾が故郷に還り來むとは」(六〇九)「萱草吾が紐に付く香具山の故去之里を忘れぬがため」(三三四)などの「故郷」で、生れ故郷若しくは永年住み馴れた土地の意である。而して此の歌の場合を古事記傳に、天皇が未だ皇太子にましました頃、此の夫人の家に通ひ住み給うた事があるので、「古りにし里」と申されたのであると述べてゐるのは、前掲の後の意味に取つたのである。然し卷十一にも「大原の古郷に妹を置きて云々」(二五八七)といふ例があるから、此の御歌の場合もさびれた里と解釋するのが穩當である。なほ檜嬬手に「本より故郷の名ありしなれど、ここは殊更に貶め給ひてなるべし」と述べてゐる通り、夫人の里を戲れにわざと貶し給うた意味も加はつてゐる。

○降らまくは後　降るのはもつと後の事であらうといふ意。「降らまく」の「く」は前に說明した通り、用言を體言化する語尾である。〔五〇〕參照。さて「降らまく」は「降らむ」に此の「く」を添へて降らむ事はの意とし、「降らむ」といふ事柄を主格に置いたのである。斯樣に助動詞「む」に「く」を添へて「まく」と云つた例は、「君を思ひ吾が戀ひ萬久は」(三六八三)「春されば散ら卷惜しき梅の花」(一八七一)「見麻久の欲しき君にもあるかも」(四四四九)など多くある。此等の「まく」の「ま」は、助動詞「む」の古い未然形の名殘であらう。さて此の「く」の本質に就いて山田孝雄博士は、「く」は又「こ」ともいひ、語尾ではなく代名詞の「ここ」「そこ」「いづく」の「く」又は「こ」と同じもので、場所を指す接辭であつて、是は空間的に指示するのは勿論、思想上の或點をも指示する意義があると述べて居られる。(『奈良朝文法史』四五一―三頁參照)

【譯】朕のゐる此の都には今日珍らしく大雪が降つた。お前の居る大原のやうな古いさびれた里に降るのは、定めしもつと後であらう。

【評】大原は同じ飛鳥の地域内であるから、都と同じやうに雪が降つて居るのであるが、それを古く寂れた里に降るのは、都より後れるであらうとからかひ給うた、其の諧謔が極めて面白い。次に修辭を見ると、先づ「吾が里」に對する「古りにし里」の對照があり、又「大雪」の音調を承けて「大原」を出し、更に「大雪降れり」のフルを繰返して、「古り」「降らまく」と詠み給うたので、一首の上に輕妙な諧調の美が備はつて居る。なほ結句には御製にふさはしい大きい響がある。

藤原夫人奉レ和歌一首

一〇四　吾が岡の　龍神に言ひて　降らしめし　雪の摧し　其處に散りけむ
吾　崗之　於可美爾言　而　令　落　雪之摧之　彼所爾塵　家武

【釋】○吾が岡の　大原は飛鳥の東南方に續く丘陵地帶であつて、其處からは淨御原宮のあたりを遠望する事が出來るのである。○龍神に言ひて　「おかみ」は古事記に「闇淤加美神」とあり、又日本書紀に「高龍」「闇龍」といふ二柱の神名が見えてゐる其の「おかみ」である。而して日本書紀の訓註に「龍、此云二於箇美一」とあつて、其の「龍」は『玉篇』に「龍龍也、又作レ靈、神也、龍同上」とある通り、支那では龍を言ふのであるが、龍は雨を司る神であるから、「おかみ」は雨や雪を降らせる神を指すのである。日本書紀にある「高龍」は空にある神で雨や雪を降らし、「闇龍」は谷間にあつて水を掌つてゐる神である。京都府愛宕郡鞍馬村鎭座の官幣中社貴船神社の祭神も此の神であつて、昔から雨乞で知られて居る。次に「言ひて」は言附けて、卽ち命じての意である。○降らしめし　「令落」を元暦校本・金澤本・西本願寺本等にフラシムル、童蒙抄の一訓及び考・略解・攷證等にフラセタルと訓んでゐるが、類聚古集及び代匠記精撰本の訓のフラシメシが妥當である。最後の「し」は時の助動詞「き」の連體形。○雪の摧し　「摧之」を元暦校本・金澤本にクタケテ、西本願寺本・細井本等にクタケシ、代匠記精撰本にクダケノと訓んでゐるが、考以下諸註にはクダケシと訓んでゐる。最後の訓に從ふべきである。併し「くだけし」の「し」を過去の助動詞として、「くだけしが」の意に見る略解・攷證等の解釋は誤である。さて「くだけ」は自動詞「摧く」の連用形から轉成した名詞で碎片の義。「し」はそれを强く指示する助詞。

【譯】今日都に大雪が降つたと、大層お喜びのやうでございますが、其の雪は私の居ります此の岡の龍神に申し付けて、降らせました雪のかけらが、そちらに少しばかり散りかかつたのでございませう。

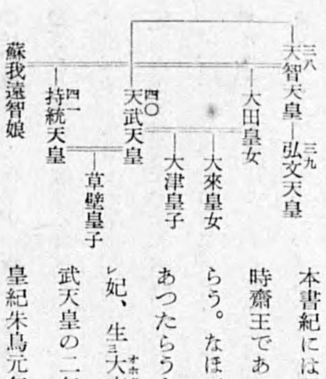
【評】天皇の諧謔に對して其の反對に出て、これも戯れて答へ奉つた機智が極めて面白い。音律の側を見ると、「吾が岡の」と言つて直ちに「おかみ」と類似の音を疊み重ね、又「降らしめし雪の摧し」とシの音が脚韻的に現れてゐるので、前の天皇の御製と同樣、此の歌の聲調もまことに輕快である。蓋し以上の二首は此の種の作品中の秀逸である。

藤原宮御宇天皇代　天皇諡曰二持統天皇一

大津皇子竊下二於伊勢神宮一上來時、大伯皇女御作歌

一〇五　吾が背子を　大和へ遣ると　さ夜更けて　暁露に　吾が立ち霑れし
吾勢枯乎　倭邊遣　登　佐夜深　而　雞鳴露爾　吾　立　所霑之

【釋】○藤原宮御宇天皇代　持統天皇の御代である。（既出）○天皇諡曰二持統天皇一　元暦校本・神田本には「藤原宮御宇高天原廣野姫天皇代」とし、「天皇諡曰云々」を別行に記してある。此の集の他の例に據れば「天皇諡曰云々」は、「高天原廣野姫天皇」と記すべき所である。○大津皇子　天武天皇の第三皇子で、御母は天智天皇の皇女なる大田皇女である。幼少の頃から聰明で、文武に長じて居られ、殊に詩文を能くせられたので、天智天皇に深く愛せられ給うた。天武天皇の十二年から政務を聽いて居られたが、朱鳥元年九月天皇の崩御の後反を謀り給うた事が發覺して、同年十月三日捕へられて死を賜うた。時に御年二十四であつた。○竊下二於伊勢神宮一　此の事は日本書紀には記載せられてゐない。皇子が伊勢にお下りになつたのは、同母の御姉で當時齋王であられた大來皇女に胸中を打明けて、名殘の對面をせられる爲であつたであらう。なほ考別記には、伊勢神宮へ下り給うたのは、天皇の崩御以前の七八月の頃であつたらうと云つてゐる。○大伯皇女　天武天皇紀二年に「先納二皇后姉大田皇女一爲レ妃、生二大來皇女與二大津皇子一」とある。大來皇女は卽ち大伯皇女である。皇女は天武天皇の二年（御年十四歲の時）に、齋王に立たれて神宮に仕へ給うた。而して持統天皇紀朱鳥元年十一月の條に、「丁酉朔壬子、奉二伊勢神祠一皇女大來還至二京師一」とある



のは、御弟の大津皇子の謀反の爲に、齋宮を罷められたものかと思れはる。

○吾が背子を　「背子」は前に出た。ここでは大伯皇女の御弟大津皇子を指す。○大和へ遣ると　大和へ歸し遣るとての意。「遣る」は歸られるのを見送られる皇女の立場から云つたのである。「と」は「とて」の義。○さ夜更けて　「さ」は音調を整へる接頭語。此の「さ」が用言の接頭語として用ゐられた例は、前に「さまねし」の條に擧げて置いた。なほ名詞に冠した例には、「さ枝」「さ衣」「さ野つ鳥」「さ山田」「さ牡鹿」等がある。○曉露　「あかとき」は明時の義で夜明方をいふ。集中には「安可等伎」「阿加登吉」などの假名書の例もある。後世の「あかつき」は「あかとき」の轉訛である。「曉露」は曉方に置く露。○吾が立ち霑れし　此の句を流布本にワカタチヌレシ、拾穗抄・童蒙抄・略解にワレタチヌレシと訓んでゐる。「立ち霑れし」と連體形で終つてゐるから、「吾」は助詞の「が」を添へてワガと訓むのが正しい。古事記に「菅疊いや清敷きて和賀二人泥斯」といふ假名書の例がある。一句の意は「吾立ち霑れぬ」といふよりも語調が强く、且詠歎の意が含まれてゐる。かやうな場合にわざ〳〵代名詞の「吾」を用ゐるのは、自分を力强く表示する爲であり、從つて表現に力が籠るのである。これなども萬葉時代の表現上の一特色となつてゐる。

【譯】我が弟君を大和國へ歸し遣るとて、夜更けて外に立つて別れを惜しんで居る中に、何時しか明方の冷い露に私はしつとりと濡れたことである。

【評】伊勢に居られる御姉君の大伯皇女を遙々お訪ねになつた大津皇子が、やがて大和を指して歸られる時、弟君の身の上を案じながら見送られた姉君が歌はれた御作である。第二句の「大和へ遣ると」の句には、やさしい姉君

の弟君に對する愛情が表れて居り、「さ夜更けて曉露に」の句には、夜深い中から明方に及ぶまで、盡きせぬ御名殘を惜しまれた樣が親はれ、最後に「吾が立ち霑れし」の句によつて、露にそぼち涙に泣き濡れ給うた悲痛な惜別の光景が偲ばれる。上に述べた如き歷史事實を背景として此の御歌を誦む時、一層あはれ深いものがある。

一〇六　二人行けど　行き過ぎ難き　秋山を　いかにか君が　獨り越ゆらむ
二人行　杼　去　過　難寸　秋山乎　如何　君之　獨　越　武

【釋】○二人行けど　「行けど」と既定事實の形で歌つてあるが、ここは「行くとも」の意である。卽ちたとへ道連があつて二人で行つてもの意。○行き過ぎ難き　秋の山道はとかく淋しく心細い感がするからである。○秋山を　當時は伊勢から大和へ行くには、伊賀國の名張を通つて大和國山邊郡へ出たのであつて、此の道筋は殆ど山道ばかりである。○いかにか君が　原文の「如何」を流布本にイカデカと訓んであるが、童蒙抄にイカニカと改めてゐるのが穩當である。集中には「伊可爾」といふ假名書の例は多いが、それ以外に訓ませた例は無いから、當時は未だ「いかで」「いかが」等は用ゐられなかつたのである。最後の「か」は疑問の助詞。○獨り越ゆらむ　原文の「越武」を流布本の訓に從つてコユラムと訓む說（拾穗抄・童蒙抄・攷證・美夫君志・講義等）と、考の訓に從つてコエナムと訓む說（略解・古義・新考・新訓等）とがある。字面の上からは孰れにも訓み得るが、此の歌は大津皇子の出立を見送り給うて後、稍時を經て皇子の身の上を案じて詠まれたものと思はれるから、眼前に見えぬ事實の推量を表す助動詞「らむ」のあるべき所である。若し「なむ」と訓めば皇子の出立される前の歌となる。

【譯】たとへ二人連れ立つて行つても、行くにはなやましい此の頃の秋の山道を、唯獨りでどんなにして弟君は越えて居られるであらうか。

【評】右の二首を續けて讀んで見ると、普通の別れを惜しむ歌とは異なつた悲しみがある。後の歌には殊に女性らしい濃かな思遣と愛情とが溢れてゐて感動が深い。さて其の後大津皇子は陰謀が暴露して死に就かれ、皇女は齋宮を罷められて都に還られたのであるが、歸京の後皇子の死を悲しんで詠まれた四首の御作は、此の卷の挽歌の部に見えて居る。

大津皇子贈二石川郎女一御歌一首

一〇七　あしびきの　山の雫に　妹待つと　吾立ち沾れぬ　山の雫に
足　日木乃　山之四付二　妹待　跡　吾立　所　沾　山之四附二

【釋】○石川郎女　傳は詳かでない。前に久米禪師が石川郎女と贈答した歌五首を講じたが、其の石川郎女と同名であるけれども、時代が異なつてゐるから恐らく別人であらう。集中には此の他石川郎女といふ人名が屢見えてゐる。卽ち下に日並皇子（大津皇子の御兄）が、石川郎女に贈り給うた御歌一首（一一〇）が見え、又石川女郎が大伴宿禰田主に贈つた作（一二六）、並に田主がそれに報へた作（一二七）があり、同じく石川女郎が田主の弟大伴宿禰宿奈麻呂に贈つた歌一首（一二九）がある。なほ此の外にも卷四に石川女郎の歌一首（五一八）があり、卷二十（四四九一）の左註に、「右一首藤原宿奈麻呂朝臣之妻石川女郎薄愛離別悲恨作歌也」とある。此等の石川郎女を總

て同一人と見るか、或は二人乃至數人の同名異人と見るかに就いては、考攷證檜媮手古義・美夫君志・新考等に種種の說が見えてゐる。檜媮手別記には集中に現れてゐる石川郎女を總て同一人であると見、且其の贈答歌によつて郎女を遊行女婦であらうと推定してゐる。玆に大津皇子と贈答してゐる石川郎女に就いて見るに、古義には後に大伴田主及び宿奈麻呂と贈答した女と同一人であると云ひ、美夫君志も古義と同樣に見て、檜媮手の說と同じく、遊行女婦であらうと言つて居る。また新考には大津皇子と贈答した女は、日並皇子から御歌を賜うた女、又宿奈麻呂に歌を贈つた女と同一人であると見て居られるが、なほ澤瀉久孝氏は諸種の理由を綜合して次のやうに述べられた。卽ち大津皇子と贈答した石川郎女は、其の御兄に當らせられる日並皇子から御歌を賜はつた女と同一人であつて、郎女は當時二十歲位であつたらうと思はれる。其の後二十年程經て、當時男盛りの美男であつた大伴田主及び宿奈麻呂兄弟に歌を贈つた老女石川郎女は、やはり前に二皇子の寵を蒙つた郎女と同一人であらうといふのである。(『國語國文の研究』第四號所載「萬葉作者考」參照)

○あしびきの　「山」の枕詞。此の外に山に關係のある語の、「尾の上」「八峯」「岩根」「嵐」「木の間」などにも冠する。其の語義に就いては種々の說がある。(イ)日本紀私記には山を行くには足を曳いて登るから、足引の山と云ひ續けたのであると云ひ、(ロ)童蒙抄には「あしびき」はあせぼの木卽ち馬醉木のことで、此の木には毒があつて之に觸れると病を生ずるので、「やまひ」の「やま」に懸けたのであると云ひ、(ハ)冠辭考には「あしびき」の「しびき」は繁木の意で、山は木の繁つてゐるのを愛するので、此の句を「山」に懸けたのであるとしてゐる。(ニ)古事記傳には「あしびき」は足引城の義で、山が足を延ばしたやうに裾を引いてゐる一構への地域を指したのであると解き、(ホ)古義には「あし」は「いかし」の約で、「あしひき」は茂檜木の義で、茂り榮えた檜の生ひ立つてゐる山の意で續くと解いてゐる。此の外にも種々の解釋が現れてゐるが、未だ首肯すべき說に接しない。從來一般に重んぜられたのは宣長の說である。○山の雫に　山の木の葉などから滴り落ちる雨露を指して、簡單に「山の雫」と云つたのである。同じ句が結句に繰返されてゐるが、此の句は第四句の「沾れぬ」に懸つてゐる。○妹待つと　「と」は「とて」の意。○吾立ち沾れぬ　「吾立所沾」を流布本にワレタチヌレヌ、童蒙抄にワレタチヌレシ、考にワガタチヌレヌと訓んでゐる。ここは流布本の訓が妥當である。

【譯】山の木の下に立つて、そなたの來るのを待ちわびてゐたら、山の木の葉から滴る雫にすつかり濡れてしまつたことだ。(こんなに待たせておいて來なかつたそなたの心が恨めしい。)

【評】木の葉の雫に濡れそぼつのも厭はず待つてゐた作者の心をも察せずして、逢ひに來なかつた女の心を恨んだのである。第二句の「山の雫に」を第五句に繰返してある爲に、如何にも怨言を聞くやうであり、又其の時の情景が明瞭に且力强く表現せられて居る。此の御作を古今集の「久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しきものにぞありける」(卷十五)などと較べて見て、歌風の變遷を知るべきである。

石川郎女奉レ和歌一首

一〇八　吾を待つと　君が沾れけむ　あしびきの　山の雫に　ならましものを

吾乎待　跡　君之沾　計武　足　日木能　山之四附二　成　益　物　乎

【釋】○吾を待つと　流布本にワレヲマツト、代匠記にワヲマツトと訓んで居る。當時第一人稱の代名詞には、「あ」「あれ」「わ」「われ」「おの」「おのれ」の六種があつた。「あれ」「われ」「おのれ」の「れ」は後に附いた接尾語である。「あ」「わ」は「あれ」「われ」よりも發生が古く、又「あ」「あれ」は平安朝に入つて滅びた。「あ」及び「わ」の用法は「あれ」及び「われ」の用法と異なる點もあるが、助詞の「を」を伴なつた例は何れにもある。「あを」の例には「阿袁待たすらむ父母らはも」(八九〇)「吾妹子し阿乎偲ぶらし」(三一四五)、又「わを」の例には「和乎召すらめや」(三八八六)「和乎待ちかてに」(二四八三)などがある。ここは音調の上から見て、「あ」と訓むのが最も穩かである。私をお待ちになるといふのでの意。○ならましものを　「ましものを」に就いては(八六)參照。

【譯】私をお待ちになつてゐて、あなたがお濡れになつた其の山の雫に、なれるものならなりたかつたと思ひます。(其の雫になつてゐたら、お逢ひ申す事が出來ましたのに、さうとは知らなかつたのが殘念でなりません。)

【評】大津皇子の御歌の「山の雫」をすかさず取つて答へ奉つたのが巧みである。當意卽妙の返歌と謂つてよい。

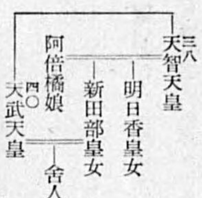
舍人皇子御歌一首

一一七　丈夫や　片戀せむと　嘆けども　醜の丈夫　なほ戀ひにけり

大夫哉　片戀將爲跡　嘆友　鬼乃益卜雄　尙戀　二家里

【釋】○舍人皇子　天武天皇の皇子で、元正天皇の勅を奉じて日本書紀を撰進せられた。御母は天智天皇の皇女なる新田部皇女であつて、皇子は淳仁天皇の御父である。天武天皇の五年に誕生せられ、養老四年に知太政官事となり、天平七年に御年六十歳で薨じ給ひ、天平寶字三年に「崇道盡敬皇帝」と追稱せられ給うた。○丈夫や云々　「や」は下の「片戀せむ」に懸つて反語となつてゐる。卽ち二句までの意は、大丈夫たる者が片思ひなどをしようか、すべきではないといふ意。○醜の丈夫　原文の「鬼」を元暦校本・金澤本等にオニと訓んであるが、流布本の訓の通りシコと訓むべきである。古事記の「豫母都志許賣」を日本書紀に「泉津醜女」と記し、其の訓註に「醜女、此云二志許賣一」とある。又和名抄に「日本紀私記云、醜女志古或說、黃泉之鬼也」とある。此等に據つて「鬼」は「醜女」と同義で、シコと訓むべき事が知られる。古事記傳に「鬼」は「醜」の偏を略したものであらう、と言つてゐるのは穩かでない。「しこ」の假名書の例には、古事記に「志許米志許米岐穢き國」、又集中に「志許霍公鳥」(一五〇七)「之許つ翁」(四〇一一)「之許の御楯」(四三七三)などがあり、「鬼」を用ゐた例には「鬼乃志許草」(七二七)「鬼之四忌手」(三一七〇)などがある。此等の用例から察すると、「しこ何々」若しくは「しこの何々」といふ場合の「しこ」は名詞であらうと思ふ。さて「しこ」は「醜」の字義の通り、惡み嫌ふべきものの義であつて、物を罵つて言ふ場合と、自らを卑下し嘲つて用ゐる場合とがある。此の御歌のは御自身を嘲つて仰せられたのであつて、此の惡むべき丈夫といふ意である。○なほ戀ひにけり　最後の「けり」は詠歎の意を表す。

【譯】大丈夫たる者が、見つともない片戀などしてよからうか、と自ら心を責め咎めて慨くけれども、此の憎むべき丈夫はやつぱり片戀をしてゐるのだ。自分ながら意氣地のないことである。



【評】家名を尊び功名を重んじた男子の本領は、屢上古の相聞の歌にも現れて居る。此の御歌の如きは、男性的な氣慨のある戀歌であつて、萬葉でなくては見られない感情が出て居る。

舍人娘子奉(とねりのいらつめ)和歌一首

一一八　歎きつつ　ますらをのこの　戀ふれこそ　吾が髪結(もとゆひ)の　漬(ひ)ぢてぬれけれ
歎管　大夫之　戀禮許曾　吾髪結乃　漬而奴禮計禮

【釋】○舍人娘子　傳は未詳。（前出）新考に「舍人は氏なり。乳母の氏を皇子の名とせる例多かれば、舍人娘子は舍人皇子の乳母の女にや」と述べて居られる。此の人の歌は〔六一〕にも出てゐる。○ますらをのこの　「大夫」は此處ではマスラヲノコと訓む。集中の「益荒丁子」（一八〇一）などは、マスラヲノコと訓ませた明かな例證である。「ますら」は「麻須羅神」（出雲風土記）「麻須良多祁乎」（四四六五）「麻周羅遠」（八〇四）などの「ますら」と同じで、荒く猛々しい意。「をのこ」は「男(を)の子」の義である。從つて「ますらをのこ」は「ますらを」と同義である。○戀ふれこそ　「戀禮許曾」の「禮」が流布本に「亂」とあるが、今は金澤本・西本願寺本等に從つて改めた。流布本の第二・第三句を代匠記にはマスラヲノコヒ、ミダレコソと訓み、童蒙抄にはマスラヲガコヒ、ミダレコソと訓んでゐるが、「亂」を誤字と見て右のやうに訓むのが穩かである。さて「戀ふれこそ」は後の語法では「戀ふれ」の下に「ば」があるべき所であるが、當時は用言の已然形から直ちに「こそ」に接する用法があつた。〔一三・二九〕參照。○吾が髪結の「髪結」を流布本にユフカミ、神田本にカミユヒと訓んで居るが、神田本及び京大本の一訓や管見の訓にモトユヒとあるのが妥當である。卽ち「髪結」は本結（本は髪の本卽ち髻(もとどり)のこと）の義書である。「もとゆひ」（今訛つて「もとひ」といふ）は髪の根元を束ね結ぶ紐である。古今集に「君來ずは閨へも入らじ濃紫我がもとゆひに霜は置くとも」（卷十四）と歌はれて居り、又『皇太神宮儀式帳』に「紫本結糸一條長四尺」延喜式の伊勢大神宮式中に「髻結紫絲二條長四尺」とあるのに據つて、古くは紫色の糸を用ゐた事が知られる。此處の「もとゆひ」を髪又は髻の義と見る代匠記・考・攷證・古義等の說は妥當でない。○漬ぢてぬれけれ　「ひづ」は古くは四段に活用した。集中には假名書の例が無いが、古今集に「袖ひぢてむすびし水の凍れるを」（卷一）「わが衣手のひづを借らなむ」（卷三）などの用例がある。「ひづ」は「ひたる」（浸）「ひたす」（漬）等と同根の語で、漬り濡れる意。次に「ぬる」は一般には濡れる意に用ゐるが、其の他次に講ずる歌に「たけば奴禮たかねば長き妹が髪」（一二三）、卷十四に「いはゐ蔓引かば奴禮つつ」（三四一六）「たはみ蔓引かば奴流奴留」（三五〇一）などの用例があり、又此の自動詞に對して「吾が黑髪を引奴良思」（三五〇一）などの用例があり、又此の自動詞に對して「吾が黑髪を引奴良思乱れてさらに戀ひわたるかも」（二六一〇）といふ他動詞の用例もある。此等の「ぬる」は講義に言はれてゐる通り、元來は濡れる意味の「ぬる」と同一語で、ぬる〳〵する事を言ふのが原義であらうと思はれる。卽ち觸覺に關して言ふ時は、濡れてぬる〳〵するやうになるのを云ひ、又動作に就いて言ふ時は、髪や蔓草などがする〳〵と解け下る事を表すのであらう。斯樣に「ぬる」に二義があるので、「漬ぢてぬれけれ」の解釋に二說がある。考には油付いてゐる結髪が、自らぬる〳〵と解け下る意であると解き、これは鼻嚔・紐解(ひもとけ)などの類で、人に戀せられると結髪が解けるといふ諺があつたのであらうと言つて居る。（略解・攷證・檜嬬手・美夫君志等同說）又代匠記には終夜泣き流す涙で、髪がひたり濡れる意と見、古義には髪が濡れ濕(しめ)る意と見て、人に戀されて居る兆とする當時の諺によ

つて歌つたのであると云つて居る。なほ新考には背づけば髪は却つて解け下らぬ筈であると言つて、考の説を反駁して古義の説に贊し、澤瀉氏の新釋にも同様に述べて居られる。然し講義には此等の説と異なつて、「ぬる」の原義に據つて本結が濡れてぬら〳〵する意に解いて居られる。思ふに「ぬる」は髪が解け下る意に用ゐた例があるから、此の場合も「髪結の漬ぢて髪のぬれけれ」の義と見るのが自然のやうであるが、本結が濡れると髪が解けるものとも思はれない。又「ぬる」を濡れる意に見ると、上に「漬ぢて」があるので重言となるが、然し同義語を重ね用ゐた例には「雨降らば著むと思へる笠の山人に著しめ霑者漬とも」(三七四)の如き例もあるから、今は古義・新考の説のやうに、本結が濕り濡れる意と解いて置く。なほ本結が濡れる事は紐解・眉痒・鼻嚏等と同様、人に戀されてゐる時の兆徴であると考へる迷信が當時行はれてゐたのであらう。

【譯】大丈夫たるあなたが、慨きながらそれほどまでに戀ひ慕つてゐて下さる爲でありませう、私の元結が常になくしつとりと濡れたことでございます。

【評】右の贈答歌二首は、其の内容や表現の態度などから察すると、さまで切迫した感情から詠まれたものではないやうに思はれる。

(一三三)　三方沙彌娶二園臣生羽之女一、未レ經二幾時一臥レ病作歌三首

たけばぬれ　たかねば長き　妹が髪　此の頃見ぬに　搔入れつらむか　三方沙彌

多氐婆奴禮　多香根者長寸　妹之髪　比　來不見爾　搔入　津良武香

【釋】○三方沙彌　傳未詳。「三方」は氏。「沙彌」(梵語 Śramaṇera の略)は始めて佛門に入り十戒を修めた者をいふ。一説に「沙彌」を名と見る説もある。(考・略解・新考等)○園臣生羽之女　傳未詳。卷六(一〇二七)の左註に「但或本云、三方沙彌戀二妻苑臣一作歌也云々」とある。「園臣」は氏姓で「生羽」は名である。○未レ經二幾時一臥レ病作歌三首　「未レ經二幾時一云々」を考にイクホドモヘズシテ、ヤミコヤシテと訓み、古義にイクダモアラネバヤミフセルトキと訓んで居る。女を娶つてから間もなく病牀に臥して詠んだ作といふ意。略解に此の三首は沙彌一人の歌ではないから、「臥病」の下の「作」の字は「時」の誤であらうと言つて居る。

○たけばぬれ　「たく」は髪を搔き上げて結ぶこと。此の語の用例には「妹が髪上げ小竹葉野の放ち駒」(二六五二)「振分の髪を短み青草を髪に多久らむ」(二五四〇)「人皆は今は長しと多計と言へど」(一二四)などがあつて、「たく」は四段活用の動詞で、髪を束ね上げる意であることが判る。然し此の動詞は「石瀬野に馬太伎行きて」(四一五四)「海人の繩たき漁りせむとは」(古今卷十八)の如く、馬の手綱や網の綱を手繰る意にも用ゐられる。なほ「たぐる」は講義に「たきくる」の約であらうと言はれてゐる。「ぬれ」は前に説明した通り、髪がする〳〵と解け下ること。當時女子は七八歳頃から結髪するまで、即ち十四五歳の頃までは髪を眞中から左右に分けて垂らしたのであつて、之を「振分髪」と言ひ又「童女放り」とも「小放り」とも言つた。「たけばぬれ」とあるのは、其の振分髪を搔き上げて結ばうとすれば、長さが足りないのである〳〵と解け下るといふ意であつて、未だうひうひしい年頃の髪を歌つたのである。○此の頃見ぬに　ここ暫く見ない間にの意。作者は病牀に臥してゐるので、妻の家を訪れる事が出來ないのである。○搔入れつらむか　「搔入津良武香」を流布本にミダリツラムカ、元暦校本にカキイレツラムカ、

代匠記にカキレツラムカ(考・攷證・新解・全釋同訓)と訓んでゐる。又略解に引く宣長の説には、「入」を「上」の誤としてカキアゲツラムカと訓み、古義・新考は此の説に從つてカカゲツラムカと訓んで居るが、「入」を「上」と記した古寫本は見當らない。なほ美夫君志には「搔」は支那では「騷」に通じて用ゐた文字であり、「騷」は「擾」と同義である事、又「入」は萬葉ではリの假名として用ゐてゐる事を考證して、此の句はミダリツラムカと訓むべきであると説いてある。(講義同説)併しここは原文の儘をカキレツラムカと訓むのが穩當である。「かきれつらむか」を攷證や新解に、亂れた髪を搔き入れる意に見てゐるのは妥當でない。是は「搔入」と記した文字の上から考へると、髪の端を髻の中か下へ搔入れて結ぶ結髪を指したものと考へられる。當時の婦人の風俗を寫した埴輪土偶や繪畫によれば、婦人の結髪には髻の形にも其の周圍の髪の形にも種々の樣式があつて、其の一種に髻の周圍の髪を後に垂らして、其の末端を中途から折り曲げて、髻の中へ搔入れたのがある。「搔入れつらむか」は其の結ひ方を指したものであらう。「らむか」は既に説いた。

【譯】髪を束ね上げて結ばうとすると、する〳〵と滑つて結べず、さりとて結ばずに振分髪のままでは長過ぎたあの妻の髪も、暫く見ない中に、もはや髪の末を搔入れて綺麗に結ひ上げたであらうか。

【評】作者は振分髪の乙女の許に通ひ始めてから間もなく病み臥して、悶々の中にかなりの日數を經たのである。第三句までを歌つた時、作者の眼前には美しい乙女の髪がありありと思ひ浮べられて居るのであるが、更に第四・第五句に至つて、作者の愛著の心には悶々焦燥の情をさへ混へてゐるのである。總てが心の象徴ともいふべき作品である。

(三四)　人皆は　今は長しと　たけと言へど　君が見し髪　亂りたりとも　娘子

人皆者　今波長跡　多計登雖　言　君之見師髪　亂　有　等母

【釋】○人皆は　元暦校本及び神田本には「人者皆」と記し、訓もヒトハミナとなつて居る。集中の例によれば「人皆者」の方が穩かである。○今は長しと　此の「と」を諸註に「とて」の意の助詞と見たのであるが、是は次の「たけと言へど」の「と」と同じ用法である。即ち今は長しと言ひの義である。「世の中を憂し等やさし等思へども」(八九三)の上の「と」と同じ用例である。○たけと言へど　「たけ」は上に説明した「たく」の命令形である。髪を上げよと申すけれども。○亂りたりとも　「亂る」は古くは四段に活用したのであるが、集中には下二段活用の例が多いから、此の場合はミダリタリ・ミダレタリの孰れに訓んでも差支ない。此の句はよし亂れてゐても再び君に逢ふまでは、此の儘にして置きませうといふ意である。「とも」の下には省略された語を假に補つて見るべきである。考・略解・攷證・古義等に、伊勢物語の「くらべ來し振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」を引いて、此の娘子の作意と似通ふ所があると云つてゐる。古義に掲げた中山嚴水の説には、當時は夫と定めた男の手を借りて、始めて髪上げをする風習があつたのであつて、贈歌の第五句は、他男の手で髪上げをしたであらうかと云つて、女の心を探つたのであり、娘子の和歌は、たとへ髪が亂れて見苦しからうとも、他人に髪上げをさせるやうな事はしないと云つて、心の變らぬ事を答へたのであると解釋して居る。併し髪上げは、必ずしも夫と定めた男の手によつて行はれるとは限らない事は、集中に「未通女等が放りの髪をゆふ(木綿)の山雲なたなびき家のあたり見む」

（一二四四）の如く、自ら髪上げをした風習の存在を證する歌があるのを見て明かである。

【譯】此の頃は髪も延びましたので、もう長くなつたとか、早く髪を上げたらよからうなどと、人は皆申しますけれども、（あなたに初めてお逢ひ申した時の髪の形を變へるに忍びませんから、）たとへ亂れて見苦しからうとも、再びお逢ひする日までは元の儘に致しておきませう。

【評】如何にも少女らしい可憐な純眞な感情が詠まれて居る。「人皆は今は長しとたけと言へど」と歌つて、周圍と自分とを明瞭にした點に少女らしい態度がある。

一二五　橘の　蔭ふむ道の　八衢に　物をぞ思ふ　妹に逢はずて　三方沙彌

橘之　蔭履　路乃　八衢爾　物乎曾念　妹爾不　相而

【釋】○橘の蔭ふむ道の　當時は都大路や驛又は市の衢に、街路樹として菓樹を植ゑたのである。延喜式や類聚三代格に據れば、往還の人々をして夏は其の樹蔭に憩はせ、又飢ゑた者には其の果實を食はせる爲であつたのである。卷三にも「門部王詠二東市之樹一作歌」と題して、「東の市の植木の木垂るまで云々」（三一〇）といふ歌がある。「海柘榴市」や「桑市」などの地名は、市に椿や桑を植ゑてあつた爲に生じたのであるが、此の歌の場合のやうに橘を植ゑた事は、日本書紀に「餌香市邊橘本」又古事記の歌に「我が行く道の香ぐはし波那多知婆那は」といふのがあり、集中にも「橘の本に道ふみ八衢に物をぞ思ふ」（一〇二七）など歌はれてゐるのによつて知られる。橘は古く其の花も實も葉も愛せられて、街路樹としてのみならず、庭園にも多く植ゑられたのである。さて此の二句は橘の木蔭を踏んで行く道といふ意で、次の「八衢」に懸けた序である。○八衢に　「八」は「海石榴市の八十の衢に」（二九五一）の「八十」と同樣に、數の多いことを表す。「ちまた」は道股の義で、道の岐れる辻を云ふ。岐路が數多あれば迷ひ易いものであるから、次の句の修飾句として樣々に思ひ亂れる事を譬へたのである。○妹に逢はずて　「逢はずて」は「逢はずして」と同じ。集中には何れも假名書の例がある。「ずて」の例には「來經行く年の限知らず提」（八八一）「安寐も寢受豆あが戀ひ渡る」（三六三三）などがある。此の「ずて」は後世約まつて「で」となつた。さて此の句は一首の初に置いて解くべき句である。

【譯】久しく妻に逢はないので、此の頃はかれこれと樣々に思ひ亂れて、日を暮らしてゐることである。

【評】此の一首の生命は序の清新な內容にある。明るい日に照らされて、十字街路の橘の並木が濃い影を地上に投げてゐる。其の樹蔭を踏んで、諸方から集まつて來た男女が行きつ戻りつして、都大路は非常に賑はつてゐる。そんな光景が今病牀にある作者の頭に浮んでゐるのであらう。

一三　柿本朝臣人麻呂從二石見國一別レ妻上來時歌二首幷短歌

石見の海　角の浦回を　浦無しと　人こそ見らめ　潟無しと　人こそ見らめ
石見乃海　角乃浦回乎　浦無　等　人社　見良目　潟無　等　人社　見良目

よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　潟は無くとも　いさなとり　海邊を
能　咲八師　浦者無　友　縱　畫屋師　潟者無　鞆　鯨　魚取　海邊乎

さして　和多豆の　荒磯の上に　か青なる　玉藻沖つ藻　朝羽振る　風こそ寄
指　而　和多豆乃　荒磯乃上爾　香青生　玉藻息津藻　朝羽振　風社　依

せめ　夕羽振る　浪こそ來寄れ　波の共　彼より此より　玉藻なす　寄り寢し
米　夕羽振流　浪社　來縁　浪之共　彼縁　此依　玉藻成　依　宿之

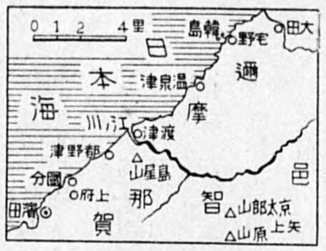
妹を　露霜の　置きてし來れば　此の道の　八十隈毎に　萬たび　顧みすれど
妹乎　露霜乃　置　而之來　者　此　道乃　八十隈毎　萬　段　顧　爲　騰

いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え來ぬ　夏草の　思ひ萎えて　偲ぶ
彌　遠爾　里者放　奴　益　高爾　山毛越　來奴　夏草之　念　之奈要而　志怒布

らむ　妹が門見む　靡け此の山
良武　妹之門將見　靡　此　山

【釋】○柿本朝臣人麻呂　人麻呂の傳記は明かでないが、彼の作歌を通じて知り得る斷片的な事柄は既に〔一九〕の條に述べた。○從二石見國一別レ妻上來時　既述の如く人麻呂は大和に生れ、都で仕官してゐたもののやうであるが、晩年には國司として石見國に赴任し、彼の地で死んだのである。然し其の間の事柄が何等國史に記載せられてゐないので、此の國に赴任した時の官職は、掾・目の中孰れかの低い官であつたらうと考別記に云つてゐる。又此の長歌は妻を殘して任國から上京する時の作であるが、是は朝集使・稅帳使などの任を帶びて出張した時のことで、九月の末から十月の初にかけての頃に出立したのであると考に述べてゐる。次に人麻呂の妻或は愛人に就いても、考別記には彼の作歌から見て四人あつた事を推定してゐる。卽ち人麻呂は石見國赴任前に既に二人の妻に死別したのであつて、其の一人は「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌」と題する〔二〇七〕に歌はれてゐる愛人で、大和の輕に住んでゐたのであり、今一人は同じ題の下に載せられた〔二一〇〕に歌はれてゐる嫡妻で、二人の間には一子さへ生れてゐたのである。此の外に人麻呂が石見國で死んだのを聞いて、其の悲しみを歌つた妻に依羅娘子がある。其の時の娘子の作は〔二二四・二二五〕である。さて此の長歌に歌はれてゐる女性を、前記の三人とは別人と見れば、彼の妻又は愛人は少くも前後四人あつた事になり、又これを依羅娘子と同一人と見れば三人になるのである。

○石見の海　イハミノウミをイハミノミと云ふのは、日本書紀に「阿布彌能彌」（淡海の海）とあるのと同類である。○角の浦回を　「角」は流布本の訓にツノとあるが、略解にツヌと訓んだのが正しい。古事記に「角鹿」（今の敦賀）と記して「今謂二都奴賀一也」と註して居り、此の集にも「角松原」を假名書に「都努乃松原」（三八九九）と記してある。其の他前述の如く「野」をヌ、「篠」をシヌと發音した例は幾らもある。因つて「角」はツヌと訓む。さて「角」は和名抄に「石見國那賀郡都濃村・都野津村・二宮村あたり一帶の地に當る。此の地は人麻呂が住んだ處で、彼が出仕した國府（那賀郡濱田町の東北一里餘の、上府・下府・國分の三村が昔國府の在つた村である）を距たる東北二三里の處である。次に「浦回」に就いては流布本の訓のウラワ以外に、ウラマ・ウラヘ・ウラミな



石見の海岸

どの種々の訓が現れてゐるが、「回」をミと訓むべき事及び其の意義は(四二〇)の「島回」の條に述べた。ここは古義の訓の通りウラミと訓むのが正しい。「角の浦」は今の都濃村及び都野津村一帯の海岸を指す。○浦無しと　「角の浦回」の「浦」は廣く海邊の意で用ゐてあるが、此所の「浦」は和名抄に「浦和名宇良大川旁曲渚、船隱し風所也」とある「浦」の意である。即ち「浦」は「裏」と同系語で、外海に對する入江若しくは船の碇泊する湊を云ふ。(現在も此の邊一帯の海岸線は屈曲に乏しい)○人こそ見らめ　原文の「社」をコソと訓ませた例は集中に數多ある。「社」をコソと訓むのは義訓である。谷川士清の説に據れば、神社は人が願事を祈願する所であり、「こそ」は希望の助詞であるから、「社」をコソを表す文字に借りたのであると云ふ。ここの「こそ」は係の助詞。「見らめ」は後の語法では「見るらめ」といふべき所であるが、奈良朝以前には「らむ」は上一段活用の動詞には其の連用形に接續した。○潟無しと　「潟」は通常潮干潟、即ち潮の干滿によつて隱現する砂洲を云ふのであつて、ここも從來此の意味に解かれてゐた。併し「潟」は地方によつて指す處が異なるのであつて、入江或は湖沼を云ふ地方もある。講義の説に據れば、日本海岸は概して干潟が尠く、日本海岸で「潟」と云ふのは太平洋岸のそれとは異なつて、一種の鹹湖を指してゐる。即ち海岸にあつて砂洲で海と界してゐる湖水を指すのであつて、彼の象潟・八郎潟を始め、若狹の三方郡、但馬の二方郡などは何れも斯かる潟によつて名づけられたのであり、其の他「潟」が附く地名は、山陰・北陸・東山の沿海に多くあると云ふのである。ここの「潟」も此の説に從ふべきである。○よしゑやし　原文に「能嘆八師」とあるが、「嘆」は元暦校本・神田本等に「咲」とあり、又集中に「縱咲也思」(二八七三)「吉咲八師」(三二二五)などと記した例もあるから「咲」に改めた。「よしゑ」の「ゑ」は、形容詞の下に附いて感動を表す助詞で、日本書紀の童謡に「吾は苦し衛」、此の集に「吾はさぶし惠君にしあらねば」(四八六)「心はよし惠君がまにまに」(二五三七)の如き用例がある。次の「やし」は「や」も「し」も語調を整へ、又感動を表す助詞であつて、「やし」と續け用ゐた例には「あなに夜志」(古事記)「愛しき八師」(三一四〇)などがある。從つて此の句の意味は「よし」に有るだけであつて、よしままよの意であるが、直ちに下へ連續してゐるから、よしや云々と譯すべき所である。○浦は無くとも　此の句の「無友」及び下の「潟は無くとも」の「無鞆」を、共に流布本にナクトモと訓み諸註此に從つてゐるが、小琴にはナケドモと訓み、略解檜嬬手・美夫君志は小琴の訓に從つてゐる。「無けども」と訓めば「無け」は已然形となる。然し此處は上に假設の意の副詞「よし」があるから、下は「とも」で承けてナクトモと訓むのが正しい。○潟は無くとも　以上の八句は四句づつの連對句であつて、「浦無しと云々」と「潟無しと云々」は二句對句であり、それを承けて更に「よしゑやし」以下の二句對句を置いたのである。○いさなとり　原文に「鯨魚取」とある。「鯨」は古語に「いさ」と云ひ、「魚」は「な」とも云つたのでイサナトリと訓む。「海」の枕詞である。語義の解釋には諸説があるが、其の主なるものは、(イ)「いさな」は勇魚の義で、鯨を賞める語であつて、魚類の王たる鯨を捕る海の意で「海」の枕詞となつたといふ説(冠辭考)、(ロ)「い」は接頭語で、「さなとり」は「すなどり」と通じ、漁りする海の意で懸ると見る説(山彦冊子)、(ハ)「鯨魚」は借字で「磯栄採」の意と解く説(古義所引)などである。思ふに「いさなとり」の「いさ」は、「漁る」「漁火」「漁場」「誘ふ」等の「いさ」で、「あさる」と同義の語根であつて、魚を誘ひ寄せて捕るといふ意であらう。○和多豆の　「和多豆」は地名で、流布本の訓にはニギタヅとある。小琴には此の地は今の渡津に當るので「和多豆」をワクツと訓み改め、古義・註疏・新考・講義等は此の説に從つてゐる。然し下にある「或本歌」

には「柔田津」とあるので、澤瀉氏は古くは「和多豆」もニギタヅと訓んだのが、後世其の文字によつてワタツと訓むに至つたので、やがて現在のやうに「渡津」の文字を當てたのであらうと言つて、是を地名の變遷と見て居られる。（『國語國文の研究』第二十四號參照）さて「わたつ」は今の江川の河口の東岸に在る渡津村である。○荒磯の上に「荒磯」は「安里蘇」「安利蘇」などの例に據つてアリソと訓む。イソが約まつたのである。「荒磯」は岩石の多い荒い磯の義と見るのが一般の說であるが、講義には「現磯」の義と解いてある。○か青なる　「か」は音調を整へる爲の接頭語であつて、「迦黑き髮に」（八〇四）「香緣り合はば」（一二二）「をちも可易き」（四〇一一）などの用例がある。○朝羽振る　下の「夕羽振る」と對を成してゐる句で、「朝」は朝に夕にの意の「朝」である。「羽振る」は羽を振る卽ち羽ばたきをする事で、「羽振鳴く鴨」（四一四一）「打羽振鶏は鳴くとも」（四二三三）などの「はぶく」と同義語である。ここは朝に風が海上に吹き起るのを云ふのであるが、「羽振る」は風が起る事ばかりでなく、風に浪が立つのをも云ふ。卷六に「朝羽振る浪の音さわぎ」（一〇六二）卷十一に「風をいたみ甚振浪の」（二七三六）などの用例がある。古事記に「浪振比禮」「風振比禮」なる語が見えて居るのを參考すれば、上代人は風や浪の立つのは、物が搖り動かすものと考へてゐた事が知られる。○風こそ寄せめ　「風社依米」に就いては兩訓がある。流布本の訓はカゼコソヨラメであつて、代匠記・童蒙抄・考・攷證・美夫君志講義は此に從つてゐる。然し略解はカゼコソヨセメと訓み改め、檜嬬手・註疏・新考・新解等は略解に從つてゐる。「風こそ依らめ」と訓む時は風が主語になるので、「玉藻沖つ藻」の懸る所がなくなる。よつて代匠記・攷證・美夫君志等は「風にこそ寄らめ」の義で、玉藻沖つ藻が寄るのであると解き、又講義には「玉藻沖つ藻」の述語は遙か句を隔てて後の「波の共彼より此より」であつて、此の句には直接關係が無いと言つて居られる。併し前後の關係から見て明かであるやうに、磯の上に沖の藻が打寄せられる意であるから、略解の訓に從つてカゼコソヨセメと訓むのが妥當である。尤もさう訓むと風が藻を寄せることになるが、此の句は下の「浪こそ來寄れ」と對句にする爲に置いたのであるから、意味は風によつて起る浪が藻を寄せるであらうと云ふのである。○浪こそ來寄れ　「浪社來緣」を流布本にナミコソキヨレと訓み、諸註此に從つてゐるが、古義にはナミコソキヨセと訓んでゐる。キヨルと訓むべき例は「沖つ波來依荒磯を」（二二二〇）「夕浪に玉藻は來依」（一〇六五）「夕なぎに來因また海松」（三三〇一）などがある。今は流布本の訓に從つて置く。さて「浪こそ來寄れ」を代匠記・攷證・新考等に「浪にこそ來寄れ」の意と解いてゐるのには從ひ難い。これは詞の上では波が磯に打寄せる意ではあるが、波と共に藻も打寄せられる意を含めたのであつて、此處は對句の形を整へる爲に語を省いて簡略に云つたのである。○波の共　「むた」は「の」又は「が」といふ助詞を承けて、何々と共に・何々につれてといふ意を表す。假名書の用例に「風能牟多寄せ來る波に」（三六六一）「君我牟多行かましものを」（三七七三）などがある。○彼より此より　「か」は第三人稱の遠稱代名詞であり、「かく」は副詞であるが、元來「か」と「かく」とは關係のある語である。「か」と「かく」を對に用ゐた例は多くあつて、「鹿にも閑にも」（六二八）「可行き加久行き」（三九九一）などがある。此の句は波と共にあちらに寄りこちらに寄りといふ意で、打寄せられた藻が波のまにまに靡いてゐる樣を表してゐる。同時に「玉藻なす」を距てて「寄り寢し妹」に懸る句である。○玉藻なす　此の句は（五〇）で說明した。ここでは上の敍述を承けて、更に下の「寄り寢し」の「寄り」を修飾してゐる。さて「いさたとり」以下此の句までは、角の浦の景色を敍べて「寄り寢し妹」を導き出した序である。○寄り寢し妹を　傍に

寄り添うて寢た最愛の妻を。○露霜の　「置く」の枕詞。『玉勝間』に集中に用ゐられてゐる「露霜」は、何れも露と霜の二つではなく、唯露のことで、露のまだ凍らないのを「露霜」と云ふのであると述べてゐる。併し代匠記初稿本に、是は露と霜とであつて、共に置くものであるから「置く」の枕詞としたのである、と述べてゐるのが穩かである。○置きてし來れば　妻を後に殘し置いて來たのでの意。「し」は語勢を強める助詞。斯樣に述語の中間に挿入した例は、「別れ石行けば」(一八〇四)「立ち之來らしも」(三六五四)「鳴き之とよめば」(三九九三)など幾らもある。○此の道の云々　前に講じた(七九)に「吾が行く川の川隈の八十隈落ちず萬度顧みしつつ」とあつたが、それと略同じ意味を歌つたのである。「顧みすれど」は顧みれどの意味であつて、若しや妻の居る邊が見えはしないかと、振り返つて眺めるのである。○いや遠に　「いや」はいよ〳〵ます〳〵の意の副詞的接頭語。「遠に」は次の句の「高に」と同じく、「遠し」「高し」といふ形容詞の語幹に「に」を添へた副詞で、遠く高くの意である。同樣の例に「股那賀邇寢をし寐せ」(古事記)「眉畫き許邇書き垂れ」(同上)等がある。○里は離りぬ　「里者放奴」を元暦校本・神田本にサトハハナレヌと訓んでゐるが、童蒙抄にサトハサカリヌと訓んで以來、諸註は是に從つてゐる。「さかる」は「天離る」の條に說いた通り、離れる意の古語である。今は「遠ざかる」といふ語に殘つてゐる。○いや高に　「益高爾」を流布本にマスタカニ、考にマシタカニと訓んでゐるのは妥當を缺く。童蒙抄にイヤタカニと訓んだのが正しい。前の「いや遠に云々」に對して「いや高に云々」と歌つたのである。これは妻の住む里を出て山路にさしかかつた爲に、地形が段々高くなつて來た事を表してゐる。○夏草の　「萎え」の枕詞。夏の烈しい日光に當つて草が萎れ伏す貌を、人が物思ひに沈んでゐる樣の譬喩として冠したのである。○思ひ萎えて　物思ひに堪へずして萎れ伏しての意。「しなえ」は「君に戀ひ之奈要うらぶれ」(二九八)の如く、ヤ行下二段に活用する動詞である。外に撓む意の動詞に「しなふ」といふハ行四段活用の動詞があつて、「眞木の葉の之奈布勢の山」(二九一)の如く用ゐられてゐる。「しなゆ」は此の「しなふ」や又「しなぶ」(萎)「しなやか」「しなしな」「しぬに」などと同根の語であらう。○偲ぶらむ　「偲ぶ」はシヌブと訓む。戀ひ慕ふこと。此處の「らむ」は連體形で下の「妹」に懸つてゐる。○妹が門見む　「妹が門」と歌つたのは、作者が家を出る時妻が門邊に佇んで見送つてゐたのを思ひ起して、特に斯く歌つたのである。さて此の妻の家は「或本歌」の末に、「吾が妻の兒が夏草の思ひ萎えて嘆くらむ角の里見む」(一三八)とあるのに據つて、都濃の里にあつた事が知られる。○靡け此の山　「山」は眼前に眼を遮つてゐる山を指してゐる。「靡け」といふのは、高い山が横に長く延びて低くなる意である。

【譯】石見の國の都濃の濱邊を、船を寄せるに好い浦も無い處だと人は思ふであらう。よし浦は無いにしても、また潟は無いにしても、自分にとつてはやはり懷しい處であらう。海邊を指して眞青な美しい沖の藻を、朝夕に吹き起る風や打ち寄せる浪が、渡津の荒い磯の上に寄せて來る景色も面白い。其の波につれて、あちらへ寄つたりこちらへ寄つたりする美しい藻のやうに、自分に靡いて寄り添うて寢たいとしい妻を、後に留め置いて來たので、此の道中の幾度となく來る曲り角毎に、幾度も幾度も後を振り返つて眺めるけれども、懷しい里はいよいよ遠く離れてしまひ、次第次第に高く山道を幾重か越えて來たので、もう妻のゐる邊は見えない。あの里で定めし夏の萎れ伏した草のやうに、思ひ萎れて自分を戀ひ慕つてゐるであらう、其のいとしい妻のゐる家が見たい。おい前に立ち塞つてゐる山よ、靡き伏してくれ。今一度妻の家が

見たい。

【評】此の歌の前半に於ては、先づ家を出發して山越えに差掛るまで、邊の景色を眺めながら來た作者が、其の住み馴れた石見國の都濃の浦の地形、及び狀景を敍してゐる。此の邊の海岸線は地圖で見ても實際に屈曲が尠く、荒磯續きである。斯樣に地形上自然の景趣に乏しいにも拘らず、作者にとつては妻と共に住み馴れた土地であれば、何處よりも懷しい處であると云ふは人情である。さて此の敍事的部分に於ては、豐富に對句を用ゐてやがて藻の敍述に及び、其を一轉して家に殘した妻の事に移して、後半の抒情的部分に入つてゐるのが誠に巧みな手法である。漸く邊靜かな山道に分け入つて眼界が狹くなると共に、門出の際に作者を慕つてゐた妻に對する名殘惜しさの情が高まり、愈感情は高調に達して、最後に切なる思ひを「靡け此の山」といふ力强い奇拔な一句で叫ぶが如く歌ひ放つたのは、更に巧みな表現法である。長歌の前半を主として敍事的に歌ひ、後半を抒情的に歌ふのは人麻呂が屢試みてゐる所である。次に修辭の方面を觀察して先づ注意せられる事は、對句を多く用ゐて居る事である。然し此の長歌の對句は、必ずしも悉く人麻呂の創始に成るものとは言ひ難いのであつて、前人の作に學ぶ所が多いやうである。卷十三に收むる作者未詳の長歌は、概して人麻呂以前の古い歌謠と認められるが、それらの中に次の如き對句がある。

浦無みか　船の依り來ぬ　磯無みか　海人の釣せぬ　よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　磯は無くとも（三二三五）

道の隈　八十隈毎に　嘆きつつ　吾が過ぎ行けば　いや遠に　里離り來ぬ　いや高に　山も越え來ぬ（三二四〇）

斯樣な類似の對句がある所から考へると、人麻呂は恐らく此等の先例を學んだのであらう。なほ又山に靡けと云つた例も、卷十二の短歌に「惡木山木末ことごと明日よりは靡きたりこそ妹があたり見む」（三一五五）、又卷十三の長歌に「靡けと人は蹈めども、かく依れと人は衝けども、心無き山の云々」（三二四二）などがあるから、此等の影響を全然無視する事は出來ない。人麻呂の長歌は修辭技巧の方面に特に勝れてゐるが、此の長歌の對句などを見ると、なほ古歌謠の影響も相當に多い事を看過し難いのである。

反歌

（一三二）石見のや　高角山の　木の間より　我が振る袖を　妹見つらむか

石見乃也　高角山之　木　際從　我　振　袖乎　妹見都良武香

【釋】○石見のや　「や」は音調を整へる助詞。斯樣に助詞「の」の下に添へた例には、「淡海之哉」（一三五〇）「湊能也」（三四四五）などがある。○高角山の　「高角山」を美濃郡高津村の縣社柿本神社（俗に高角社と云ふ）の東北方に在る丘陵とする說の誤である事は、石見の學者藤井宗雄の著『石見國名跡考』（前揭地圖參看）に詳論してある。此の「高角山」は長歌にあつた角（都濃）の地の山で、今の島星山であらう。「高角」の「高」は形容詞的修飾語として添へた詞である。○木の間より　此の句を代匠記・童蒙抄・考以下諸註に、「妹見つらむか」に續けて解いてゐる。然しこれは直好の說（拱解所引）及び新考の說の通り、「木の間より」は直ちに「我が振

る袖」に續けて解くのが、歌の上から見ても、又地理上から言つても自然である。即ち作者が角山の木の間から振つてゐる袖を、門に出て見送つてゐる妻が見たであらうかといふ意である。

【譯】石見の高角山の木の間から、名殘を惜しんで自分が振つてゐる袖を、門に立つてゐた妻はそれと認めたであらうか。（如何にももどかしい事である。）

【評】長歌には專ら自分の悲しみを敍べたから、此の反歌には自己を景中に描き出して、見送る妻の胸中を思ひ遣つて詠んだのである。繁つた木の間から白い袖の飜るのが鮮かに見えて來るやうである。

一三三　小竹の葉は　み山もさやに　騷げども　吾は妹思ふ　別れ來ぬれば

小竹之葉者　三山毛清　爾亂　友　吾者妹思　別來　禮婆

【釋】○小竹の葉は　「小竹」は童蒙抄の訓のやうにシヌとも訓めるが、此の歌には篠の葉擦れの音を歌つてあるから、ササと訓む方が音調が佳い。古事記の訓註に「訓二小竹一云二佐々一」とある。○み山もさやに　「み」は美稱の接頭語。「さやに」はさや〳〵ととふ意の副詞で、物のざわめくのを形容した語である。此の「さや」を語幹とした動詞が次の「さやぐ」である。此の句のやうに「……も……に」と言つて、「も」の上に主格を置き、下に副詞を置く言ひ方は、上代から多く用ゐられてゐる。例へば「枝母とをを爾雪の降れれば」（二三一五）「袖母さや爾振らしつ」（三四〇二）「心母しぬ爾君をしぞ思ふ」（四五〇〇）などがそれである。○騷げども　原文の「亂友」を流布本にミダレドモ（童蒙抄・古義・註疏・講義同訓）、考にサワゲドモ（略解同訓）、攷證にマガヘドモ、檜嬬手にサヤゲドモ（美夫君志・新考・新解同訓）と訓んでゐる。美夫君志の說の通り、音調上前の「さやに」を承けたのであるから、サヤゲドモと訓むべきである。

【譯】山路を辿つて行くと、笹の葉は山全體をざわめかして、ざわ〳〵と音を立ててゐるけれども、自分は妻に別れて來たのであるから、其の音に紛れもせず、ひたすら妻を思ひ續けてゐる。

【評】此の反歌には、今作者が越えてゐる笹の茂つた山道の寂しさを歌つてゐる。上三句には山風にざわめく笹の葉擦れの音を寫して、邊の人氣ない寂漠たる光景を表してゐる。即ち「ささ」「さやに」「さやげども」とサの音を頻繁に繰返してゐるのは、笹の音を擬音的に感覺的に表現したのであつて、此の歌の表現法の勝れてゐる所以である。」惣じて萬葉には自然の音に耳を傾けて歌つた作が多く、從つて韻律上の技巧も極めて巧みに用ゐられてゐる。後に講ずる赤人や湯原王の歌にも音を寫した作があるが、此の歌などは此の種の作としては、最も傑出したものの一つである。

一三五　つぬさはふ　石見の海の　言さへぐ　辛の埼なる　いくりにぞ　深海松生ふる

角障　經　石見之海乃　言佐敝久　辛乃埼　有　伊久里爾曾　深海松生　流

荒磯にぞ　玉藻は生ふる　玉藻なす　靡き寐し兒を　深海松の　深めて思へど

荒磯爾曾　玉藻者生　流　玉藻成　靡　寐之兒乎　深海松乃　深目手思　騰

さ寐し夜は　幾だもあらず　延ふ蔓の　別れし來れば　肝向ふ　心を痛み　思

左宿　夜者　幾　毛不　有　延　都多乃　別　之來　者　肝向　心乎痛　念

ひつつ　顧みすれど　大船の　渡の山の　黄葉の　散りのまがひに　妹が袖
乍　顧　鶯　騰　大舟之　渡乃山之　黄葉乃　散　之亂　爾　妹　袖

さやにも見えず　妻隱る　屋上の山の　雲間より　渡らふ月の　惜しけども
清　爾毛不　見　嬬隱有　屋上乃山乃　自雲間　渡　相月乃　雖　惜

隱ろひ來れば　天傳ふ　入日さしぬれ　丈夫と　思へる吾も　敷妙の　衣の袖
隱　比來　者　天傳　入日刺　奴禮　大夫跡　念有　吾毛　敷妙乃　衣　袖

は　通りて沾れぬ
者　通　而沾　奴

【釋】○つぬさはふ　「石見」の「石」に懸る枕詞。語義に就いては、冠辭考に蘿這石の意で言ひ續けたのであつて、「角」「綱」「蘿」は相通の語で「蘿」を「つな」とも「つぬ」とも言ひ、「つぬさはふ」を約めれば「つなはふ」であるから、蘿這の意であると解いてある。又古義所引の久老の說では「さはふ」を多蔓の意とし、檜嬬手には刺延の意とし、共に「つぬ」を蘿と解してゐる。さて卷六(一〇四六)に「石綱」を岩蔦の意に用ゐた例があるから、眞淵の說の通り「つな」又はそれの訛つた「つぬ」と「つた」とは元來同一語であらう。而して「さはふ」の「さ」は姑く接頭語と見て、蔦這ふ石の意と解するのが妥當である。「蔦」を一に「絡石」とも記す通り、蔦は石に絡る習性があるので此の枕詞を生じたのである。○言さへぐ　「言」は言葉の意。「さへぐ」は「さへづる」(囀)と同根の語で、「さやぐ」或は「さわぐ」と同じ意の動詞。外國人の言語は意味が通ぜずして、唯騷々しく聞えるといふ意味で「韓」「百濟」などの枕詞とする。○辛の埼なる　辛の埼に在るの義。「辛の埼」は『石見國風土記』の中に「可良島秀海中。因之可良埼云。度半里。」とある地で、渡津の東北方六七里許りの邇摩郡宅野村の海上に韓島といふ島があるから、昔其の海濱の出鼻を辛の埼と云つたものらしい。韓島は韓國の曾富理神(大年神の御子)が韓國からの歸途上陸せられた地であると云はれ、宅野村附近には此の神に關する傳說地があり、又宅野村の隣村に五十猛村と呼ぶ地名がある。○いくりにぞ　「いくり」は水中の岩石をいふ。日本書紀の歌謠に「由良の門の門中の異句離に」とあつて、釋日本紀に註して「句離謂レ石也、異助語也」と記してゐる。此の集にも「淡路の野島の海人の海の底沖つ伊久利に鰒珠さはに潛き出」(九三三)とあり、又『袖中抄』にも「船路には石をいくりと云へり」と記してゐる。此等に據つて「いくり」は海中に沈んでゐる岩石を云ふ事が知られる。今も山陰道では石を「くり」と言ひ、又「わりぐり」といふ語は一般に用ゐてゐる。○深海松生ふる　「深海松」は海の深い處に生ずる海松であるが、又下に「深めて」をいふ爲に「深」を添へたのである。「みる」は一に「水松」とも記し、又「みるめ」「うみまつ」「みるぶさ」「うきみる」などの異名がある。海岸の岩石などに附著して生長する綠色の高さ六七寸に達する海藻である。「美

韓島

るみ

留の如わわけ下れる襤褸」(八九二)と歌つてゐるやうに、枝が次々に岐れ出るので「海松」と記す。○玉藻は生ふる　此の句までは序であつて、「いくりにぞ云々」と「荒磯にぞ云々」とは對句である。而して「玉藻は生ふる」は次の「玉藻なす」を導き出し、「深海松生ふる」は四句を隔てて「深海松の」を導き出してゐる。○玉藻なす靡き寐し兒を　藻のやうに自分に寄り靡いて添ひ臥した妻をの意。「玉藻なす」は「靡く」の枕詞。「兒」は妻を指す。○深海松の　「深」を繰返して「深めて」と言はんが爲の枕詞。○深めて思へど　流布本の訓にフカメテオモフトとあるが考にフカメテモヘドと改めたのがよい。心を深めて思へどの義で、心深く妻を思ふけれどもの意。○さ寐し夜は　「さ」は接頭語。○幾だもあらず　原文の「幾毛不有」を流布本にイクバクモアラズ(代匠記・童蒙抄同訓)と訓んでゐるが、考にイクダモアラズと訓んで以來、攷證・古義等は此の訓に從つてゐる。此の外神田本にはイクラモアラズ(小琴・略解同訓)と訓んでゐる。イクダと訓む例には「さ寢し夜の伊久陀もあらねば」(八〇四)、又イクラと訓む例には「年月も伊久良もあらぬに」(三九六二)などがあるので、ここは孰れにも訓み得る。併し古義の說の通り、集中に用ゐられてゐる「ここだ」を後には「ここら」と訛つてゐるから、此の場合も古きに從つて「いくだ」と訓むのが穩當であらう。○延ふ葛の　「別れ」の枕詞。這ふ蔦葛の蔓が、彼方此方に別れて伸びる意を以て懸けたのである。○肝向ふ　「心」の枕詞。語義に就いては古事記傳に、上代に於ては五臟六腑を總て「きも」と言つたのであつて、腹中に多くの肝が向ひ合つて集まつてゐて、凝々(こりこり)しといふ意で「心」に懸ると解いてゐるが、首肯し難い。思ふに「肝」は內臟を云ふのであつて、「向ふ」は內臟が相對つて蟠まつてゐる貌を云つたのである。此の句を「心」に懸けたのは「群肝の」を「心」に冠したのと同樣に、昔は心の働きは肝から起ると考へたからであらう。○心を痛み既出(五)參照。○大船の　「渡」の枕詞。船が海を渡るといふ意で冠したのである。集中に此の枕詞を「憑む」に冠した例もある。○渡の山　此の山の所在未詳。渡津村の近傍の山であらう。○散りのまがひに　「散之亂爾」を流布本にチリノマガヒニ、元暦校本・神田本にチリシミダレニ、瀧故堂本にチリノミダレニと訓んでゐる。此の外古義にはチリノミダリニ(新訓・新解同訓)と訓んでゐるが、一般には流布本の訓を採用してゐる。「黃葉の知里能麻河比(マガヒ)は」(三七〇〇)「春花の知里能麻可比爾(マガヒニ)」(三九六三)等の例を參考して、流布本の訓に從ふべきである。「散り」及び「まがひ」は動詞の連用形から出た名詞である。黃葉が頻りに散り交ふのに紛れての義で、葉が頻りに散つて眼界を遮るのを云ふ。○さやにも見えず　「さやに」は「さやかに」と同じ意の副詞。判然と見えない意。さて黃葉の散り交ふのに遮られて、妻の振る袖が明かに見えないと云つたのは、黃葉の頻りに散る樣を詩的に表現したのであつて、妻の姿が必ずしも山から見える譯ではない。○妻隱る　「屋上」の「屋」に懸る枕詞。古は妻を娶ると新たに家を建てたのであつて、此の事は須佐之男命が宮造るべき地を出雲國に求め給うて、須賀に宮造りし給うた時の神詠「八雲立つ出雲八重垣妻隱に八重垣作るその八重垣を」(記・紀)にも現れてゐる。從つて「妻隱る」は妻の隱る屋の義で「や」に懸けたのである。○屋上の山　「屋上山」は註に「一云室上山」と記し、細井本の訓には「室上」にヤカミと朱書してある。さて此の山の所在に就いても諸說があつて未だ確定してゐない。古義には邑知郡矢上村に原山といふ高山が在つて、是が八上山卽ち此處に謂ふ屋上山であると云つてゐる。又『大日本地名辭書』には渡津の東の丘陵であつて、今下松山村に屬し大字八神といふ地であるとし、豐田氏の『萬葉地理考』には邇摩郡淺利村の南にある室上山(一に淺利富士とも云ふ。江ノ川を隔てて遙かに島星山に對してゐる。)であらうと述べ

て居られるが、此の二説は此の歌としては相應しくない。思ふに此の山は人麻呂が道中實際に越えた山ではなくして、唯序に用ゐたのであつて、此の序の意味からすれば、人麻呂の居住地の東方に當る著名な高い山でなければならぬ。邑智郡矢上村は都濃村から東南五里許り隔つてゐるが、此の村の邊には附近でも最も高い高度八九百米の山が聳えてゐるから、恐らく矢上村の方角の山を指して「屋上の山」と言つたのであらう。○雲間より渡らふ月の　「渡らふ」は「渡る」に動作の繼續を表す助動詞「ふ」を添へた形。雲間を通つて西の方へ渡り行く月といふ意である。さて「妻隱る」以下此の句までは、次に「惜しけども隱ろひ來れば」を云ふ爲の序である。小琴に「屋上の山の」を「隱ろひ來れば」へ懸けて、「雲間より云々」の二句を序詞と見てゐる(攷證・美夫君志同説)のは穩當でない。○惜しけども　「雖惜」を流布本にヲシメドモと動詞にして訓んでゐるが、代匠記精撰本及び考にはヲシケレドと訓み、略解にはヲシケドモと訓んでゐる。略解の訓がよい。「惜しけ」は(七七)の「無けなくに」の條に説明した通り、形容詞の古い活用形であつて、此處は其の已然形である。一句の意は「惜しけれども」と同じ。○隱ろひ來れば　「隱ろひ」は「隱る」に例の助動詞「ふ」が附いた形で、次第々々に隱れるのを云ふ。次の「來れば」は集中に用例の多い「明け來れば」のそれと同樣に、深い意味は無い。一句の意味は「隱ろひ行けば」と同じである。此の句は助詞の「ば」によつて既定事實を條件としてゐるのであつて、次の「天傳ふ入日さしぬれ」と同じ資格で「丈夫と思へる吾も云々」に懸つてゐる。○天傳ふ　「日」の枕詞。天路を傳ひ渡る日といふ意味で懸けたのである。○入日さしぬれ　「ぬれ」は「ぬ」の已然形で、後の語法ならば下に「ば」があるべき所である。此の語法に就いては既に述べた。此の句は「入日さしぬれば」の意で、語法上は前の「隱ろひ來れば」と同格を以て次の句へ續いてゐる。○敷妙の　「衣」の枕詞。(既出)○通りて沾れぬ　涙の爲に袖が裏まで滲み透つて濡れたといふ意。

【譯】石見の海の韓の埼にある海中の石には深海松が生え、又其の荒い磯邊には美しい藻が生えてゐる。其の美しい藻のやうに、自分に靡いて寄り添つて寢た妻を、深海松の名の通り深く思つてゐるけれども、共に寢た夜は幾許もなくして別れて來たのであるから、如何にも悲しく物思ひに堪へかねて、妻の方を振り返つて眺めるけれども、渡の山の黃葉が頻りに散り交ふのに遮られて、妻が自分に向つて振つてゐるであらうと思はれる袖は、はつきりと見えないで、――矢上の山に掛つてゐる雲の間を渡る月が、雲に隱れるのが惜しまれるやうに、――名殘惜しいけれども、妻のゐる邊は次第に隱れて行き、折しも入日の光も淋しくさして來たので、猛き丈夫ぞと思つてゐる自分も、衣の袖が濡れ透るほど泣いたことである。

【評】此の長歌も前の作と同じ場合の歌である。此の歌にも初に海邊の光景を歌ひ、後に山道の黃葉を歌つてゐるのは、海岸傳ひに歩いて次第に山の方へ差し掛つて來た道順に據つたものと思はれる。一體石見國の海岸には砂濱が尠く、岸の下に直ぐ海を見下すやうな地形の處が多いのである。而も海水が非常に清澄であつて、水中の岩に生えてゐる綠の藻の搖れてゐる樣が、岸上から手に取るやうに見えるのである。かういふ美しい海邊の狀景を思ひ浮べて此の二首を讀むと、此等の作に詠まれてゐる玉藻の描寫が、單なる序としてのみでなく、實景を歌つたものとしても、如何にも自然であることが納得される。なほ此の長歌に於ては、紅葉と入日とを以て秋の山道の寂しい光景を、如何にも鮮明に印象的に寫し出して居り、それと同時に作者の妻に對する哀別離苦を敍景に絡ませて、美しくも亦哀れな情景融合の境地を詠じてゐる點は、前の作に比して一段と巧みである。次に此の歌の

修辭法を一瞥すると、既に澤瀉氏も指摘せられてゐる通り、前の歌に主として對句を用ゐたのに對して、此には枕詞と序を多く使用して修辭上の妙を示してゐる。即ち對句は二句對を一箇所置いてゐるのみであるが、枕詞の數は五音句の半數に相當する十句を占めて居て、「妻隱る」の如き此の歌の表現上誠に有效なるものもある。なほ序も冒頭並に後半に用ゐられて居り、其の敍景的内容が勝れてゐる點も注意すべきである。尤も此等の修辭法の上に影響を及ぼした先例としては、卷十三の古歌に

朝なぎに　來寄る深海松　夕なぎに　來寄るまた海松　深海松の　深めし吾を　また海松の　また行きかへり（三三〇一）

の如き類似の句があるから、悉くが人麻呂の獨創に成る詞句と斷ずることは出來ない。然しそれはともかくとして、右の二首は修辭技巧をそれぞれ使ひ分けてゐる點に興味がある。

反歌二首

一三六　青駒の　足搔を速み　雲居にぞ　妹があたりを　過ぎて來にける
青駒之　足搔乎速　雲居　曾　妹之　當　乎　過而來　計類

【釋】○青駒の「青駒」は「水鳥の鴨の羽の色の青馬」（四四九四）によつて明かであるやうに、黑味がかつた青毛の馬を云ふ。○足搔を速み「足搔」は「赤駒が安我伎を速み」（三五四〇）の如き例に據つてアガキと訓む。「あ」は「安能於登」（足の音）「安由比」（脚結）「安夫美」（鐙）などの「あ」で足のこと。足で地を搔くやうにするから、馬の足の運びを「足搔」といふ。一句は足取が速いのでの意。○雲居にぞ「雲居」は空をいふ。ここは「雲居遙かに」と云ふのと同じで、遙か遠くにの意を表してゐる。「ぞ」は係の助詞。○過ぎて來にける「にける」は過去完了の助動詞。此の句は通り過ぎて來た意ではなく、遠ざかつたのを言ふ。

【譯】自分の乘つてゐる青馬の足取が餘り速いので、名殘惜しくも妻の家の邊を、もはや遙かに離れてしまつたことである。

一三七　秋山に　落つる黃葉　しましくは　な散り亂りそ　妹があたり見む
秋山爾　落　黃葉　須臾者　勿散　亂　曾　妹之　當　將見

【釋】○しましくは「須臾」を流布本にシバラクハ（考・檜嬬手同訓）、略解にシマラクハ（攷證・美夫君志・講義同訓）、古義にシマシクハ（新考・新訓・新釋同訓）と訓んでゐる。シバラクの假名書の例は無いから流布本の訓は妥當でない。シマシクとシマラクには、「思末志久も見ねば戀しき妹を云々」（三六三四）「思麻良久は寢つつもあらむを」（三四七一）の如き例があるから、此處は孰れに訓んでもよい。姑く古義の訓を採つて置く。○な散り亂りそ　原文の「勿散亂曾」を流布本にナチリミダレソ、元暦校本・金澤本等にチリナミダレソ、代匠記精撰本にナチリマガヒソ、考・古義等にナチリミダリソと訓んでゐる。「散亂」は代匠記のやうにチリマガフとも訓む事が出來るが、姑く一般の訓に從つてチリミダルと訓んで置く。「亂る」は既述の通り古くは四段に活用したやうであるから、一句をナチリミダリソと訓むのである。（此の句の註には「一云知里勿亂曾」とある。）

【譯】秋の山に散るもみぢ葉よ、どうか暫くの間は散り亂れないでくれ。（そんなに私の目を遮らないでくれ。）いとしい妻の住む里の方を眺めたいと思ふから。

【評】長歌の「黄葉の散りのまがひに妹が袖さやにも見えず」の句と同じ意味を短歌に詠んだのであるが、黄葉に呼び掛けて歌つてゐる所に表現上の特色がある。

柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子（よさみのをとめ）與二人麻呂一相別歌一首

一四〇　な思ひと　君は言へども　逢はむ時　いつと知りてか　吾が戀ひざらむ
勿念　跡　君者雖　言　相　時　何時跡知　而加　吾　不　戀有牟

【釋】○妻依羅娘子與二人麻呂一相別歌　「依羅」はヨサミと訓む。氏の名である。前に述べた通り、人麻呂の嫡妻は彼が都に居た頃兒を遺して死んだのであるから、依羅娘子は其の後に迎へた妻であらう。依羅娘子は人麻呂が石見國で死去したのを聞いて、大和で挽歌を詠んでゐるから、前の長歌に歌はれてゐる石見の妻とは別人と見るべきである。（此の娘子を石見國に留まれる妻と同一人と見る説もある。）さて此の歌は人麻呂が朝集使となつて上京し、やがて任國石見へ歸る時に都に留まつた依羅娘子が詠んだ歌である。○な思ひと　「勿念跡」を流布本にオモフナト（代匠記・童蒙抄・考・攷證等同訓）、考の一訓及び略解にナモヒソト（檜嬬手・美夫君志同訓）、古義にナオモヒト（新考・講義等同訓）と訓んでゐる。古義の訓が穩當である。禁止の助詞「な」に對する結の助詞「そ」を用ゐない語法の存した事は既に述べた。〔七七〕參照。○いつと知りてか　此の「か」は「戀ひざらむ」に懸つて反語となつてゐる。○吾が戀ひざらむ　本文の「牟」は流布本に「乎」とあるが、金澤本・類聚古集其の他の古寫本に「牟」とあるのに據つて改めた。最後の「む」は上の「か」に對する結である。

【譯】思ひ數くには及ばないと言つて、あなたは慰めて下さいますけれども、今度お目に掛れるのはいつの事とも知れないのですから、どうしてお慕ひ申さないで居られませう。

【評】初の二句に男が慰め且勵ました言葉を歌つて居る爲に、其の場面があり〳〵と想像せられる。

挽歌

後崗本宮御宇天皇代　天豐財重日足姫天皇

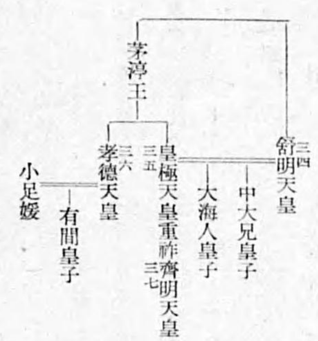
有間皇子自傷結二松枝一歌二首

一四一　磐代（いはしろ）の　濱松が枝（え）を　引き結び　眞幸（まさき）くあらば　また還り見む
磐白乃　濱松之枝乎　引　結　眞幸　有　者　亦　還　見武

【釋】○挽歌　「挽歌」は「雜歌」「相聞」と共に萬葉集の三大部類の一である。「挽歌」といふ語は、『晉書』の樂志に「挽歌出二漢武帝役人之勞一、歌聲哀切、遂以爲二送終之禮一。」と見え、又『古今注』に「……使二挽柩者歌一之、世呼爲二挽歌一。」とあるのに據つて知られる通り、支那で柩の車を牽く時に歌つた歌を云ふ。從つて支那でも詩の一部類として、死者を悼む詩を「挽歌詩」又は「挽詩」と呼んでゐる。此の集に於ける「挽歌」なる名目は、卽ち此の「挽詩」に

倣つたのである。從つて萬葉の挽歌は、後の勅撰集に見える哀傷歌と略同一性質のもので、死者に對する哀悼の情を歌つた作が中心をなしてゐる。「挽歌」を童蒙抄にヒクウタ、考にカナシミノウタ、古義にカナシミウタと訓讀してゐるが、是はやはりバンカと音讀すべきである。○後崗本宮御宇天皇代　齊明天皇の御代である。（既出）○有間皇子　孝德天皇の皇子で、御母は小足媛である。齊明天皇紀の記載に據れば、四年十月天皇が紀伊の牟婁溫泉（今の和歌山縣西牟婁郡瀨戸鉛山村の湯崎溫泉）に行幸中に、留守官蘇我赤兄の奸計に乘つて不穩の御計畫があつた事が發覺し、皇子は牟婁溫泉へ護送せられて中大兄皇子の訊問を受けられ、遂に十一月十一日藤白坂に於て死を賜うたのである。時に御年十九であつた。藤白坂は紀伊國海草郡內海町字藤白の近傍で、和歌山市の南、日方町から有田郡へ越える峠道に在る。○自傷結二松枝一歌　此の御歌は皇子が牟婁溫泉の行在所へ護送せられる途中、日高郡の海岸磐代の磯馴松の枝を結んで、再び無事に此の地を過ぎる事が出來るやうにと、呪をして詠まれた歌である。上代に於ては木の枝や草の莖などを結んで置いて、再び見るまでそれが解けずにあれば事が成り、解けてゐれば事が成就しないものと判斷する習俗があつた。有間皇子が松の枝を結ばれたのは、無事であるやうにと祈られる爲である。此

紀伊國海岸略圖



の草木結びの呪術的習俗を詠んだ歌の例には、「たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ」（一〇四三）「足引の名に負ふ山菅押し伏せて君し結ばば逢はざらめやも」（二四七七）「妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くなまた顧みむ」（三〇五六）などがある。

○磐代の濱松が枝を　「磐代」は湯崎溫泉へ行く途中の日高郡の海岸で、今の南部町の西北方、岩代村の海岸である。同村大字西岩代字結の海邊に一老松があつて、土地では之を結松と言ひ傳へてゐたが、今は枯れてしまつて、新たに小松が植ゑてある。○眞幸くあらば　「眞」は接頭語。（既出）「幸く」は（三〇）に述べた。申開きが立つて無事であつたならばの意。○また還り見む　再び還り來つて此の松の枝を見ようといふ意。

【譯】かうして磐代の濱邊の松の枝を引き結んで置いて、幸ひにして申開きが立つて、無事であることが出來たならば、再び還り來つて此の枝を見ようと思ふ。

【評】前述の通り、有間皇子は此の岩代の地を通過し給うて後數日を經て、藤白坂に於て死に就かれたのである。斯樣にはかなく世を去り給うた皇子の御悲運を思ひ浮べて此の御歌を讀むと、皇子の御胸中が察せられて一層あはれが深く感ぜられる。後に此の結松を見て、皇子の薄運を悲しみ同情して詠んだ歌は、集中に（一四三）以下四首載錄せられてゐる。左に掲げるのは「長忌寸意吉麻呂見二結松一哀咽歌二首」と題する作である。

磐代の　岸の松が枝　結びけむ　人は還りて　また見けむかも　（一四三）

磐代の　野中に立てる　結松　心も解けず　古思ほゆ　（一四四）

なほ磐代の地は牟婁溫泉へ通ずる要路に當つてゐる爲でもあるが、又其の地名に「磐」といふ語があるので、古く

からめでたい地名と考へられたのでもあらう、巻一にも中皇命の御作に此處で草結びをした事が見えてゐて、其の歌詞に「磐代の岡の草根をいざ結びてな」(一〇)とある。

一四二　家にあれば　笥に盛る飯を　草枕　旅にしあれば　椎の葉に盛る

家有者　笥爾盛　飯乎　草枕　旅爾之有　者　椎之葉爾盛

【釋】○家にあれば　「家有者」を流布本にイヘニアレバと訓んでゐるが、古葉略類聚鈔・神田本にはイヘニアラバと訓んである。多くの註釋書には前の訓を採用してゐるが、檜嬬手・新訓・新解は後の訓に從つてゐる。思ふに此處は下の「旅にしあれば」に對して言つたのであつて、現在は家に居ないのであるから、此の句を假定條件を示したものと見て、イヘニアラバと訓むのは一應の道理がある。然し家にあるといふのは全くの假定條件ではなくして、過去に於ては家に居たのであるから、ここはやはり既定事實を條件としたものと見て、イヘニアレバと訓むのが妥當である。卽ち家に居る時には、の意。○笥に盛る飯を　「笥」は一般に容器を云ふことは前述の通りであるが、是は日本書紀の歌謠に「柁摩該(タマケ)(玉笥)には飯さへ盛り」とある「笥」と同じで、食器の事である。「笥」は和名抄木器類の中に揭げて註に「禮記注云、笥和名介盛レ食器也」とあるから、當時一般には木製の物を用ゐたやうであるが、古くは土器であつたらしく、又延喜内匠寮式には御飯笥(ミケ)を銀器と記してあるから、高貴には銀器を用ゐたのである。○草枕旅にしあれば　〔五〕參照。○椎の葉に盛る　「椎」は所謂常綠樹のしひの木であるが、新考には椎の葉は細かくて食物を盛るには相應しくないから、新撰字鏡に「椎、奈良乃木也」とあるのに據つて、檜の葉であらうと說かれてゐる。椎の葉は長卵形で檜の葉に較べると小さい。檜の葉は普通二三寸であるけれども、「みづなら」の葉は更に大きく四五寸に及び、食物を盛るには恰好であるが、檜は落葉喬木であるから、此の歌の詠まれた時期には得難いのである。要するにここはシヒと訓んで、所謂椎の葉と解すべきである。一枚の椎の葉には飯は何程も盛れないから、椎の小枝を折り敷くか、或は掌の上に葉を何枚も敷いて、それに盛つたのであらう。

【譯】事もなくて家に居る時には、飯笥に盛つて食べる飯を、今はかうした旅の空であるから、椎の葉の上に盛つて食べることである。

【評】草枕をして旅寢をした、上古の不自由な憂い旅の苦しさを詠まれた御歌として、人口に膾炙してゐる。然し唯尋常の旅に在つて詠まれた御歌ではなくして、上に述べた通り、囚はれの身としての旅中の御作であるから、此の點を念頭に置いて味ははねばならぬ。卽ち初の二句と第三句以下とが、對照的に置かれてゐる所に、作者の無量の感慨が歌はれてゐるのである。

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

天皇聖躬不豫之時大后奉御歌一首

四七　天の原　ふり放け見れば　大君の　御壽は長く　天足らしたり

天原　振放見者　大王乃　御壽者長久　天足有

【釋】○近江大津宮御宇天皇代　天智天皇の御代である。(既出)○聖躬不豫之時　「聖躬」はオホミミと訓む。天皇

の大御身を申す。「不豫」は御不例をいふ。「聖躬不豫之時」を童蒙抄にミヤマヒシタマフトキニ、檜嬬手にミヤマヒアツシクマストキニ、古義にオホミヤマヒセストキニと訓んでゐる。日本書紀に據れば天智天皇は十年九月から御不例にわたらせられ、十月には御惱篤くならせられ、其の年の十二月に崩御になつたのである。○大后　天智天皇の皇后、卽ち古人大兄皇子の皇女倭姫王である。「大后」は既に〔八五〕に述べた通り、后の中の嫡后の意で「おほきさき」と言ふのであつて、「皇后」と記したのと同じである。攷證に此の「大后」を皇太后の意に見てゐるのは誤である。

○此の御歌の解釋には兩說がある。其の一は實際に天空を仰ぎ見て歌ひ給うたものと解する、代匠記・童蒙抄・考・略解・攷證・古義等の採つてゐる一般的解釋であり、他の一は御殿の屋上を仰ぎ見て歌はれたものと解く檜嬬手の解釋で、美夫君志・講義等は此の說に從つて居る。○天の原ふり放け見れば　「天の原」の「原」は「國原」「海原」等の「原」と同じく、果てしなく廣い所を指す語。「ふり放け」の「ふり」は接頭語。「さく」は既に述べた通り「さかる」に對する他動詞で、放つ或は隔てるの意。「ふり放け見る」は〔一七〕に出た「見放く」と略同義で、仰いで遠方を眺める意である。檜嬬手の說では此の二句は、推古天皇紀に見える正月の壽歌に「やすみしし我が大君の、隱ります天の八十蔭、出で立たす御空を見れば、萬代に斯くしもがも云々」とあるやうに、宮殿の屋を御空と云つた例があるとして、ここも寢殿の屋上を仰ぎ見ればの意であると解いてゐる。此の說に從ひ難い事は下に述べる。

○御壽は長く天足らしたり　此の二句を流布本にオホミイノチハナガクテタレリ、代匠記精撰本にオホミイノチハナガクアメタレリ、考にミヨハトコシクアマタラシヌルと訓んであるが、小琴にミイノチハナガクアマタラシタリと訓んで以來、略解以下の諸註は此の訓に從つてゐる。今は小琴の訓を採る。なほ京大本の朱書の訓にも同樣にある。此の二句の意味は、聖壽は長久に天の如く充滿してゐらせられるといふ祝賀の詞である。「天足らす」の「天」は、「天の足夜」(三二八〇)「天の御舍」(祝詞)「天の新巢」(古事記)「天の御饗」(同上)などの如く、名詞に冠する美稱の接頭語の「天」と同じで、それを此處は「足る」といふ動詞に冠したものであらう。然しなほ初句に「天の原」とあるのに因んで、天の如くといふ奉讃の意味も加はつてゐる。「足らし」の「し」は敬語の助動詞「す」の連用形。「足る」は祝詞の「足魂」「足幣」「足國」「足日」等に見る如く、長久の意を添へる接頭語として用ゐるが、こは原義によつて滿ち盛ふ或は充足する意の動詞である。檜嬬手には此の二句を解いて、「大御壽と百結び八十結びに結びたれたる千尋の葛根は、長く天たらしてあり」と述べてゐる。なほ檜嬬手別記を見ると、上代では屋上から千尋の栲繩を百結び八十結びに結んで垂らした事が日本書紀に見えて居り、而して此の栲繩を仰いで壽いだ宮壽の詞に、「卽取結繩葛者此家長御壽之堅也」(顯宗天皇紀)とあるから、ここも其の栲繩を仰ぎ見て、聖壽の長久なる事を賀したのであると解いてゐる。次に講義には、集中に「天にはも五百つ綱延ふ萬代に國知らさむと五百つ綱延ふ」(四二七四)と歌はれてゐる通り、棟梁・桁柱等を取り結んだ綱は長く彼方此方に引き延へたのであつて、それは決して守部の謂ふやうに垂らす爲の千尋繩ではないと述べられ、而して此の御歌は延へ渡した千尋の繩葛の結び目の堅固であるのを見て、聖壽もかくの如く固くあらむ、と其の長久を壽いだのであると解かれてゐる。然しながら右に述べた檜嬬手及び講義の說は妥當でないやうに思ふ。その理由は(イ)冒頭に「天の原」といひ、又「ふり放け見れば」とあるのは、集中の總ての用例を見ると、どうしても大空を仰ぎ見る意である事、(ロ)

假に「天」を屋裏の意と見ても、繩または綱に關する語は此の御歌には全く見えてゐない事、此の二つの理由から、此の御歌を室壽の詞或は思想と關聯せしめて解釋する檜嬬手・美夫君志・講義等の說は、牽强附會に陷つたものやうに思はれる。

【譯】廣々とした大空を遙かに仰いで見ますと、我が大君の御壽が、此の廣漠として際涯のない天の如く、永遠無窮に滿ち足りて居られます事は疑ございません。

【評】歌の上には聊かも御不豫の事を仰せられず、又憂ひ給うてゐる影も無く、寧ろ必然的に御平癒になり、長久に榮え給ふべき事を、廣大なる天空に寄せて、積極的に强い信念を以て歌はせられたのが、如何にも雄大であり莊重である。此の點は皇后の御歌として誠に相應しいばかりでなく、又上代に於ける國民精神の基調を歌はせられたものとも見られて意義が深い。なほ一首の韻律もア列音及びオ列音が大部分を占めてゐるので、自ら莊重な響を釀し出してゐる。

一書曰近江天皇聖體不豫御病急時、太后奉獻御歌一首

一四八　青旗の木幡の上を通ふとは目には見ゆれど直に逢はぬかも
青旗乃木旗能上乎賀欲布跡羽目爾者雖視直爾不相香裳

【釋】○一書曰云々　玆に講ずる「青旗の云々」は崩御の後の御歌であるから、此の題詞は〔一四八〕の題詞とは思はれない。童蒙抄には一書に之を〔一四七〕の題詞としてゐるのであるとし、〔一四八〕の題詞は錯亂したのであらうと言つてゐる。又攷證には此の題詞の附いた一書の歌と、次の〔一四八〕の題詞とは共に脫ちたのであらうと述べてゐる。要するに「一書曰云々」は前の御歌の左註と見るべきである。○青旗の木幡の上を　此の二句の解釋には從來兩說が行はれてゐる。其の一說は「青旗」及び「こ旗」を旗と見るのであつて、先づ仙覺抄には「青旗」は『常陸國風土記』に「葬具儀赤旗青幡交雜飄颺云々」とある「青旗」で、葬具であらうと云ひ、童蒙抄も此の說に從つて、更に「こはた」は「黃旗」であらうと述べてゐる。又考には孝德天皇紀に「其葬時帷帳等用二白布一」とあつて、集中の歌にも殯宮を白布を以て裝ひ奉つた事が見えてゐるから、ここの「青旗」は白旗を云ふのであるとし、次の「木旗」を「小旗」の誤であつて、「を」は接頭語であると解いてゐる。（略解同說）更に攷證には「青旗」はやはり青い旗で、「木旗」は「小旗」の義で小さい旗と解いてゐる。（新解・全釋同說）此等に對する異說は代匠記の說で、それは「青旗の」を集中の「青旗乃葛城山に」（五〇九）「青幡之忍坂の山は」（三三三一）等の用法と同じく、次の句の枕詞であるとし、木の茂つてゐる樣が青い旗を立てたやうであるから懸けたのであつて、「木旗」は木幡卽ち山城の地名であると解くのである。（美夫君志・新考・講義同說）思ふに原文の「木旗」の「木」は、上代に於ける特殊假名遣の上から見る時は、「小」とは別種の假名に屬してゐるから、「木旗」を「木幡」と見て地名とするのが正しいやうである。（別項上代の特殊假名遣の解說參照。）さて木幡は今は山城國宇治郡宇治村大字木幡、卽ち京都市伏見區の南に續く地である。古くは「山科の木幡」と云はれ、「山科」は宇治郡の北半部一帶を指す廣い地名であつた。天智天皇の御陵は京都市東山區御陵町に在つて、此の山科御陵と木幡とは二里餘りを隔ててゐる。「木幡の上を」と云ふのは、木幡山（伏見山の東部を指す）の上をの意である。○通ふとは　神去り給うた天皇の神靈が、山科御陵に近い木幡山の

上を天翔つて通ひ給ふのはの意。○目には見ゆれど　此の句を流布本にメニハミレドモと訓み、童蒙抄・考其の他之に從つてゐるが、今は古義の訓メニハミユレドに從ふ。○直に逢はぬかも　「直に」は直接にの意。御魂の天翔り給ふのが目に見えるやうであるが、現に御姿を拜し奉る事が出來ないのが悲しいといふ意。

○上代の特殊假名遣に就いて　萬葉假名で記載せられた上代の文獻に於ては、今日の假名遣の上で區別せられてゐる假名の外に、更にエ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロの十三音（古事記ではチ・モを加へた十五音）を表す同音の假名（音假名並に訓假名）が各二類に分れてゐて、語によつて用ゐる假名の種類が一定してゐるのである。例へばコに當てた假名は

コ｛（甲類）古・故・胡・姑・祜・枯・固・高・庫・顧・孤・呉・誤・虞・五・吾・後（音假名）、子・兒・小・粉・籠（訓假名）
（乙類）許・己・巨・渠・去・居・虛・擧・據・與・碁・其・期・語・馭・御（音假名）、木（訓假名）

の如く二類に分れて居る。而して「木末」「木高し」「木立」などのコ（木）を表すには、「木」を始め「許」「己」などの乙類の假名を用ゐて、甲類の假名を用ゐる事なく、又反對に「小松」「小菅」「小馬（駒）」などのコ（小）を表すには、「小」を始め「古」「子」などの甲類に屬する假名を用ゐて、乙類の假名を混用しなかつた。斯樣に兩類の假名の間には用法上に嚴然とした區別があつた。これは恰も今日イ・エ・オとヰ・エ・ヲとを、それぞれ假名遣の上では區別して用ゐてゐるのと同じ事情である。而して奈良朝時代までは右の十三の音を表す假名が兩類に分れてゐて、混用する事が無かつたのである。これは後世無くなつた音聲が當時あつて、其の兩類の假名の間に、發音上の相違があつた爲であらうと云はれて居る。此の特殊假名遣は古く宣長門下の石塚龍麿が、其の著『假名遣奥山路』（日本古典全集所收）に始めて公にしたのであるが、近時橋本進吉博士は獨立の研究に出發して、龍麿の研究と略一致した結果に到達せられ、而も龍麿の研究の不備を修正せられたのであつて、其の大綱は『國語と國文學』第八十九號誌上に發表せられてゐる。（なほ特殊假名遣に就いては、『萬葉集講座』第三卷並に『國語科學講座』文字學篇所收の遠藤嘉基氏の解說等を參照せられたい。）

【譯】山科の木幡山の上を、御魂が天翔つて通ひ給ふやうに目には見えるけれども、（幽明境を異にしてゐる故、）直接に玉體を拜し奉る事の出來ないのが悲しい。

【評】上代に於ては靈魂が肉體から遊離する事が、卽ち死であると考へたのである。記紀に見える傳說に、日本武尊が崩御の後八尋白千鳥と化して、御陵から出て諸處を天翔つて、最後に天に昇り給うたといふ事が記されてゐるが、此の白千鳥は上代人の靈魂觀念に基づく靈魂の具象化に外ならない。此の御歌もかうした觀念が基調となつてゐるのであつて、悲愴な感情を切實に歌ひ給うてゐる。なほ原本には此の御歌の次に「天皇崩後之時倭太后御作歌一首」と題して、「人はよし思ひやむとも玉緩影に見えつつ忘らえぬかも」（一四九）が掲げてある。

天皇崩時婦人作歌一首　姓氏未詳

一五〇　うつせみし　神に堪へねば　離り居て　朝嘆く君　放れ居て　吾が戀ふる君
空蟬　師　神爾不　勝者　離　居而　朝嘆　君　放　居而　吾　戀　君

玉ならば　手に卷き持ちて　衣ならば　脫ぐ時もなく　吾が戀ふる　君ぞ昨日の夜
玉　有者　手爾卷　持　而　衣　有者　脫　時毛無　吾　戀　君曾伎賊　乃夜

夢に見えつる
夢　所見鶴

【釋】○天皇崩時婦人作歌　「天皇」は同じく天智天皇。「崩時」はカムアガリマシシトキと訓む。「婦人」は官女であ

る。○うつせみし　「うつせみ」は「現し身」の義で、既に(一三〇)に説明した通り、此の世に現に生きてゐる身をいふ。最後の「し」は強く指示する助詞。○神に堪へねば　此の句を新考にカミニアヘネバと訓んであるが、從來の訓の儘でよい。「神」は崩じ給うて神となられた天皇を指し奉る。天に上り給うた神に隨ひ奉る事は出來ないからといふ意。○離り居て　「離居而」を流布本にハナレヰテ、古義にサカリヰテと訓んでゐる。なほ此の下一句を隔てて「放居而」とあるのをも、流布本にハナレヰテ、代匠記初稿本にサカリヰテと訓んでゐる。多くの註釋書は前をハナレヰテと訓んで後をサカリヰテと訓むか、又は前をサカリヰテと訓み後をハナレヰテと訓んでゐる。集中には「離」「放」を共にサカルともハナルとも訓ませてゐるから、孰れをサカルと訓み孰れをハナルと訓んでも差支ないが、兩者を同一に訓むのは穩かでない。○朝嘆く君　原文の「朝」を誤字と見る説もあるが、結尾句に「昨日の夜夢に見えつる」とある通り、此の歌は其の翌朝詠まれたものであるから、文字通りに解くべきである。此處の「君」は一句を隔てた「吾が戀ふる君」と同格であつて、一首の最後の「昨日の夜云々」に懸る。○手に巻き持ちて　上代に於ては玉を特に愛して、緒に貫いた玉を男女共に手・足・頸等に巻いて裝飾としたのである。それは今日遺存してゐる土偶によつても知られるが、また次の歌の上にも表れてゐる。即ち集中に「足玉も手珠もゆらに織る機を」(二〇六五)「泊瀬少女が手に纏ける玉は亂れて云々」(四二四)の如き歌がある。「玉」を美稱の接頭語として屢用ゐてゐるのも、玉を愛したからであり、又愛するものを玉に譬へた歌が多いのも其の爲である。愛する者を玉に譬へた例には、此の御歌の外に「玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻き難し」(七二九)の如きがある。○脱ぐ時もなく　此の句を流布本にヌグトキモナミ、考にヌグトキモナケムと訓んでゐる。此所の意味は著物であつたならば、脱ぐ時もなく常に身を離さず著てゐたいやうに、寸時も君を離れ難く慕ひ奉るといふのであつて、下の「吾が戀ふる」の修飾語になつてゐるのであるから、此の一句は童蒙抄及び小琴の訓に從つて、ヌグトキモナクと訓むのが妥當である。「離り居て」以下此の句までは二句對句を二つ重ねた四句連對句である。○吾が戀ふる　此の句を流布本にワガコフル(童蒙抄・考・檜嬬手同訓)と訓んでゐるが、小琴にワガコヒムと訓み改めて以來諸註之に從つてゐる。然し講義の説の通り「衣ならば云々」は譬喩であつて、現實性のある假定ではなく、又作者は實際に戀ひ奉つてゐるのであるから、ここは流布本の訓が正しい。○君ぞ昨日の夜　「ぞ」は語勢を強める係の助詞で、「つる」は其の結である。「きぞ」は「きす」とも「こぞ」とも言つた。「昨日」の古語である。從つて「きぞの夜」は昨夜の意であるが、之を單に「きぞ」と云つた例もある。即ち「戀ひてか寢らむ伎曾も今夜も」(三五〇五)の如きである。○夢に見えつる　「夢」を流布本にユメと訓んであるが、集中の假名書の例に「伊米」「伊目」とあつて、ユメと書いた例は無いから、古くはイメと云つたのである。「夢」は寢見の義。

【譯】生きながらへてゐる吾々現身は、神となつて天に昇り給うた天皇には到底隨ひ奉る事が出來ないので、お側を遠く離れゐてひたすら嘆き奉り、且お慕ひ申し上げてゐる其の君が、若し玉であらせられたら、手に纏き著けて離さず、又若し衣であらせられたら、脱ぐ時もなく身に著けてゐたいと思ふが、それほどお慕ひ申し上げてゐる大君が、昨晩ふと夢に顯れ給うたことである。

【評】「玉ならば云々衣ならば云々」の譬喩は、當時の長歌に屢用ゐられてゐる常套語句であるが、此の一首の冒頭と結句とは恨を深からしめてゐる。さて此の作を見て直ちに感ぜられる事は、上代人の死に對する觀念が今日と

餘程相違してゐる事である。當時の國民殊に上流の人々は、支那の思想や印度の宗教に接して、此等から多大の影響を受けて思想もよほど變化してゐたやうであるが、未だ國民固有の現世主義的思想を失つてゐなかつた。卽ち前に一言した通り、上代人は靈魂が永久に肉體を離れるのが死であると信じてゐた。而して其の靈魂は現世を離れるものでなくて、自由に空を天翔つて、吾々と親しい關係にあるものと信じてゐた。それ故死者を葬る時の感情も、單に居所が永久に隔てられる事を悲しんでゐたやうである。これが挽歌を通じての一般の思想であつた事は、なほ下に講ずる歌によつて明かになるであらう。

大后御歌一首

一五三　いさなとり　淡海の海を　沖放けて　榜ぎ來る船　邊附きて　榜ぎ來る船　沖つ櫂　甚くな撥ねそ　邊つ櫂　甚くな撥ねそ　若草の　夫の　思ふ鳥立つ

鯨魚取　淡海乃海乎　奥放而　榜來船　邊附而　榜來船　奥津加伊痛　勿波禰曾　邊津加伊痛　莫波禰曾　若草乃　嬬之　念鳥立

【釋】○大后御歌　前の歌と同樣に、天智天皇の大喪中の倭姫皇后の御歌である。○いさなとり　「海」の枕詞。（既出）○沖放けて　沖の方へ遠ざかつての意。「放く」は集中には四段活用の用例と、下二段活用の用例とがある。然し四段活用の「放く」は「見も左可ず來ぬ」（四五〇の如く他動詞に限られて居り、下二段活用の「放く」も「家にして結ひてし紐を解き佐氣す」（三九五〇）「紐解き佐久流月近づきぬ」（四四六四）の如く他動詞であつて、これを後世の「避く」の如く自動詞に用ゐた確證は見當らない。自動詞としては「大和をも遠く左可里て」（三六八八）の如くラ行四段活用の「離る」が用ゐられて居り、又「天離る」「遠離る」「鄙離る」などの用例もあるから、ここは「沖放而」と訓むべきもののやうである。○邊附きて　流布本の訓にヘニツキテとあるが、略解にヘツキテと訓んだのがよい。濱邊傳ひにの意。○沖つ櫂　前の「沖放けて云々」を承けた句であつて、沖を漕ぐ船の櫂をいふ。櫂は和名抄に『釋名』を引いて「在レ旁撥レ水曰レ櫂」とあるやうに、水を搔いて船を進めるオールの如き船具である。「かい」といふ語は「かき」（搔）の音便である。因みに上古に櫂に似た船具に楫といふのがあつて、和名抄に「釋名云、檝使也舟捷疾也」とある。櫂は集中に「艫に舳に眞可伊繁貫き漕ぎ出にし」（一三八六）の如く歌はれてゐる。上代に用ゐられた櫂と楫の音すなり」（三六二四）「大船に眞梶繁貫き漕ぎ出にし」（一三八六）の如く歌はれてゐる。上代に用ゐられた櫂と楫が同一物であるか否か明瞭でないが、「海人船に麻可治加伊貫き」（三九九三）と兩者を並べ擧げた例があり、又楫には共の音を多く歌つて居り、櫂には撥ねる事を歌つてゐる所から考へて、兩者は別の物と思はれる。「櫂」も「楫」も中古文には用ゐられなくなつて、專ら「艣」といふ語が用ゐられてゐる。○甚くな撥ねそ　「いたく」は形容詞「いたし」の連用形で甚だしくの意。強く水を撥ねないでくれといふ意。「沖放けて」以下の八句は、二句對句を二つ連結した四句連對句である。○若草の　「つま」（夫妻）の枕詞。燭明抄や冠辭考の說の通り、春萌え出る若草は人に愛でいつくしまれるものであるから、若草の如く愛づる夫と言ひ懸けたのである。檜嬬手には日本書紀に「弱草吾夫何怜矣」の註に「古者以二弱草一喩二夫婦一。故以二弱草一爲レ夫。」とあるのを引いて、若草が双葉相對して生するのを、夫婦に譬へて言ひ續けたのであると言つてゐるが是は妥當でない。○夫の　三音句である。此の歌は

五・三・七の句を以て結尾とする古形式の長歌である。「つま」は衣の「褄」と同系語で、二つ相對してゐるものを云ふ。從つて夫婦の孰れをも古くは「つま」と呼んだ。此處では天皇を指し奉つてゐる。○思ふ鳥立つ　此の鳥に就いて代匠記には、天皇が叡覽あつて愛でさせ給うた鳥であらうと述べてゐるが、考には〔一七二〕の日並皇子尊の殯宮の時、舍人の詠んだ歌に「島の宮上の池なる放ち鳥云々」とあるのと同じく、平素愛で飼はせ給うた鳥を崩御の後に放たれたのが、湖上になほ遊んでゐたのを御形見として見給うたのであると述べてゐる。考の說に從ふべきである。

【譯】近江の湖を沖へ遠く隔たつて漕いで行く船よ、其の櫂をそんなに強く撥ねるな。岸邊に沿うて漕いで來る船よ、其の櫂をそんなにひどく撥ねないでくれ。我が背の君が御在世中切に愛し給うてゐた鳥が、其の音に驚いて飛び立つから。

【評】大津の宮から間近に眺められる湖水に、水禽が群れてゐるのを眺めてお詠みになつたのであらう。天皇御遺愛の鳥を、せめてもの御名殘として眺め給ふ御胸中の、綿々として盡きざる悲しみが、對句や繰返された語句の上に、しみじみと歌はれてゐる。

從二山科御陵一退散之時、額田王作歌一首

一五五　やすみしし　わご大君の　かしこきや　御陵仕ふる　山科の　鏡の山に　夜は
八隅　知之　和期大王之　恐　也　御陵奉仕流　山科乃　鏡　山爾　夜者

も　夜のことごと　晝はも　日のことごと　音のみを　泣きつつありてや　百
毛　夜之　盡　晝者母　日之　盡　哭耳　呼　泣　乍　在　而哉　百

磯城の　大宮人は　行き別れなむ
磯城乃　大宮人者　去　別　南

【釋】○山科御陵　「御陵」は和名抄に「日本紀私記云、山陵（美佐佐岐）」とあるのに倣つてミササギと訓む。山科御陵は天智天皇の御陵である。其の位置に就いては〔一四八〕に述べた。延喜諸陵式に「山科陵、近江大津宮御宇天智天皇、在二山城國宇治郡一、兆域東西十四町、南北十四町、陵戸六烟」と見えてゐる。（「山科」は宇治郡の北半卽ち御陵附近一帶の地の古名である）○退散之時　童蒙抄にマカデアラクルトキ、考にアラケマカルトキ、古義にアガレルトキ、講義にマカルトキと訓んでゐる。側近に奉仕してゐた人々が、御陵に葬り奉つてから當分の間、晝夜交番に御陵の側に侍宿奉仕して後、其處を退散する時を云ふ。

○かしこきや　「恐也」を流布本にカシコミヤ、神田本にカシコクヤ、溫故堂本にカシコシヤ（考同訓）と訓んでゐるが、童蒙抄及び小琴にカシコキヤと訓み改めて後是が定訓となつてゐる。小琴の說の通り「や」は語調を整へ餘情を添へる助詞であつて、意は「かしこき御陵」と續いてゐる。類例に「可之故伎也天の朝廷を」（四四八〇）「可之古伎夜命被り」（四三二）などがある。長多いの意。○御陵仕ふる　「御陵」は「山陵」と同じくミササギと訓むべきであるが、音調が面白くないから、今は流布本の訓に從つてミハカと訓む。「仕ふる」は奉仕すること。古義に御陵を造り奉る意に解いてゐるのは妥當でない。○鏡の山に　此の名の山は近江にもあるが、ここは山科御陵の

背後の鏡山をいふ。『山城志』に「在二御陵村西北一、圓峰高秀小山環列、行人以爲レ望」と見えてゐる。○夜はも夜のことごと　「はも」の「も」は感動助詞。次に原文の「盡」を流布本にツキ、童蒙抄にアクルマデ、考にアクルキハミと訓んであるが、「妹は忘れじ世の許登碁登邇」（古事記）「國中許等其等見せましものを」（七九七）などの假名書の例に據つてコトゴトと訓むべきである。「ことごと」は事事の義で、ある限り即ち悉くの意の副詞である。「夜のことごと」は一夜中の意。以上の二句は次の「晝はも日のことごと」と對句になつてゐる。○音のみを　「のみ」は或事物を指してそれだけに限る意を表す助詞である。從つて「音のみを泣く」と言へば「音を泣く」の意を強めて、ひたすら其の動作を續ける意味になる。「音を泣く」は「音に泣く」と同じで、聲を上げて泣くこと。同樣の意味を表すのに「朝夕に禰能未之奈氣ば」（四四七九）「せむすべ知らに哭耳之曾泣」（五一五）などと言つた例もある。○泣きつつありてや　此の「や」は疑問の助詞で、下の「行き別れなむ」に懸る。○百磯城の大宮人は　此の二句は既に講じた。○行き別れなむ　「行き別る」は「別れ行く」といふのと同じ。「なむ」は未來完了の助動詞で、何々してしまふであらうの意を表す。考に述べてゐる通り、葬り奉つて一年間近臣や舍人は御陵に侍宿して、その期が滿ちると一同退散したのである。

【譯】我が大君の畏多い御陵にお仕へ申してゐる此の山科の鏡山で、晝夜の分ちなく終日終夜、唯聲を上げて泣くばかりして悲歎の涙に暮れてゐる中に、早くも退散の時期となつて、大宮仕への人々一同は、各お別れ申して立ち去つてしまふ事であらうか。今更ながら名殘惜しく悲しい事である。

【評】作者額田王は、天智天皇の御寵愛を一身に鍾めた方である。空しき御陵に奉仕する悲しい日數が夢のやうに過ぎて、愈一同退散の時期となつて、又一段と新たな悲哀の情が起つたのである。徒然草に「人の亡き跡ばかり悲しきは無し。中陰の程山里などに移ろひて、便り惡しく狹き所にあまたあひゐて、後のわざども營みあへる心あわただし。日數の早く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。果の日はいと情無う、互にいふ事もなく、我賢げに物引きしたため、散り散りに行きあかれぬ。」と兼好が書いた心持は、古今を通じて變らぬ人情である。

明日香清御原宮御宇天皇代　天渟中原瀛眞人天皇

天皇崩之時太后御作歌一首

一五九　やすみしし　我が大君の　夕されば　見し給ふらし　明け來れば　問ひ給ふら
八隅知之　我大王之　暮去者　召賜良之　明來者　問賜良
し　神岳の　山の黃葉を　今日もかも　問ひ給はまし　明日もかも　見し給は
志　神岳乃　山之黃葉乎　今日毛鴨　問給麻思　明日毛鴨　召賜
まし　其の山を　振り放け見つつ　夕されば　あやに悲しみ　明け來れば　う
萬旨　其山乎　振放見乍　暮去者　綾哀　明來者　裏
らさび暮らし　荒妙の　衣の袖は　乾る時もなし
佐備晩　荒妙乃　衣之袖者　乾時文無

【釋】○明日香清御原宮云々　天武天皇の御代である。（既出）○天皇崩之時　日本書紀の朱鳥元年の條に「九月戊

戊丙午、天皇病遂不レ差（イエタマヘ）崩二于正宮一、戊申始發哭、則起二殯宮於南庭一云々」と記されてゐる。○太后御作歌　天武天皇の皇后で、後に即位し給うて持統天皇と申す。○夕されば　「夕されば」は前に出た「夕さり來れば」と同じく、夕になるとの意。○見し給ふらし　此の句を流布本にメシタマヘラシと訓んだのは誤であつて、神田本・細井本の訓、又童蒙抄及び小琴にメシタマフラシと訓んだのが正しい。「見し」は「見る」に敬語の助動詞の「す」の連用形を添へた形。此處の「らし」に就いて小琴に、卷二十の「大君の繼ぎて賣須良之（メスラシ）高聞（たかきと）の野邊見るごとに音のみし泣かゆ」（四五一〇）の「見すらし」と共に、常の「らし」の用法とは異なつて過去の事に用ゐてあると述べ、古義にも此の場合は「見し給へりし」の意であると解き、攷證・美夫君志等は小琴の說に從つてゐる。然し「らし」は或根據に立つて、現在の事柄を推量する意味の助動詞であつて、是を過去を推量する「けむ」の意味に用ゐた例は無い。因つて講義に解いてあるやうに、天皇が御在世であつたならば眺め給ふであらう、といふ意味に見るべきである。なほ此の「らし」は、下の一句を隔てた「問ひ給ふらし」の「らし」と同格で、「黃葉」へ續くのであつて、ここの「らし」は連體形である。○明け來れば　以下二句は前の「夕されば云々」と對句である。夜が明けて朝になるとの意で、「來れば」の意味は輕い。○問ひ給ふらし　流布本の訓にトヒタマヘラシとあるが、神田本・細井本の訓にトヒタマフラシとあるのがよい。前の「見し給ふらし」と同じ形である。「問ふ」は御下問になる意ではなくして、實際に紅葉を訪ね給ふのをいふ。○神岳の　「神岳」を流布本にミワヤマと訓んであるが、神田本及び代匠記初稿本にカミヲカと訓んでゐるのが正しい。卷三の「登二神岳一山部宿禰赤人作歌」と題する長歌（三一四）の冒頭に、「三諸（みもろ）の神名備山に」と見え、卷十三の（三二二七）に「甘南備（かんなび）の三諸の山は」と歌はれてゐる山で、一に「三諸の神名備山」とも「甘南備の三諸の山」とも呼ばれた。（又單に「神名火山」とも云はれた。）飛鳥淨御原宮址から程近い飛鳥村大字雷に在る雷丘（いかづちのをか）と呼ぶ小高い岡である。（一四三頁地圖參看）雄略天皇紀に天皇が小子部蜾蠃（すがる）をして三諸岳の神を捉へしめ給うた時、蜾蠃が雷神を捕へて來たので、岳の名を「雷丘（かんなをか）」と改め給うたといふ傳說が見えてゐる。さて雷丘は今は櫟が繁つてゐるが、古は「神岳の山の黃葉は今日か散るらむ」（一六七六）「黃葉の散り亂りたる神名火（かんなび）の此の山邊から」（三三〇三）などと歌はれてゐるやうに、黃葉を以て知られた所である。○今日もかも　「かも」の「か」は疑問の助詞、「も」は感動の助詞。○問ひ給はまし　「問ふ」は前のと同じく訪ふ意。「まし」は或想定のもとに推量する時に用ゐる助動詞であるから、ここは若し大君が御在世であつたならば、今日にも訪ね給ふであらうかといふ意である。檜嬬手に「今年は御魂となりて今日か問はすらん」と解釋してゐるのは穩かでない。○振り放け見つつ　前に「振り放け見れば」といふ例があつた。神岳を遠くから眺め遣りながらの意。○あやに悲しみ　流布本の訓にアヤニカナシビとあるが、今は考の訓に從つた。「あやに」の「あや」は、「あやにく」（生憎）「あやし」（怪）等の語根の「あや」と同じで、元來「ああ」「あな」「あはれ」等と同じく感動詞である。「あや」に「に」が附いて副詞になるのは、「あな」に「に」を添へて「あなに」と云ふのと同じ類である。意味は「懸けまくは阿夜（アヤ）爾（ニ）畏し」（八一三）の場合のやうに、譬へやうもなく不思議にの義から轉じて、「阿夜（アヤ）爾（ニ）な戀ひ聞こし」

香具山南方より雷丘（右）飛鳥京址（左）遠望

（古事記）の場合のやうに、むやみにといふ意味に用ゐられる。次の「悲しみ」は動詞である。○うらさび暮らし「うらさぶ」に就いては〔三三〕及び〔八二〕參照。心淋しく樂しますして暮らすのをいふ。○荒妙の　此の句が「藤」の枕詞に用ゐられた例は前に出たが、ここでは次の句の「衣」の修飾語である。「荒妙の衣」は織地の荒い布で作つた衣卽ち喪服である。和名抄に「綾衣」に註して「唐韻云、綾不知古路毛　喪衣也」とある。中世では喪服を「藤衣」と呼んでゐるが、それは必ずしも藤葛の纖維で織つた布で作つたのではない。○乾る時もなし　原文の「乾時」を流布本にヒルトキ、神田本にカハクトキと訓んでゐる。從來諸註は流布本の訓に從つてヒルトキと訓んで、「乾」をハ行上一段活用の動詞と信じてゐたのである。然るに最近橋本進吉博士の研究によつて、從來ハ行上一段活用動詞と認められてゐたものは、上代に於ては上二段に活用した事が明かになつた。同氏の所說の概要は下の如くである。――「乾」及び「噓」の活用形を假名書にした例は、未然形に「未だ飛なくに」（七九八）、連用形に「潮非なば」（三七一〇）「鼻火紐解け」（二八〇八）の如きがあつて、未然形と連用形とがヒであるから、其の活用は上一段とも上二段とも決し難い。然るに上代の特殊假名遣の上から見ると、カ行及びマ行上一段活用動詞の、活用語尾のキ・ミが共に甲類の假名に屬してゐるにも拘らず、「乾」のヒ（飛・悲・非・備・火）が皆乙類のヒに屬するのは矛盾の現象である。連用形にヒの乙類の假名を用ゐる活用は、「戀ふ」の如き上二段のもの以外には無いから、「乾」は上二段に活用したのではないかと思はれる。次に日本書紀に「市乾鹿文（イチフガヤ）」に註して「乾、此云レ賦（フ）」とあるのは、「乾」の終止形をフと言つたものらしく、又萬葉の「我が背子に吾が戀ひ居れば吾が宿の草さへ思ひ浦乾來」（二四六五）の「浦乾來」を、從來ウラガレニケリと訓んでゐるが、種々の事情を綜合して見ると、此はウラブレニケリと訓むのが最も穩かである。さすれば「乾」の終止形にフ、已然形にフレといふ形があつた事になる。なほ動詞に接尾辭「す」を附けて他動詞を作る場合に、上一段ならばイ段の音に「す」を添へて「著す（キす）」「見す（みす）」とするのであつて、上二段ならば「乾す（ほす）」のやうにオ段の音に附くのが普通である。斯樣な種々の理由から考へて、「乾」は上代に於ては「ひ」「ひ」「ふ」「ふる」「ふれ」と上二段に活用したものと見るのが穩當である。それが平安朝時代に入ると明かに上一段活用に變化し、上二段活用は滅びたのであつて、上二段活用の動詞が後に上一段活用に變化した例證は他にもある。――以上が其の要領である。（『國語・國文』創刊號所載「上代に於ける波行上一段活用に就いて」參照）今は橋本博士の所說に從つて「乾時」をフルトキと訓み改める。

【譯】我が大君が朝に夕に御覽遊ばされ、お訪ねになるであらうと思はれる神岳の、折しも色附いてゐる黃葉を、若し大君が此の世に坐しましたならば、今日もまたお訪ねになりお眺めになるであらうに。然し大君は神去り給うたので、其の思出の多い黃葉した山を、私は唯獨り遙かに望み見ながら、夕方になるとひどく悲しく思ひ、又夜が明けると終日心淋しく暮らして、此の喪服の袖は涙に濡れて乾く間もないことである。

【評】此の御歌は、前に講じた天智天皇の崩御を哀悼して、皇后が詠み給うた「いさなとり淡海の海を」といふ御歌と好一對をなすものである。前者は天皇の愛で給うた湖上の水禽に寄せての御作であり、是は神岳の黃葉に寄せての御歌である。其の內容表現に於て類似する所があるのみならず、形式に於ても對句が豐富に用ゐられ、又同一詞句が頻りに繰返されてゐる點が共通してゐて、共に綿々たる情緖が巧みに表現せられてゐる。

一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌一首（○原二首の中）

○一六〇　燃ゆる火も　取りて包みて　袋には　入ると言はずやも　知ると言はなくも
燃火物取而裹而福路庭入澄不言八面知曰男雲

【釋】○太上天皇　天武天皇の御代には、太上天皇は在しましたのではない。代匠記に此處の「太上天皇」は持統天皇を申すのであるから、「太后」の誤記であらうと云つてゐる。思ふに是は、文武天皇の御代に一書に載錄した歌を、題詞共にその儘卷二の原本編纂後に、後の人が加へたものと考へられる。○燃ゆる火も　流布本の訓にトモシヒモとあるが、管見・代匠記以下諸註にモユルヒモと訓んでゐるのが妥當である。「燃ゆる火云々」の事は評の條に述べる。○入ると言はずやも　原文に「入澄不言八面」とあつて、流布本の訓にイルトイハズヤモ（考・略解・新訓同訓）とあるが、管見及び代匠記は、原文の「面」を最後の句の頭に附けて、イルトイハズヤ（古義・美夫君志・新考同訓）と訓んでゐる。今は流布本の訓の儘に訓んで置く。入れると言ふではないかといふ意。最後の「も」は感動助詞。○知ると言はなくも　原文の「面智男雲」を流布本にモチヲノコクモと訓んでゐるが、意味が疏通しない。管見はオモシルナクモと訓み、代匠記は「智」を「知」と見て同樣に訓み、考は「面」を第四句の句末に附け、此の句の「智」を「知日」の二字の誤と見て、シルトイハナクモと訓み、又檜嬬手は「智」を「知日」の誤と見て、「面知日男雲」をアハムヒナクモと訓んでゐる。要するに此の句は、原文の儘では適切な訓義を見出し難いから、姑く考の說に從つて第五句をシルトイハナクモと訓んで解く。「知ると言はなくも」は「知らなくも」の意を強く表したのであつて、知らぬことよの意。〔九七〕參照。卽ち神去り給うた大君に逢ひ奉る術は知らない事であるの意。

【譯】役の行者は燃えてゐる火をも手に取つて、それを袋の中に入れると云ふではないか。こんな不思議な術もあるのに、神去り給うた天皇に逢ひ奉る方法は知らないといふのか。誠に悲しいことである。

【評】此の御歌の「燃ゆる火も取りて包みて云々」に就いて、考に「其御時在りし役ノ小角がともがらの、火を袋に包みなどする、恠しき術する事有りけん云々」と述べてゐる。續日本紀の文武天皇三年五月の條を見ると、「丁丑、役君小角流二于伊豆嶋一。初小角住二於葛木山一。以二咒術一稱、外從五位下韓國連廣足師レ焉。後害二其能一、讒以二妖惑一、故配二遠處一。世相傳云、小角能役二使鬼神一、汲レ水採レ薪、若不レ用レ命、卽以レ咒縛レ之。」とあり、又日本靈異記には「役優婆塞者（中略）大和國葛木上郡茅原村人也。自性生知、博學得レ一、仰二信三寶一、以レ之爲レ業。每夜挂二五色之雲一、飛二沖虛之外一。（中略）被レ葛餌レ松、沐二清水之泉一、濯二欲界之垢一、修二行孔雀之咒法一、證二得奇異之驗術一、駈二使鬼神一得レ之云々」と記されてゐるから、當時既に此の御歌に歌はれたやうな妖術が行はれたものと思はれる。極めて斬新な素材を取入れて、而も巧みに表現せられた御歌である。

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇

大津皇子薨之後、大來皇女從二伊勢齊宮一上レ京之時御作歌二首

一六三　神風の　伊勢の國にも　あらましを　何しか來けむ　君も在らなくに
神風之伊勢能國爾母有益乎奈何可來計武君毛不有爾

【釋】○藤原宮御宇天皇代　持統天皇の御代。（既出）○大津皇子　天武天皇の皇子で、天皇の崩後朱鳥元年十月二

日に不軌を企て給うた事が顯れて、翌日大和の譯語田（今の磯城郡纒向村大字太田の辻附近）の邸に於て死を賜うた。此の事は前に〔一〇五〕を講ずる際に述べた。○大來皇女　大津皇子の同母の御姉君である。大來皇女が天武天皇の御代に齋王であらせられた事も前に述べた。齋王を罷め給うて都に還られたのは、持統天皇の朱鳥元年十一月十六日であるから、大津皇子の薨ぜられてより四十餘日の後である。此の御歌は皇女が上京されて、弟君の薨去を悲しみ給うた御歌である。

○神風の　「伊勢」の枕詞。（既出）○あらましを　「まし」は既に述べた通り、非現實の假想を表す助動詞であるから、ここは京に還らずして伊勢の國に其の儘居たらよかつたものをの意味である。○何しか來けむ　此の句を流布本にナニニカキケム、金澤本にナニシカキケムと訓み、考以下諸註は金澤本と同樣に訓んでゐる。集中の用例に據れば、ナニシカキケムの方が穩かである。「何しか」の「し」は强意の助詞、「か」は疑問の助詞である。何故都に來たことであらうかの意。「何しか」の用例には「何然（ナニシカ）君が見るに飽かざらむ」（二五〇〇）「奈爾之（ナニシカ）可も霧に立つべく嘆きしまさむ」（三五八一）などがある。○君も在らなくに　君もあらぬことなるに、卽ち君も最早此の世には居られないのにの意。（「在らなくに」の「なくに」に就いては〔七七〕及び〔九七〕參照）

【譯】こんなことと知つて居たら、伊勢の國に居らうものを。我が懷しい弟君ももう此の世には居られないのに、何故遙々と上つて來たであらうか。

【評】此の御歌の格調は、初句から第三句までが連續し、第三句以下が一句づつ切れてゐる上に、第三・第五句の末は「を」「に」などの感動助詞であり、又第四句は「何しか來けむ」といふ疑問の句である爲に、第三句以下の一句一句が餘情を含んだ句となつてゐる。此の格調の上に、御姉君の失望落膽の御心情が如何にも切實に表現せられてゐて、さながら皇女の嗟嘆の溜息が聞えるやうに感ぜられる。勝れた作である。

一六四　見まく欲り　吾がする君も　在らなくに　何しか來けむ　馬疲るるに

欲見　吾爲　君毛　不有　奈何可來計武　馬疲爾

【釋】○見まく欲り　「欲見」を金澤本・類聚古集・古葉略類聚鈔等にミマホシミ、細井本にミマホシクと訓んである。希望を表す「まほし」といふ助動詞は、奈良朝及びそれ以前には未だ用例が無いから、ここは流布本並に諸註の訓に從つてミマクホリと訓むべきである。「見まく」は「見む」に用言を體言化する語尾の「く」が添つた形で、見むことの意である。「欲り」は「伊駒山越えてぞ吾が來る妹が目を保里」（三五八九）「我が保里し雨は降り來ぬ」（四一二四）「玉ならば我が袋屢（ホル）玉の鰒白珠」（日本紀）の如く、四段に活用する欲するといふ意味の古い動詞である。なほ「欲る」には、右のやうに動詞として單獨に用ゐる外に、其の連用形に動詞の「す」又は「思ふ」を添へて、「欲る」と同じ意を表す用法がある。是は「顧みる」を「顧みす」といふのと同類である。用例には「斯くだにも國の遠かば汝が目保里勢（ホリセ）む」（三三八三）「見まく保里念（ホリモ）ふ間に」（三九五七）などがある。（此の「欲りす」が音便によつて後世「ほす」となつたのである。）此の歌の場合は「欲りする」の間に主語の「吾が」を挿入したのであつて、意味は「吾が見まく欲りする君」と云ふのと同じである。○吾がする君も　流布本にワガセシキミモ（童蒙抄・攷證・美夫君志等同訓）、考にワガスルキミモと訓んでゐる。現在もなほ逢ひたいと欲してゐるのであるから、ワガスルと訓む方がよ

い。○馬疲るるに「馬疲爾」を流布本にウマツカラシニ（童蒙抄・考・攷證・檜嬬手・美夫君志・新考・講義同訓）、小琴にウマツカルルニ（略解・古義・新訓等同訓）と訓んでゐる。「馬疲らしに」と訓んでは、馬を疲れさせるのが目的のやうに聞えて穩かでない。小琴の訓に從つて、最後の「に」を「在らなくに」の「に」と同じ餘情を表す助詞と見るのが妥當である。さて此の馬は、齋王の御歸還の群行に用ゐたものであつて、從行の人々の乘馬である。齋王は御輿に召したのである。延喜齋宮式に「凡從行群官以下給馬。主神司中臣・忌部・宮主各二疋、頭四疋、助三疋、諸司主典以上各二疋、番上各一疋、其命婦四疋、乳母并女孺各三疋、輿長及殿守各一疋云々」とあるのを參考すべきである。

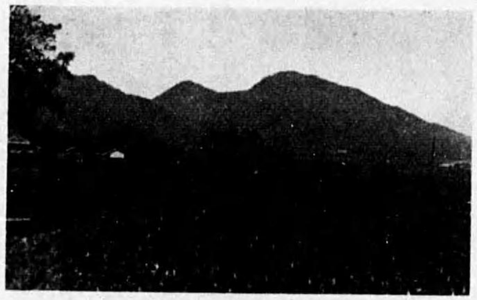
【譯】私が逢ひたい〳〵と思つてゐる弟君も、今は此の世には居られないのに、何で遙々都に上つて來たことであらうか。唯徒らに馬が疲れるばかりであるのに。

【評】前の御歌と同樣の意味を、略同一の格調で歌つてある。又第三・第四句には、前の御歌の詞句が其の儘用ゐられてゐる。前の御歌には專ら失望落膽の聲を洩されてゐるが、此の御歌には「馬疲るるに」といふ句によつて、群行に加はつた人馬の上をも思ひ遣つて居られるのであつて、周圍をいたはり給うた態度が窺はれる。

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時、大來皇女哀傷御作歌二首

一六五　現身の　人なる吾や　明日よりは　二上山を　妹背と吾が見む
宇都曾見乃　人爾有吾哉　從明日者　二上山乎　弟世登吾　將見

【釋】○移葬　ウツシハフルと訓む。「移葬」を代匠記・童蒙抄・古義等に所謂改葬の意に見てゐるのは誤である。攷證に、假寧令集解に「凡改喪、改移舊屍。古記曰、改葬謂殯埋舊屍柩改移之類」とあるのを引いて、「移葬」は此の意味の改葬であつて、今まで殯宮にあつた柩を墓所に移し葬る事であると解いたのが正しい。殯宮は御棺に斂めた尊骸を陵墓に葬るまで、臨時に安置する喪屋をいふ。○葛城二上山　カツラギノフタカミヤマと訓む。「葛城」は上古の葛城國、卽ち今の北葛城郡及び南葛城郡を併せた、大和國の西部一帶の地域の汎稱である。二上山は北葛城郡當麻村に在つて、河內國に跨る山である。大和河內紀伊の國境を成す葛城山脈の北端に當る。『大和志』に「在二葛下郡當麻村西北一半跨二河州一、兩峯相對、一曰二男嶽一、一曰二女嶽一。北有二小峯一、呼曰二銀峯一、南有二瀑布一、高丈餘、有二古歌一。」と記してゐる。大津皇子の御墓は山頂の二上神社の東に在る。（一二八頁地圖參照）


二上山

○現身の　原文に「宇都曾見乃」とあるのは「現し身」の轉訛であつて、此處では「人」の修飾語になつてゐる。（既出）○人なる吾や　「や」は疑問の助詞で、結句の「吾が見む」に懸つてゐる。○妹背と吾が見む　原文の「弟世」に就いては種々の訓がある。流布本にイモセ（攷證・美夫君志同訓）、代匠記初稿本書入にヲトセと訓み、古義に「弟世」を「吾世」の誤と見てワガセと訓み、檜嬬手にナセ（註疏同訓）と訓み、新訓にイロセ（新解・講義同訓）と訓んである。此等の中イモセ又はイロセと訓む說が穩かである。「いろせ」は同母の兄又は弟を云ふ語である。又

「妹背」の「妹」は、男から女を指していふ語であり、「背」は女から男を云ふ語であるから、「妹背」は夫婦或は兄妹をいふ。二上山は其の名が示す通り、峯が二つに分れてゐて男嶽女嶽と云はれてゐるのであつて、此所も兩峯對立してゐるのに寄せて歌はれたものと思はれるから、イモセと訓んで姉弟の意に解く方がよい。次に「吾將見」は流布本にワレミムと訓んであるが、考にワガミムと訓み改めたのがよい。

【譯】此の世に生き長らへてゐる身の私は、明日からは此の二上山を、自分の兄弟と思つて眺めなければならないのか。まことに悲しい事になつた。

【評】言問はぬ山ではあるが、いとしい弟君の永遠の住みかであり、又其の形も兄弟の如く二峯が對峙してゐるので、斯うした御歌を詠まれたのである。素朴な表現ではあるが、傷ましい御胸中がよく表れてゐる。

一六六　礒の上に　生ふる馬酔木を　手折らめど　見すべき君が　在りと言はなくに

礒之於爾　生　流馬酔木乎　手折　目杼　令視倍吉君之　在　常不　言　爾

右一首、今案不似移葬之歌。蓋疑從伊勢神宮還京之時、路上見花感傷哀咽作此歌乎。

【釋】○礒の上に　「礒」はイソと訓む。「いそ」は元來「いし」(石)の轉訛である事は、「石上」をイソノカミと訓み、又「阿倍の島鵜の住む石に寄する浪」(三五九)の如き用例があるのによつて明かである。「礒」は轉じて水際の岩石の多い處をいふ。次に原文の「於」は、續日本紀に「山上憶良」を「山於億良」と記し、地名の「城上」を「木於」「城於」などとも記し、本集にも「木末の於は未だ靜けし」(一二六三)の如き例があるから、「ウヘ」(上)と訓むべき事が知られる。此の句は岩のほとりにの義である。○生ふる馬酔木を　「馬酔木」は流布本の訓にツツジ、神田本京大本の一訓にアセミとある。此の外訓義に就いては諸説がある。(イ)考並に冠辭考にはアシミと訓んで木瓜であるとし、略解にはアシビと訓んで木瓜であると言つてゐる。(檜嬬手・攷證頭書同説)(ロ)古義にはアシビと訓んで、俗に云ふ「あせぼ」で、今も土佐國で「あせみ」「あせび」と呼んでゐる木であると云ひ、美夫君志の別記にはアセミと訓んで、漢名を「梭木」と云ひ、俗に「あせぼ」と云ふ木であると云つて居る。(尤も假名書で「安之婢」とあるのは「馬酔木」とは別種の木で、是は木瓜であるとしてゐる。)要するに「馬酔木」を木瓜と見る説と梭木と見る説とがある。「あしみ」或は「あしび」を木瓜とする説は、集中の「池水に影さへ見えて咲きにほふ安之婢の花を袖に扱入れな」(四五一二)「磯かげの見ゆる池水照るまでに咲ける安之婢の散らまく惜しも」(四五一三)などの歌の趣から、二三月頃に山野に赤く咲き匂ふ花と見て、木瓜と推定するのである。然し此の説は根據が薄弱であつて肯定し難い。思ふに集中の「馬酔木」は假名書で「あしび」と記したのと同一物で、アシビと訓んで今云ふ「あせぼ」(梭木)と見るのが正しいやうである。即ち上代では「あしび」と云つたのが、平安朝に入つて「あせみ」に轉じ、(古今六帖・新撰六帖・散木弁歌集等に「あせみ」と詠んである)更に「あせび」「あせみ」が轉じて「あせぼ」となつたのである。馬酔木は現に畿内地方の山野に廣く分布してゐる、高さ三四尺乃至五六尺の石南科に屬する常綠灌木である。小鋸齒を有する細い葉が、五六枚づつ一所に群がつて附き、其の中心から花梗を垂れ、三四月頃に總狀を成して、大さ三

馬酔木

分許りの壺狀の白い花が開く。葉は有毒であつて、牛馬等が誤つて喰ふ時は中毒して醉つたやうになるので、「馬醉木」とも「馬醉花」とも記すのである。今も奈良公園には到る處に繁茂してゐて、花季には夜などは雪が降つたやうな美觀を呈するのであるから、此の花が萬葉人に愛せられて、屢歌に詠まれてゐるのは當然の事と思はれる。奈良方言では「ばちこ」と呼んでゐる。○手折らめど　「め」は「む」の已然形。手折らうと思ふけれども の意。○在りと言はなくに　前の歌の「君も在らなくに」と同じ意味である。講義に此の句を「君が此世にましますといふ人は一人もなし」と解かれたのは道理のあることであるが、〔九七〕で述べた通り、斯樣な場合の「言ふ」の意味は輕いのであつて、「在らなくに」の意味を強く表出したに過ぎない。○右一首云々　此の左註は、此の歌を皇女が伊勢から上京せられる途上の御作であらうといふのであるが、代匠記にも述べてゐる通り、皇女が歸京せられたのは十一月であつて、馬醉木の咲く季節ではないから、これは註者の思違ひである。

【譯】君のほとりに生えてゐる馬醉木の花を、手折つて行きたいと思ふけれども、さて此の美しい花を持ち歸つたとて、お見せすべき弟君は此の世に居られるのでもないのに。（手折つても今は甲斐のない事である。）

【評】白く咲き亂れてゐる馬醉木の一枝を家苞に持ち歸つて、弟君と共に眺めたいけれどもと歌はれた所に、女性らしい又姉君らしい濃かな愛情が溢れてゐる。然し其の弟君も今は亡き人であるといふので、清楚な馬醉木の花のやうに項垂れて、弟君を偲ばれた皇女のお姿が偲ばれて、あはれの盡きぬ歌である。右の四首を先に相聞の部にあつた〔一〇五・一〇六〕と併せ讀む時は、さながら一篇の哀史を繙く心地がする。

一六七　日並皇子尊殯宮之時、柿本人麻呂作歌一首幷短歌

天地の　初の時の　ひさかたの　天の河原に　八百萬　千萬神の　神集ひ　集
天地之　初時之　久堅之　天河原爾　八百萬　千萬神之　神集　集

ひいまして　神はかり　はかりし時に　天照らす　日女之命　天をば　知らし
座而　神分　分之時爾　天照　日女之命　天乎波　所知

めすと　葦原の　瑞穗の國を　天地の　依り合ひの極み　知らしめす　神の命
食登　葦原乃　水穗之國乎　天地之　依相之極　所知行　神之命

と　天雲の　八重かき別きて　神下し　いませまつりし　高照らす　日の皇子
等　天雲之　八重掻別而　神下　座奉之　高照　日之皇子

は　飛鳥の　淨の宮に　神ながら　太敷きまして　天皇の　敷きます國と　天
波　飛鳥之　淨之宮爾　神隨　太布座而　天皇之　敷座　國等　天

の原　石門を開き　神上り　上りいましぬ　吾が大君　皇子の命の　天の下
原　石門乎開　神上　上座奴　吾王　皇子之命乃　天　下

知らしめしせば　春花の　貴からむと　望月の　たたはしけむと　天の下　四
所知食　世者　春花之　貴在　等　望月乃　滿　波之計武跡　天　下　四

方の人の　大船の　思ひ憑みて　天つ水　仰ぎて待つに　いかさまに　思ほし
方之人乃　大船之　思憑而　天水　仰而待　爾　何方　爾　御念

めせか　つれもなき　眞弓の岡に　宮柱　太敷きいまし　御あらかを　高知り
食可　由縁母無　眞弓乃崗爾　宮柱　太布座　御在香乎　高知

まして　朝毎に　御言問はさず　日月の　まねくなりぬる　そこ故に　皇子の
座而　明言爾　御言不　御問　日月之　數多成　塗　其故　皇子之

宮人　行方知らずも
宮人　行方不　知毛

【釋】○日並皇子尊　ヒナミシノミコノミコトと訓む。〔四九〕參照。天武天皇の第一皇子、草壁皇子の尊稱である。御母は持統天皇であつて、日並皇子は文武天皇の御父君に當らせられる。（一一六頁の御系譜參看）日本書紀に據れば、天智天皇の元年に大津宮に生れ給ひ、壬申の役に御年十歲で天武天皇の御軍に從つて東國に赴かせられ、天武天皇の十年二月に皇太子となり給ひ、持統天皇の朱鳥三年四月十三日に薨ぜられた。時に御年二十八であつた。御陵は高市郡坂合村大字眞弓にある。天平寶字二年に「岡宮御宇天皇」と追稱せられ給うた。○殯宮之時　アラキノミヤノトキと訓む。「殯宮之時」は崩御又は薨去の後、本葬を營むまで假に喪屋に斂めて置いて、朝夕饌膳を供し又近臣の仕侍する期間をいふ。上代に於ける天皇・皇后・皇子の殯宮は、葬儀の準備や山陵の經營等の爲に一年を期としたのであるが、漸次薄葬の風が行はれるに至り、殯宮の期間も短くなつて、數十日若しくは數日となつた。孝德天皇紀の大化二年の條に「凡王以下乃至二庶民一不レ得レ營レ殯」といふ制が出てゐるが、其の後も皇子にはなほ殯宮が營まれたのである。而して元明天皇の頃からは、天皇の殯宮までも廢せられるやうになつた。「あらき」は「新城」の義で、其の「城」は「奥津城」の「城」と同じであらう。

○天地の初の時の　原文の「初時之」を流布本にハジメノトキシと訓み、童蒙抄・考にハジメノトキノと訓み、小琴に流布本の訓を可として以後、諸註是に從つてゐる。なほ「之」は金澤本・類聚古集等には無いから、是に從へばハジメノトキと訓むべきである。講義の說の通り、此の二句は以下の「ひさかたの……神はかりはかりし時」と同格を以て、其の下へ續く句であるから、ハジメノトキノと訓んで、「の」を同格の體言を重ねる助詞と見るのがよい。さて「天地の初の時」は、古事記の冒頭に「天地初發之時」とあるのと同義で、天地が混沌として未だ分れない時の事であるが、ここは漠然と神代或は太古の意に用ゐてある。○ひさかたの　「天」の枕詞。（既出）○天の河原に　此の句以下五句は、古事記に「是以八百萬神、於二天安之河原一神集集而（訓集云二都度比一）云々」とある文に相當するのであつて、此所の「天の河原」は天の安の河原のことである。○八百萬千萬神の　無數の神々がの意。「八百萬」「千萬」は數の極めて多い意を重ねたのである。○神集ひ集ひいまして　「神集集座而」を流布本にカミアツメアツメイマシテ、代匠記精撰本にカムツドヘニツドヘイマシテ、考にカンツマリツマリイマシテと訓んでゐるが、前に揭げた古事記の訓註に、「集」をツドヒと自動詞に訓ませてあるから、ここも代匠記初稿本や童蒙抄の訓に從つて、カムツドヒツドヒイマシテと訓むのが妥當である。「神集ひ」の「神」は、下の「神はかり」「神下し」などの「神」と同じ用法で、神の仕業に冠する接頭語である。「集ひ」を二つ重ねたのは、下の「神はかりはかりし時」「神上り上りいま

しぬ」又（一九九）の「神葬り葬りいまして」などと同一語形であつて、音調を整へ且その動作が專ら行はれる意を表したのである。ここは集ひに集ひ給うての意。○神はかりはかりし時に　「神分分之時爾」は流布本にカムハカリハカリシトキニと訓んだのがよい。「分」を神田本・温故堂本にワカレ、童蒙抄にクバリ、古義にアガチ、新考にクマリと訓んでゐるのは何れも穩當でない。此の「八百萬千萬神の」以下の數句は、祝詞式の六月晦大祓に「高天原ニ神留坐、皇親神漏岐神漏美乃命以氐、八百萬神等乎神集集賜比、神議議賜氐云々」とあるのに倣つたのであらうから、其の訓を參酌すべきである。而して原文の「分」は字鏡集にハカルの訓があるから、ここは流布本の訓に從つてカムハカリハカリシトキニと訓むべきである。神の會議を催し給うた時にの意。○天照らす　「日」の枕詞。（既出）○日女之命　神代紀に「生二日神一號二大日孁貴一」とあつて、其の註に「大日孁貴、此云二於保比屢咩能武智一（中略）一書云天照大神、一書云天照大日孁尊」とある。「日女之命」は卽ち天照大御神である。○天をば知らしめすと　「所知食登」を流布本にシロシメサムト、考にシロシメシヌト、小琴以下の諸註にシロシメストと訓んでゐるが、シラシメストと訓むのがよい。高天原を知ろし召されるとての意。ここは古事記の三貴子分治の段に、伊邪那岐命が御頸珠を天照大御神に授け賜うて、「汝命者所レ知二高天原一矣」と事依さし給うたとあるのに相當する。高天原は天照大御神が知ろし召される事になつたので、此の國土をお治めになる神としては、といふ意味を以て以下の句を起してゐる。○葦原の瑞穗の國を　古事記に「豐葦原之千秋長五百秋之水穗國」とあるのと同じ意味を簡略に云つたのである。太古に於ては我が國土の周圍の海邊には葦が繁茂してゐたので、「葦原」と言つたのである。因みに「葦原中國」は其の葦原に圍まれた國土の義であつて、宣長が『國號考』に述べてゐる通り、此の國土を上空から見下した光景を想像して、「高天原」に對して名附けた名稱である。「瑞穗の國」は瑞々しい稻穗の豐穰する國の意で、農業國としての我が國を讃へた名である。要するに此の二句は「高天原」に對して此の國土をいふ。○天地の依り合ひの極み　此の二句の意味に就いては兩說がある。代匠記初稿本には、地の涯は天と一つに寄り合つてゐるから、天地の果までの意であると解き、新考にも同樣に解いてある。又考には天地開闢に對して、再び天地が寄り合ふまでの義で永久にの意であると解き、略解・攷證・檜嬬手・古義・美夫君志講義等は考の說に從つてゐる。集中の用例を見ると、「天地乃依會限萬代に榮え行かむと」（一〇四七）「天地之依相極玉の緒の絕えじと思ふ」（二七八七）の二例があつて、此等は明かに未來永遠にの意に用ゐてある。思ふに「天地の依り合ひの極み」の原義は、代匠記の說の通り、遙か地平線の彼方の天と地とが相接してゐる所までの意であらうと思ふ。而して此の二句が時間的に未來永劫の意に用ゐられたのは、中島光風氏の所說（『奈良文化』第二十一號所載）の通り、元來は空間的無限を意味したのが、後に時間的無限の意に轉用せられたのであつて、それは「遠し」「長し」が空間的觀念から、時間的觀念を示すのに轉用せられたのと同類である。さて此の歌の場合は、祝詞式に「天の壁立つ極み、國の退立つ限り、靑雲の靄く極み、白雲の墜坐向伏す限り」（祈年祭）とあるのと同樣の意味であつて、天と地とが相接してゐる地平線の果までの意である。○神の命と　「命」は尊稱。（既出）「と」はとしての意。此所の「神」は、瑞穗の國を知ろしめす神として降臨された、皇孫彥火瓊瓊杵尊を申す。○天雲の八重かき別きて　「搔別而」を流布本及び諸註にカキワケテと訓んでゐる。「別く」は後世下二段に活用するが、奈良朝以前には「春の柳と吾が宿の梅の花とを如何にか和可む」（八二六）「冬夏と和久こともなく」（四〇〇三）などに見る如く、四段に活用

したから、ここは新考の訓のカキワキテが妥當である。なほ此の部分は古事記に、「故爾に天津日子番能邇邇藝命天之石位を離れ、天の八重たな雲を押し分きて伊都能知和岐知和岐弖（自伊以下十字以音）云々」とあるのに相當するのであつて、ここに「知和岐弓」（道別きて）とあるのをも參考すべきである。天に雲の幾重にも重なつてたなびいてゐるのを掻き分けての意。○神下し　「神下」を流布本にカミクダリ、考にカンクダリ、檜嬬手にカムクダシと訓んでゐる。天つ神が天孫を降し給ふのであるから、他動詞にしてカムクダシと訓むのが正しい。○いませまつりし　流布本にイマシツカヘシ、考にイマシマツラシと訓んでゐるが、小琴にイマセマツリシと訓んだのが妥當である。「います」は上代では自動詞の場合には四段に活用し、他動詞の時には「他國に君を伊麻勢て何時までか吾が戀ひ居らむ時の知らなく」（三七四九）の如く下二段に活用した。「まつる」は敬意を表す爲に助動詞的に用ゐてある。○高照らす　「日」の枕詞。（既出）○日の皇子は　「日の皇子」は天皇または皇子を申す語である。（既出）ここは上からの句の續きでは瓊瓊杵尊を申すやうであるが、下への句の續きでは現代の「日の皇子」を指し奉つてゐる。即ち此の場合は「いませまつりし」の下に、其の神の御裔としての、といふ意味の句が省略せられてゐる。さて此の「日の皇子」を代匠記・小琴・略解・攷證・美夫君志講義等には日並皇子を指し奉つたものと見、而して略解には、此の句は下の「天の原石門を開き」に續くのであると解いてゐる。又考古義・新考等には天武天皇を指し奉ると解いてある。今は後説に從つて解く。○飛鳥の淨の宮に　飛鳥淨御原宮即ち天武天皇の都せられた地である。（一二）參照。○神ながら太敷きまして　「神ながら」は（三八）に述べた通り、現つ神にましますままにの意。「太敷きまして」は（三六）の「宮柱太敷きませば」の條で説明した通り、「太」は稱詞で「敷く」は治め給ふ意である。現つ神として天下をお治め遊ばしての意。○天皇の敷きます國と　ここの「天皇」は代々の天皇を申す。最後の「と」は目標を示す助詞で何々へとの意。即ち代々の帝の御魂が治め給ふ國へとの意である。天皇は崩御の後天へ昇り給うて、天界を治め給ふものと信ぜられてゐたのである。なほ前の「日の皇子」を日並皇子とする説の方では、此の二句を此の國土は今の天皇（即ち持統天皇）の治め給ふ國としてと解き、以下日並皇子の薨去の事を述べたものと見てゐる。○天の原石戸を開き　原文の「開」を小琴には「閉」の誤字と見て、イハトヲタテテと訓み改めてゐるが、攷證に述べてゐる如く、門は出入の都度開閉するもの故原の儘でよいのである。「天の原」の下には助詞「の」を補つて見るべき所である。「石戸」は岩の扉である。此の「石」を「天之石靫」「天之石位」「天磐船」などの「石」と同じく、堅固の意を表す稱詞と見るのが攷證・美夫君志講義等の説であるが、ここは文字通り岩の戸と見るべきであらう。即ち此の「石戸」は、卷三の河内王を葬つた時の歌に、「豐國の鏡の山の石戸立て隱りにけらし待てど來まさぬ」（四一八）「石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく」（四一九）とある「石戸」の觀念に通ずるのであつて、上代に於ける高貴の方の陵墓の石槨を聯想したものである。○神上り　天皇又は皇子が神となつて天に上られる事、即ち崩じ給ふ事である。記紀には「崩」をカムアガリと訓ませてゐる。○上りいましぬ　「います」は敬意を添へる爲に助動詞的に用ゐてある。以上は天武天皇の崩御に就いて敍べたのであつて、下に日並皇子の薨去の事を敍べてゐる。○吾が大君皇子の命の　ここは日並皇子尊を申す。○知らしめしせば　皇位を繼がせ給うて、天下を治め給うたならばの意。此の「せ」を『奈良朝文法史』並に講義には「き」「し」「しか」と活用する過去を表す助動詞の古い未然形と見て居られる。助動詞「き」の活用形は、元來カ行に活用したものと、サ行に活用したものとが

混成したものと思はれるから、「せ」を未然形と見るのは道理ある事である。然し是と同じ「せ」の用例を見ると、「一松人にあり勢婆大刀はけましを」(古事記)「形見の衣なかり世婆何物もてか命繼がまし」(三七三二)「雨間も置かず降りに西者誰が里の間に宿か借らまし」(三二一四)の如く、何れも假設條件を示す助詞の「ば」を伴なつて現れ、終は非現實の推量を表す助動詞の「まし」で結んである。從つて此の「せ」には過去の意味は無いから、之を動詞の「す」の未然形と認める說もある。要するに此の「せ」は本來は動詞「す」の未然形で、事實に反した假定を表す場合に、特に助動詞的に用ゐられたものであらう。○春花の　「貴し」の枕詞。春咲き誇る花のやうに、愛でたく貴くといふ意で懸けたのである。○貴からむと　原文の「貴在等」を流布本にカシコカラムト、神田本・京大本にタフトクアレト、代匠記の一訓にタノシカラントと訓み、又考には「貴」を「賞」に改めてメデタカラントと訓んでゐる。然し小琴にタフトカラムトと訓んで、「貴し」はめでたい意にも用ゐる語であると解いて以來、諸註の訓は是に一定したのである。なほ古事記傳には、「たふとし」の「た」は接頭語で、「ふとし」は「太占」「太祝詞」「太幣」などの「太」と同じで、「貴し」の原義はめでたく好き意であると解いてゐる。○望月の　「たたはし」の枕詞。「望月」は滿月の義で、陰曆十五夜の滿月をいふ。滿月は滿ち足りて闕くる所がないから、「たたはし」へ譬喩的に言ひ懸けたのである。(なほ此の枕詞を「足れる」「めづらし」などに懸けた例もある。)○たたはしけむと　「滿波之」を流布本にミチハシと訓んであるが、代匠記初稿本に「十五月之多田波思家武登」(三三二四)を例證としてタタハシと訓み改めた。「たたはし」は動詞の「湛ふ」から派生した形容詞で、滿ち足りてゐる樣をいふ。(併し又日本靈異記や類聚名義抄に、「偉」にクタハシクと註し、新撰字鏡に「傀」をタタハシと訓んであるから、偉大の意味にも用ゐるのである。)さて此處の「たたはしけ」は、「たたはし」といふ形容詞の未然形に當る古い活用形である。即ち此の一句は「たたはしからむと」と同義で、足り調うて滿足なことであらうとの意。而して此の句は三句を隔てて「思ひ憑みて」に續いてゐる。以上の四句は、春の花と秋の月とを以てした二句對句である。○大船の　「憑む」の枕詞。前に「渡」に懸けた例があつたが、此所では海上に在つては船の大きいのを唯一の頼みとする意を以て、「思ひ憑み」に續けたのである。同じ用例は集中に幾らもある。○思ひ憑みて　「思ひ」は「思ひ戀ひ」「思ひ嘆かひ」「思ひ誇り」「思ひわぶ」などの「思ひ」と同じく輕く添へた語で、主たる意味は下にある。○天つ水　「仰ぎて待つ」の枕詞。「天つ水」は天の水卽ち雨である。「雨」は「天水」の略である。卷十八所收の天平感寶元年閏五月の小旱の時の歌に、「綠兒の乳乞ふが如く安麻都美豆仰ぎてぞ待つ」(四一二二)とあるのは、實際に旱天を望んで降雨を待つ意であるが、此所は天を仰いで雨を乞ひ待つ如くといふ意で、譬喩的に用ゐた枕詞である。○仰ぎて待つに　日並皇子尊が天下を知ろしめす日を待望する意である。○いかさまに思ほしめせか　此の二句は(二一九)で講じた通り、どのやうに思し召したものかといふ意。○つれもなき　原文の「由緣」を流布本にユヱ、代匠記考にヨシと訓んでゐるが、是は「都禮毛奈吉佐保の山邊に」(四六〇)「津禮毛無城上の宮に」(三三二六)などの假名書の例に倣つて、ツレと訓む小琴の訓が正しい。「つれ」は連で伴なひ行くことを云ふが、轉じて關係緣故の事を云ひ、また「つれなし」となつて無情の意味にもなる。ここは「由緣」の字面通り緣故・ゆかりの意である。○眞弓の岡に　高市郡坂合村大字眞弓(橿原神宮の南二十四五町の地)にある丘陵である(一四三頁地圖參看)。眞弓岡陵は今の坂合村大字越智の西北に在ると云ひ、又越智岡村大字森に在るとも言はれてゐて明確でない。○太敷きいまし　此の句を流布本にフトシキマ

シテ（童蒙抄・講義同訓）と訓んであるが、今は考以下諸註の訓に從つてフトシキイマシと訓む。「宮柱太敷きいまし」は〔三六〕に說いた。○御あらか　〔五〇〕に解いた通り、通常宮殿の意に用ゐるが、ここでは薨後の御殿卽ち殯宮を指す。○高知りまして　既出〔三八〕參照。以上の四句は二句對句である。宏壯なる宮殿を營み給うた事を述べたのである。○朝毎に　講義に述べてある通り、延喜陰陽寮式の「擊ㇾ開二門諸門一鼓ㇾ」の條を見ると、百官の伺候は大體卯の刻（午前六時頃）で、退朝は巳の刻（午前十時頃）であつた事が知られ、其の他諸書に同樣の記事が見えてゐるから、上古に在つては午前中に政務を聽かせ給うたのである。從つて此處に「朝毎に」とあるのも其の意味である。○御言問はさず　「言問ふ」は物を言ふ意。用例に「許等等波奴樹にはありとも」（八一一）「今日行きて妹に許等杼比明日歸り來む」（三五一〇）等がある。「問はさず」の「さ」は敬語の助動詞「す」の未然形。「ず」は否定の助動詞の連用形。物を仰せられる事なくしての意。○日月の　「日月」を流布本にヒツキ（攷證・新訓・全釋等同訓）、考にツキヒ（略解・檜嬬手・古義・美夫君志・新考等同訓）と訓んでゐる。而して古義には「日月」と記したのは支那の熟字を用ゐたのであつて、月次日次を云ふ場合には「月日讀みつつ妹待つらむぞ」（三九八二）の如く「月日」と記した例が多く、又天象の日月の場合は「此の照らす日月の下は」（八〇〇）の如く「日月」と記した例が多いから、「月日」は時間に云ひ「日月」は天象に云ふのであらうと述べて、ここは文字に拘ら

眞弓佐田丘の遠望

ずツキヒと訓むのがよいと言つて居る。然し石井庄司氏は集中の「日月」及び「月日」の用例から歸納して、前者は人麻呂・憶良・赤人等の歌に用ゐられて居り、後者は主として天平以後の歌に用ゐられてゐる所から見て、古く「ひつき」と言つたのが、後世「つきひ」と變化したのであらうと述べて、此の場合及び卷二の「日月毛不知戀渡鴨」（二〇〇）の場合は、文字通りヒツキと訓むべきであらうと言はれて居る。（『奈良文化』第十九號所載論文參照）要するに「日月」をツキヒと訓むべき確かな理由は見當らないから、「日月」はやはりヒツキと訓むべきである。○まねくなりぬる　「數多成塗」を流布本にアマタニナリヌ（童蒙抄・考同訓）、小琴にマネクナリヌル（略解・攷證・美夫君志・講義等同訓）、檜嬬手にマネクナリヌレ（古義・新考・新訓・全釋等同訓）と訓んでゐる。思ふに「なりぬれ」と訓む說は、之をなりぬればの意に解くのであるが、上に「いかさまに思ほしめせか」と疑問の係助詞「か」があつて、此處は其の結であるから、「なりぬる」と連體形を以て切る方が穩かである。さて「まねく」は〔八二〇〕の「心さまねし」の條に一言した、「まねし」といふ形容詞の連用形である。「まねし」は多し・繁しの意。「獵らぬ日麻禰久月ぞ經にける」（四〇一二）「逢はぬ日麻禰美思ひぞ吾がする」（四一九八）の如く、日月の多く經過する意に用ゐた場合が多い。○そこ故に　「其故」を流布本にソノユエニと訓んでゐるが、考にソコユエニと訓んだのがよい。「そこ」は〔一六〕の「そこし恨めし」のそれと同じで、その點或はその事の意である。「そこ故に」はそれ故にの意。○皇子の宮人　皇子の宮にお仕へしてゐる人々、卽ち春宮傅以下舍人に至るまでの者を總稱したのである。○行方知らずも　奉仕してゐた主君を失つて、行き方知れず途方に暮れてゐるといふ意。ここを略解には、御墓仕への期間を經て、退散する時の事と見て解釋してゐる（攷證・美夫君志同說）のは妥當でない。此の歌は題詞によつて明かであるやう

に、殯宮に奉仕してゐる頃の作である。

【譯】天地開闢の昔、天の安の河原に八百萬千萬の神々がお集ひになつて、神の會議を催された時、天照大御神は高天の原を知ろし召す事になつたので、此の葦原の瑞穗の國をば、天地が相接してゐる地上の果までお治め遊ばすべき神として、天雲の幾重にも重なり合つてゐるのを掻き分けて、此の國土へお降し申された瓊瓊杵尊の、御裔であらせられる天武天皇は、飛鳥の淨御原の宮に於て、現つ神として君臨し給うたが、(遂にお崩れになつて)代々の天皇の坐します國へと、高天の原の岩戸を開いて、神となつて天にお上りになつた。さて我が大君なる日並皇子尊が、皇位を繼がせられて天下を御統治遊ばされるならば、春咲き匂ふ花のやうに、御世はめでたく榮えることであらう、又秋の滿月のやうに、缺ける事なく滿足な事であらうと、天下の總ての人民が頼みに思つて、恰も旱天を仰いで降雨を待つやうな思ひで、お待ち申し上げてゐたのに、如何やうに思し召したものか、緣もゆかりもない此の眞弓の岡に、立派な御殿をお營みになつて、其の内に鎭まり給ひ、宮人は朝毎に伺候しても、何も仰せ出される事も無く、悲しく寂しい月日が段々重なつて行つたので、其の爲に皇子の宮の舍人達は(お仕へ申すべき君を失つて)唯途方に暮れてゐることである。

【評】此の長歌は大體三部から成つてゐる。第一部は初から「神下しいませまつりし」までの二十四句であつて、記紀や祝詞式に見える天孫降臨の神話を、簡略に而も敍事詩として詠じて、一首の冒頭としたのである。第二部は「高照らす日の皇子」以下「神上り上りいましぬ」までの十二句であつて、第一部の神話を承けて、現つ神なる天武天皇の御治世並に崩御の事を簡潔に敍べて、主題たる日並皇子尊に關する敍事を起す前提としてゐる。而して第三部は「吾が大君皇子の命の」以下終までの二十九句であつて、皇子の御治世を見ずして思ひがけない今の悲しみを見るに至つた事を敍べ、最後の三句に哀悼の意を強く表現して一首を結んでゐる。此の作の特色は種々の方面に認められるが、最も著しい點は、國民傳誦としての天孫降臨の神話を巧みに詠み込んでゐる事である。日本神話が記紀や延喜式祝詞に書かれて固定したのは、素より人麻呂以後の事であつて、それ以前は大體に於て口誦せられてゐたものと思はれる。從つて人麻呂の長歌の中に見る神話的敍述は、當時口々に傳誦せられてゐたものを取入れたのであらうが、斯かる方面に先鞭をつけたのは、人麻呂が特に傳統的民族思想を深く意識してゐた人であつた事を示すのである。

次に此の作の表現技巧或は修辭の方面を見て注意せられる事は、古事記や祝詞の韻律的要素と極めて類似性の多い事である。古事記の記載との類似性の存する事は、語釋の所に古事記の詞句を對照して置いたのによつて、略明かであらうと思ふが、なほ祝詞との類似點を示すならば、此の長歌に「神集ひ集ひいまして神はかりはかりし時に云々」とあるのは、祝詞の六月晦大祓の中の次の一節と極めて關係が深い。

高天原に神留り坐す、皇親神漏岐神漏美の命以ちて、八百萬の神等を神集へに集へ賜ひ、神議り議り賜ひて、我が皇御孫之命は、豐葦原の水穗の國を、安國と平らけく知ろし食せと事依さし奉りき。

其の他類似又は同一の語句は隨所に見える。是は人麻呂が口誦文學としての神話や祝詞の詞章の影響を受けたものとも考へられるが、古事記や祝詞が今日見るやうな形を整へるに至つたのは、人麻呂以後であるから、古事記や祝詞の表現技巧には、人麻呂の長歌に於ける獨得の修辭技巧から影響を受ける所があつたかも知れないのであ

る。なほ一言すべきは、此の一首には對句・枕詞等の外に、同語の頻出が著しい事である。卽ち一首を通じて「天」といふ語が句頭に十回、又「神」といふ語が六回用ゐられてゐて、莊重にして森嚴な內容を、更に效果的に表現してゐる事である。これなども恐らく意識的に試みた技巧であらう。要するに素材の上では天孫降臨の神話を取入れてゐる事、又表現技巧の上では古事記や祝詞と類似性が極めて多い事等が、此の歌に認められる特色として注意すべき點である。

反歌二首

一六八　ひさかたの　天見る如く　仰ぎ見し　皇子の御門の　荒れまく惜しも
久堅乃　天見如久　仰見之　皇子乃御門之　荒巻惜毛

【釋】○天見る如く仰ぎ見し　空を下から眺めるやうに振り仰いで眺めた所のといふ意。卷十三に「君の御門を天の如仰ぎて見つつ」(三三二四)とあるのも同じ意味である。然るに一方「ひさかたの天見る如く眞十鏡仰ぎて見れど春草のいやめづらしき吾が大君かも」(二三九)といふ例があるので、攷證・美夫君志・講義等には、實際に仰ぎ見るのではなく、單に尊敬の態度を表したのであると述べてある。思ふに此の歌の場合は、「仰ぎ見し」によつて御殿の宏壯である事を表し、同時に敬虔の念をも含めてゐるのである。全釋に此の二句を「皇子」に懸る句とせられたのは妥當でない。○皇子の御門　「御門」を考には宮の御門であると見てゐるが、御殿の意に見るのが穩當である。下の(一七一)以下の皇子の宮の舍人等が詠んだ歌にも、「御門」を廣く御殿の意に用ゐた例が見える。さて日並皇子の御殿は(一七〇)以下に詠まれてゐる所謂「島の宮」であつて、それは今の高市郡高市村大字島ノ庄(大軌吉野線岡寺驛より東二十四五町の高市小學校附近)に在つたと言ひ傳へてゐる。一四三頁地圖參看　此の地は日本書紀推古天皇の三十四年五月の條に、「丁未大臣薨、仍葬于桃原墓、大臣則稻目宿禰之子也。(中略)家於飛鳥河之傍、乃庭中開小池、仍興小嶋於池中。故時人曰嶋大臣。」とある。卽ち蘇我馬子が邸宅を營んだ所で、支那式の造園法に據つて池を掘り、是に飛鳥川の水を注ぎ、池中に島を築いてあつたので、それが宮の名となり又地名の起りともなつて、今の島ノ庄から橘へかけて附近一帶の地を「島」と稱したのである。日本書紀に據れば天武天皇は此の地に離宮(卽ち島の宮)を營み給うて、此處へ屢行幸せられた。而して天皇崩御の後は日並皇子が岡宮(高市村大字岡に在つた)から島の宮に遷り給うて、三年間政務を聽こし召したのである。なほ島の宮の庭園の規模は、下に講ずる舍人等の挽歌によつて大體を窺ふ事が出來る。○荒れまく惜しも　「荒れまく」は荒れむことの意。荒れることであらうが、それが惜しまれるといふ意。

【譯】大空を仰ぎ見るやうに、我々が常に仰ぎ眺めてゐた皇子尊の御所が、これから段々荒れて行くことであらうと思へば、誠に惜しいことである。

【評】上代人は死の汚穢に觸れる事を極度に忌んだのである。從つて死者を出した住居は直ちに住み捨てて、荒れるに任せたのである。集中に貴人の歿後其の邸宅の荒れるのを惜しんだ作歌が多いのは、これが爲である。「此の歌には殆ど句切れがなく、第一句から結句まで直線式にすら〳〵と歌つてある。而も聲調が極めて滑かであるのは、全體に柔いマ行音が豐富に現れ、其の間に鋭いカ行音が適度に配合せられてゐるからである。

(一六九)　あかねさす　日は照らせれど　ぬば玉の　夜渡る月の　隱らく惜しも
茜　刺　日者雖　照　有　烏　玉之　夜渡　月之　隱良久惜　毛

或本以二件歌一爲二後皇子尊殯宮之時歌反一也。

【釋】○あかねさす　「日」の枕詞。「あかね」(茜草)に就いては、(二〇)に於て說明した。此の語を「日」に冠したのは、茜色(「あかね」は染料の名であるが、同時にそれを以て染めた色の名ともなる)の光の射すといふ意で言ひ懸けたのである、と講義に說いてある。○日は照らせれど　「照らせれ」の「れ」は助動詞の「り」の已然形で、動作作用の繼續を表す。下に日並皇子を「月」に譬へたのに對して、此の「日」は天皇を譬へ奉つてゐる。然し此の時持統天皇は未だ御卽位以前であつた。○ぬば玉の　「夜」の枕詞。「ぬば玉」は

「ひあふぎ」(「射干」「檜扇」とも記す)の實で、其の色が眞黑であるから「黑」の枕詞とし、又暗夜の意で「夜」に懸け、轉じて「黑」又は「夜」に關係のある「髮」「夢」「月」等にも冠する。さて「ひあふぎ」(一名「烏扇」ともいふ)は鳥尾科に屬する植物で、葉の形狀は燕子花に似た劒狀で、それが一所から幾重にも重なつて出た貌が、檜扇を擴げたのに似てゐるので此の名がある。花は黃赤色に濃紫の斑點を有し夏開く。此の枕詞は「烏玉之」の外「夜干玉之」「野干玉之」「黑玉之」などの文字で記されてゐるが、假名書の例に「奴婆多麻乃」「奴波多麻能」などとあるのに據つてヌバタマノと訓む。其の語原は明瞭でない。冠辭考には野干玉の義であらうと云ひ、古義所引の宣長の說では、野羽玉の義で葉が羽を擴げたのに似てゐるので、斯う名附けたのであると解いてゐる。○夜渡る月の　夜空を渡る月がの意。皇子尊を月に譬へたのである。○隱らく惜しも　「隱る」が古く四段に活用した事は(一七)で述べた。隱れるのが惜しいといふ意。○或本云々　「後皇子尊」は高市皇子尊である。「歌反」は代匠記精撰本に「反歌」の誤であらうと云つて以來、諸註此の說に贊同してゐるが、歌の反歌といふ意味で記したものであらう。卽ち此の左註は、或本に右の歌を、高市皇子尊の薨去の時の長歌の反歌としてゐるといふのである。

【譯】大空に日が赤々と照らしてゐる如く、天皇は天下を治め給うてゐるが、夜空を渡る月が西に隱れるやうに、皇子尊がお薨れになつたのが惜しまれてならない。

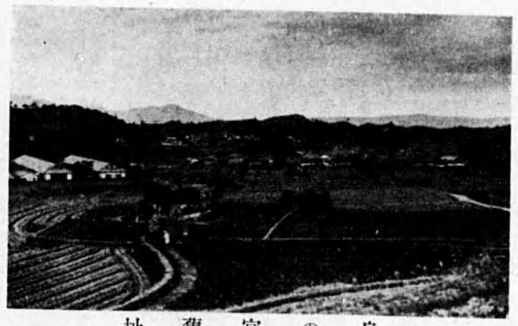
【評】天皇を日にお譬へ申し、皇子を「日並」といふ御名にもふさはしい月にお譬へ申して歌つたのが、如何にも雄大であり莊重である。右の二首の反歌は、長歌が主として敍事的に歌つてあるのに對して、抒情的に堪へ難い悲歎の情を、恰も溜息を洩らすやうな調子で歌つたのである。

皇子尊宮舍人等慟傷作歌十二首(○原二十三首の中)

○一七一　高光る　我が日の皇子の　萬代に　國知らさまし　島の宮はも
高光　我　日　皇子乃　萬代爾　國所　知麻之　島　宮婆母

【釋】○舍人等　「舍人」は天皇又は皇子等に近侍して雜役を勤める者であつて、朝廷に奉仕する舍人には、內舍人・大舍人の別がある。「とねり」の語原を古事記傳に殿侍の義であらうと云つてゐる。ここのは春宮職員の舍人で、

分番・宿直・供奉などに仕へたのであつて、大寶令の東宮職員令に「舍人監正一人、掌二舍人名帳・禮儀・番事一、佑一人・令史一人・舍人六百人」とある。以下講ずる歌によつて知られる通り、皇子の薨去の後、宮に仕へてゐた舍人等の一部は島の宮を守り、一部は佐太岡の御喪屋に侍宿奉仕したのである。○慟傷　童蒙抄にカナシミイタミテ、講義にイタミテ又はナゲキイタミテと訓んである。



島の宮舊址

○高光る　原文の「高光」を流布本にタカテラスと訓んであるが、代匠記精撰本に「多迦比迦流比能美古」（古事記）を證として、タカヒカルと訓んだのが正しい。前に出た「高照らす」と同樣、空に輝くといふ意で「日」に懸けた枕詞である。○我が日の皇子の　我々の仕へ奉る皇子尊の意。「日の皇子」は〔四五〕參照。○國知らさまし　「まし」は非現實の假想を表す助動詞であるから、若し皇子が御在世であつたならば、國を治め給ふであらうといふ意である。この「まし」は連體形で「島の宮」に續いてゐる。○島の宮はも　「はも」の「は」は元來係助詞であつて、ここは下に述語があるべき所であるが、それを略して餘情を籠めたのである。「も」は感動助詞。體言の下に「はも」を添へて文を終止した場合には、何々はまあどうであらうといふやうな感動詠歎の心持を表すのである。此の句と同樣の例には「さねさし相模の野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君波母」（古事記）「今日今日と吾を待たすらむ父母ら波母」（八九〇）「何時來まさむと問ひし兒ら波母」（四四三六）などがある。

【譯】我がお仕へ申してゐる皇太子樣が若し御在世であつたならば、此處で萬代までも天下をお治め遊ばすであらうと、かねて思つてゐた此の島の宮は、これからは人氣もなくどんなに寂れて行くことであらう。

【評】第四句までに、皇子の御代が長久に榮え給ふ事を希つてゐた心持を莊重に歌つて來て、最後の一句の「はも」に、現在の堪へ難い悲歎と失望とを籠めてゐる。

一七四　よそに見し　眞弓の岡も　君坐せば　常つ御門と　侍宿するかも

外　爾見之　檀　乃岡毛　君座　者　常都御門跡　侍宿爲　鴨

【釋】○よそに見し　「よそ」の假名書の例には「與曾のみに見つつ過ぎ行き」（三六二七）「余曾のみに見てはありしを」（四二六九）等がある。講義に「よそ」は元來漢語の「餘處」が國語化したものであらうと述べてある。自分に關係の無い處と思つてゐたといふ意。○常つ御門と　「つ」は「の」の意の助詞。永久に坐します御所として。○侍宿するかも　原文の「侍宿」は、『漢書』地理志に「賓客相過以婦侍宿」とあるが、我が國ではトノヰと訓んで、殿居卽ち宿直の義に用ゐてゐる。（「宿直」の「直」は『文選』の註に「謂下宿二禁中一以備二非常一也」とある。）考に「侍宿」をトノイと訓み、殿宿の義と解いた事の誤である由は、既に小琴に詳論してゐる。さてここは御墓所に晝夜奉仕する事をいふ。

【譯】これまでは何の關係もない所として、見過して來た眞弓の岡であるけれども、今は皇子の尊がお隱れになつ

てゐるので、此處を皇子の永久の御所として、吾々は宿直をすることである。

【評】君の靈の永久鎮まり給ふ眞弓の岡に、從前通り舍人として侍る今の身の上を、沁々歎いてゐる作である。

一七六　天地と　共に終へむと　思ひつつ　仕へまつりし　心違ひぬ
天地與　共將終登　念乍　奉仕之　情違奴

【釋】○天地と共に終へむと　原文の「將終登」を類聚古集古葉略類聚鈔にハテムト、神田本にオハラムトと訓んであるが、流布本にヲヘムトと訓んだのがよい。「終へむ」は他動詞であつて、「斯くしこそ梅を折りつつ樂しき乎倍米」(八一五)「春の中の樂しき終者」(四一七四)などの「終ふ」と同じ用法で、限りを盡す意である。從つて此の二句は註疏・新考の說の通り、天地の終る時に奉仕を終へよう、即ち天地の續く限り永久に仕へ奉らうといふ意味である。然るに童蒙抄・略解・攷證・檜嬬手・美夫君志等に、皇子の御代は天地と共に久しくあるであらうと解いてゐるが、これは「終ふ」が他動詞である事を看却した爲の誤である。○心違ひぬ　豫想が實際と相違したといふ意。

【譯】天地のあらん限り、永久に御奉公申し上げようと思つて、御仕へ申してゐた豫期が、意外にも全く外れてしまつたことである。

【評】初の三句は思ひ切つて雄大な表現法である。又此の歌の韻律には夕行音が頻繁に現れ、母音のオが多く用ゐられてゐるので、全體が雄渾な調を成してゐる。

一七七　朝日照る　佐太の岡邊に　群れゐつつ　吾が泣く涙　やむ時もなし
朝日弖流　佐太乃岡邊爾　羣居乍　吾等哭涙　息時毛無

【釋】○朝日照る　考に此の句を「纒向の日代の宮は朝日の日照る宮夕日の日陰る宮」(古事記)の「朝日云々」と同じく、其の場所を賞め讃へた語であると解いて以來、一般に此の說が行はれてゐる。然し代匠記精撰本に「朝日の光いづくはあれど、先づ岡にあたりたるがはなやかに見ゆる故なり」と解いたのに從つて、「朝日照る」を實際の光景と見るのが妥當である。○佐太の岡邊に　「佐太の岡」は高市郡越智岡村大字佐田附近にある一帶の丘陵をいふ。佐田は坂合村眞弓の西南に續く地であり、從つて佐太の岡は眞弓の岡の丘續きであつて、其の境は判然としてゐない。三〇六頁圖版參看　○吾が泣く涙　上に「群れゐつつ」とあり、此の句の原文に「吾等」と記してあるのによつて知られる通り、大勢の舍人達が山陵に宿衞してゐるのである。當時は「吾」も「吾等」も區別なく「あ」「あれ」、又は「わ」「われ」と言つたのである。「吾等」の「ら」は、古くは「憶良等は」(三三七)「今日良もか」(三八八四)等の如く音調を整へる爲に添へたのであつて、必ずしも複數を表す接尾語ではなかつた。

【譯】美しく朝日のさし照る佐田の岡の邊に大勢集つてゐて、吾々が悲歎にくれて泣く涙は、とめども無く流れることである。

【評】岡の傍の侍宿所に、一同相擁して忍び泣きつつ夜を明かし、さて夜が明け離れると、夏の晴れやかな朝日の光が、ぱつと岡の邊一面にさして、自然は何等異なつた樣子もなく、爽かな朝の景色を展開する。然し舍人等の悲歎の涙は愈增すばかりであるといふのである。其の悲痛を極めた情景が分明に想像せられる。

一七八　御立たしの　島を見る時　にはたづみ　流るる涙　止めぞかねつる
御立爲之　島乎見時　庭多泉　流涙　止曾金鶴

【釋】○御立たしの「御立爲之」を流布本にミタチセシ（新考・新解・新釋同訓）、代匠記精撰本にミタタセシ、考にミタタシシ（略解・攷證・檜嬬手・古義・註疏・美夫君志等同訓）と訓んである。然し「み立ちせし」或は「み立たしし」の如き語法上の用例が、當時行はれたか否かは疑はしいので、講義には此の句をミタタシノと訓み改めて、次のやうに説明せられた。――「み」は美稱の接頭語で、「立たし」は「立つ」に敬語の助動詞を添へた「立たす」の連用形であつて、「み立たし」は體言となる。それを助詞「の」で承けて、下の語を形容修飾する連體格の句としたのである。これは「出でましの悔はあらにぞ」（日本紀）「行幸の宮」（三一五）などと稍趣を同じうし、又「御執らしの梓弓」（三）とは全く同一の形である――といふのである。傾聽すべき説であるから、今は是に從つてミタタシノと訓む。皇子が屢出で立ち給うた所のといふ意。○島を見る時　前に島の宮に就いて述べた通り、此の御所の庭園には勾の池といふのがあつて、其の中に島が築いてあつたのである。其の「島」は卽ち勾の池である。○にはたづみ　此の語の用例には「爾波多豆美流るる涙止みかねつも」（四一六〇）「甚だも降らぬ雨故庭立水いたくな行きそ」（一三七〇）等がある。語原及び語義に關しては諸説がある。（イ）管見には雨が降つて庭に溜り又は流れる水と解き、（ロ）代匠記には俄立水の義で、雨で俄かに增さる水を云ふと解き、（ハ）冠辭考には俄泉の義であるとし（略解攷證同説）、（ニ）和訓栞には「たづみ」は伊勢方言に云ふ淵の事であると言ひ、（ホ）枕詞解には庭漾水の約音で、庭に流れる雨水と解いてゐる。さて和名抄を見ると、「唐韻云、潦音老（和名類聚抄、太豆美）雨水也」とあつて、其の「潦」は『說文』に「雨大貌」と註してある。生田耕一氏は此の「潦」の字義及び「にはたづみ」の語義を詳細に考證して、下の如き説を發表せられた。卽ち「潦」は記紀に於ける「潦水」又は「水潦」の用例に徵しても、降雨の際に一時庭に溜つた程度の小量の水ではなく、河川の氾濫或は疏通水の停滯に因る大水を指すものである。而して「にはたづみ」の語義に就いての一假定説として、「には」は庭園の義ではなく、更に廣義の平地を指すのであり、「たづみ」は「ただうみ」の約であつて、（其の「ただ」は「ひた」に通ふ「直」で、「うみ」は大なる積水の義と見て）「にはたづみ」は雨水が平地に停滯して生じたただ一面のうみの義であらうと述べられた。（『萬葉難語難訓攷』二六七―三四八頁參照）要するに從來降雨の爲に庭に溜り或は流れる雨水であると解いたのは、「潦」の字義の上からは穩當を缺くのであつて、生田氏の説に從ふべきもののやうである。「にはたづみ」は此處では「流る」の枕詞となつてゐる。○止めぞかねつる　「つる」は完了の助動詞の「つ」の連體形。「つ」は過去未來を問はず、動作作用が確かに實現される意を表す。

【譯】皇子が屢出で立つて景色を眺めさせ給うた、此の宮の池の中島を見るにつけても、當時の事が偲ばれて流れ出る涙を塞き止めることが出來ない。

【評】ありし日の御姿を見る由もない寂しい庭に立つて、涙新たなる時の感情を率直に歌つてゐる。

一七九　橘の　島の宮には　飽かねかも　佐田の岡邊に　侍宿しに行く
橘之　島宮爾者　不飽鴨　佐田乃岡邊爾　侍宿爲爾往

【釋】○橘の「橘」は地名で現在の高市村大字橘、卽ち飛鳥川を隔てて島ノ庄の西に隣接してゐる地であつて、此所

には著明な橘寺がある。（一四三頁地圖參看）古此の附近には橘の木が植ゑてあつたので、それに因んで此の地名が生じたのであらう。さて島ノ庄と橘とは今は異なる地域であるが、「島」は馬子が島の宮を營んで後に生じた地名であつて、更に古くは此の附近一帶を「橘」と稱したので、此處にも「橘の島の宮」と歌つたのであらう。○飽かねかも　此の句を流布本にアカズカモ（代匠記・童蒙抄同訓）、類聚古集・古葉略類聚鈔にアカヌカモ（考・攷證同訓）、略解にアカネカモ（檜嬬手・古義・美夫君志等同訓）と訓んでゐる。これはアカネカモが正しい。「ね」は否定の助動詞の已然形で、こは既定事實を順接條件とする語形である。一句は「飽かねばかも」と同じ意で、殿居をなし足らぬからであらうかの意である。○佐田の岡邊に　佐田は島ノ庄から西南約一里を隔てた地である。

【譯】皇子の御在世中、橘の島の宮にお仕へ申し上げたが、まだ宿直をし足らぬのであるか、佐田の岡の邊へも宿直をしに出掛けることである。

【評】飽かず別れ奉つた皇子に對する、慰めやうのない追慕の情を間接に表現した作である。

一八一　御立たしの　島の荒磯を　今見れば　生ひざりし草　生ひにけるかも
御立爲之　島之荒磯乎　今見者　不生有之草　生爾來鴨

【釋】○島の荒磯を　「荒磯」は荒浪の打ち寄せる海岸を指す語であるが、ここは宮の庭園の中にある池の汀に、岩石を据ゑて磯の樣に擬してあつたのを云ふ。○今見れば　「今」を流布本にケフと訓み、童蒙抄・考・略解以下諸註にイマと訓んでゐるが、美夫君志には「今日」を略して「今」と記した例が集中にあると述べて、ここをもケフと訓んである。即ち「玉ゆらに昨夕見しものを今朝に戀ふべきものか」（二三九一）の如きは、「今」をケフと訓ませた例である。然し此の歌の場合は、字面通りにイマと訓む方が感動が切實に表れる。

【譯】皇子が屢出で立ち給うた島の汀の邊を今ふと見れば、御在世中には生えてゐなかつた草が、ぼう〳〵と茂つてゐることである。

【評】御在世中には庭園の手入れも行屆いて、雜草などは生えてゐなかつたのが、薨じ給うて後は唯荒れるに任せてあるので、草が繁茂して見る影もなくなつたのである。其の荒れた光景を見て、感慨無量の念を禁じ得なかつた作者の心境は、「今見れば」の句によつて表されてゐる。

一八二　塒立て　飼ひし鷹の子　巣立ちなば　眞弓の岡に　飛び歸り來ね
鳥塢立　飼之鷹乃兒　栖立　去者　檀　崗爾　飛　反　來年

【釋】○塒立て　原文の「塢」は「栖」又は「棲」の異體字で、トグラと訓むべきである。（詳しくは美夫君志及び講義參照）「とぐら」は鳥座の義で、其の「くら」は「鞍」「倉」などと同系の語であつて、凡て物を載せる座をいふ。「天之石位」「高御座」「寢座」「呉床」（上座の義）「幣帛」（御幣座の義）「櫓」（矢座の義）「位」（座居の義）等の「くら」も總て同じ語根である。「とぐら」は鳥の居る座の義で鳥屋を云ふ。「立て」は構へ設けること。○飼ひし鷹の子　原文の「鷹」の訓及び其の指す物に就いては兩說がある。（イ）代匠記及び考にはカリと訓み、輕鴨（夏鴨ともいふ）であると解いてゐる。（略解・檜嬬手・美夫君志・全釋同說）（ロ）代匠記の一說には、『玉篇』に「雁、於陵切今作鷹」とあるの

を引いて、原文の「鴈」を「鷹」の誤字と見、又家持の歌に「鳥座結ひすゑてぞ我が飼ふ眞白節の多可」(四一五四)とあるのを參考して、「鴈」は鷹であらうと述べてゐる。(童蒙抄・攷證・古義・新考・新解同說)思ふに「鴈」は「雁」と同じで「かり」の事であるが、此の歌の「鴈」は代匠記の一說に從つて「雁」の誤字と見て、鷹とするのが穩當であらう。鷹は鷹狩に使用する爲に當時の貴族の間に飼養せられた。然し此處のは支那式の庭園を營まれた島の宮の事であるから、支那の苑囿などに擬して、賞翫の目的で飼育せられたものかとも思はれる。○飛び歸り來ね　美夫君志に原文の「反」は「變」と通用の文字であるから、ウツリと訓むべきであるとあるが、從來の訓の儘でよい。語義に就いて古義には、幾度も幾度も飛び通ひ來れの意であるとし、新考には、時鳥を詠んだ歌に「卯の花の咲きたる野邊ゆ飛翻來鳴きとよもし」(一七五五)とあるのに據つて、「飛びかへり」は飜り飛ぶ意と解いてある。併し此の場合の「かへる」は歸る意であつて、皇子の坐します所、卽ち御陵のある眞弓の岡へ戻つて來い、といふ意味に解くべきであらう。

【譯】皇子が鳥屋を立ててお飼ひ遊ばされた鷹の子よ、成長して巢立ちをしたならば、眞弓の岡へ飛び戻つて來て、皇子の御靈をお慰め申せよ。

【評】皇子が御生前に堺を設けて飼つて置かれた鷹の雛鳥に呼びかけて、皇子を追慕する作者の情を歌つたのである。なほ上に講じた長歌並に二首の反歌の次に、「或本歌一首」として「島の宮勾の池の放ち鳥人目に繼ひて池に潛かず」(一七〇)とあり、又舍人等が詠んだ挽歌二十三首中に、「島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君坐さずとも」(一七二)の如きがある。此等を見ると、島の宮には種々の鳥が飼養せられてゐたらしい。

一八四　東の　瀧の御門に　侍へど　昨日も今日も　召すこともなし

東乃　多藝能御門爾　雖伺侍　昨日毛今日毛　召言毛無

【釋】○東の瀧の御門　「瀧」はタギと訓む。前に說明した通り水の奔流する所をいふ。島の宮の庭園は、前述の如く支那式の造園法に據つて造られたのであつて、其の勾の池には飛鳥川の水を引入れてゐたのである。其の水の引込口は、中古の寢殿造の庭の形式と同じく、池の東にあるのが法式となつてゐた。「東の瀧」といふのは、其の水が庭園に落ち込む所をいふ。「御門」は東の門で、前に「日の經の大御門」とあつたのと同じく、此の宮の正門である。○侍へど　此の句を金澤本・類聚古集・神田本等にサフラヘドと訓んであるが、假名書の例は皆「い侍ひもとほり侍へど佐母良比得ねば」(一九九)「佐毛良布と我が居る時に」(四三九八)の如くサモラフとあるから、ここも流本布の訓に從つてサモラヘドと訓むべきである。意味は伺候すること。「さもらふ」は後世轉訛して「さむらふ」「さうらふ」となつた。此處に「侍へど」とあるのは、宮の正門の側にある舍人の詰所に控へてゐるのを云ふのである。○召すこともなし　「こと」を代匠記精撰本に御言の義と解いてゐる。然し原文の「言」は「事」の借字とする一般の說の方がよい。なほ「召す」は「見る」に敬語の助動詞の「す」を添へた「見す」から出た語で、呼び寄すの意の敬語動詞である。

【譯】島の宮の東にある瀧の御門に毎日伺候して、御用を待つて居るけれども、昨日も今日もついぞお召しになる事もなく、誠に悲しいことである。

【評】勾の池に注ぐ瀧の水の音なひも常と異ならず、邊には何等變つた樣子も無い島の宮に伺候してゐる舍人が、

ふと現實の悲しい出來事も信じられなくなつた時、宮人も通はず召される事もない、其の遣る瀬ない寂しさ悲しさをしみ〴〵感じて詠んだのである。

一八五　水傳ふ　磯の浦回の　岩躑躅　もく咲く道を　また見なむかも
水傳　磯乃浦回乃　石乍自　木丘開　道乎　又將見鴨

【釋】○水傳ふ　冠辭考に之を枕詞とし、打ち寄せた波は磯を傳つて流れるから、「磯」に懸けたのであると述べてゐるが、枕詞とするのはよくない。川水を引いて池の島の圍りを流れるやうにしてあるので、「水傳ふ」と云つたのである。○磯の浦回の　「磯」「浦」は海に限らず、川にも池にも用ゐた例がある。此處では勾の池の汀の邊を指してゐる。○岩躑躅　此の名の躑躅は今も數種類あつて、植物學上「もちつつじ」「れんげつつじ」など呼ばれてゐるものも、一名「いはつつじ」と云はれてゐる。蓋し「いはつつじ」なる稱呼は、元來山野の岩石の上や岩陰などに自生する躑躅の汎稱であつて、ここも躑躅の品種の名として用ゐたのではない。○もく咲く道を　「木丘開」はモクサクと訓む流布本の訓が正しい。「もく」は「もし」といふ形容詞の連用形で、「もし」は草木の盛に繁つてゐる樣を云ふ古語である。日本書紀の訓に「枝葉扶疏」「芳草薈蔚」「厥功茂焉」などの用例が見える。和訓栞や小琴の說の通り、「もし」は「もる」(盛)「もり」(森)等と同根の語であらう。岩躑躅が繁つて盛に咲いてゐる道をの意。○また見なむかも　流布本の訓にマタモミムカモとあるが、考にマタミナムカモと訓んで以來、諸註は考の訓に從つてゐる。「なむ」は未來完了の助動詞で、次の「か」は疑問の助詞であるが、ここでは反語を表してゐる。

【譯】遣水がさら〴〵と流れて行く池の汀の岩間に、躑躅が繁り榮えて咲き匂つてゐる、此の美しい池の圍りの道を、此の宮を去つた後また眺めることがあらうか。(それを思ふと名殘が惜しまれてならない。)

【評】此等の歌によつて想像すると、島の宮の庭園は中世の寢殿造の庭と略同一の景趣を具へた美しいものであつた事が知られる。卽ち東から流れ込む飛鳥川の水が池を圍り、池の周圍の岸には岩を疊み、躑躅を植ゑてあつたのである。此の歌はかうした美しい宮をやがて退散するに當つて、名殘を惜しんで歌つたものである。

一八九　朝日照る　島の御門に　おぼほしく　人音もせねば　まうら悲しも
旦日照　島乃御門爾　欝悒　人音毛不爲者　眞浦悲毛

【釋】○朝日照る　從來此の句を宮を讃へた詞と見てゐるが、〔一七七〕の第一句と同樣に、これも實際に朝日が明るく照る意味に見る方がよい。○おぼほしく　原文の「欝悒」は考の訓に據つてオボホシクと訓む。集中には「欝悒久」「欝之苦」と記した例もある。假名書の用例には「母が目見ずて意保保斯久いづち向きてか吾が別るらむ」(八八七)「雲間よりさ渡る月の於保保思久相見し子らを見むよしもがも」(二四五〇)などがある。「おぼほし」は元來「おぼおぼし」の約まつた形で、シク活用の形容詞である。其の「おぼ」は、「おぼろ」(朧)「おぼめく」「おぼつかなし」(覺束無)などの「おぼ」と同じ語根である。從つて「おぼほし」の原義は、分明でなく氣がかりな狀態をいひ、轉じて心の晴れやらぬ欝々とした狀態を表す。ここは「欝悒」の字義通り、心が結ぼれて樂しまぬ樣をいふ。此の句と次の句とは入れ替へて見ると意がよく通じる。○まうら悲しも　「ま」は接頭語。「うら悲し」の「うら」は「う

ら歎く」「うらさぶ」等の「うら」と同じく心の中の義。

【譯】朝日の明るく照り輝いてゐる島の御所には、（今は以前と變つて出仕の人も無く）人の氣はひさへもしないので、如何にも鬱陶しく悲しいことである。

【評】常ならば朝日の照る頃は、大宮人の出仕の時刻であるから、御所の中は貴紳達が右往左往して賑かなるべき時である。然し今は宏壯な御所内も寂として邊に聲なく、唯朝日だけが明るく照つてゐるのである。さうした情景の中に立つて歌つた作である事を念頭に置いて見ると、此の作に表れた情緒が容易に味はひ得られる。

一九二　朝日照る　佐太の岡邊に　鳴く鳥の　夜鳴きかはらふ　この年頃を
朝日照　佐太乃岡邊爾　鳴　鳥之　夜鳴　變　布　此　年已呂乎

【釋】○鳴く鳥の　考には「の」をの、如くの意に取つて、上三句を舍人が泣く事の譬喩であると解いてゐる。（略解・攷證・檜嬬手・古義・新考等同説）然し下に述べる如く是は譬喩ではない。○夜鳴きかはらふ　此の句を流布本にヨナキカヘラフと訓んでゐるが、管見以下一般にヨナキカハラフと訓んでゐるのが妥當である。意味に就いては諸説がある。（イ）代匠記には、年頃囚鳥がいやな聲をして夜鳴きをしたのは、斯かる變事のある前兆であつたのだといふ意に解いてゐる。（美夫君志同説）（ロ）考には舍人等が嘆きながら替る替る夜の侍宿を務める事であると解いてある。（略解・攷證・檜嬬手等同説）（ハ）古義にはヨナキカヘラフと訓んで、幾度も幾度も聲を上げて泣きながら御墓仕へをする意と解いてゐる。（全釋同説）然し此等の説は何れも穩當を缺くのであつて、ここは詞通り單純に解くべきである。「かはらふ」は「變る」に繼續作用を表す「ふ」の附いたもので、いつも變つてゐる事をいふ。即ち鳥の夜鳴きの聲が、以前とは異なつて悲しく聞えるといふ意。○この年頃を　「年頃」は年來の意。考に去年の四月から今年の四月まで、一周年の間御陵に仕へる間を言つたのであると述べてゐる。最後の「を」は元來補語を示す助詞で、語法的には「この年頃を夜鳴き變らふ」の義であるが、倒置法によつて「を」を最後に置いたので、「よ」と同じく專ら感動を表す助詞となつてゐる。

【譯】朝日のまともにさして來る此の佐田の岡の邊に啼く鳥の夜鳴きの聲は、この一年以來は以前とは違つて悲しく聞えることである。

【評】以上講じた十二首によつて、夜となく晝となく島の宮に於て又佐田の岡に於て、愴然たる寂しさと悲しみの歎きの中に、鬱々と日を送つてゐる舍人の面目が想像せられる。何れも率直な表現法の中に、皇子を喪つて悲歎に暮れてゐる舍人の眞情が流露してゐて、讀む者の心を大いに感動させるものがある。嘗ては華やかに榮えた島の宮が、今は日に〳〵荒廢に歸して行く有樣や、佐田の岡邊に途方に暮れて群れてゐる白裝束の舍人の姿などが偲ばれて感慨が深い。

明日香皇女木槨殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌

一九六　飛ぶ鳥の　明日香の河の　上つ瀨に　石橋渡し　下つ瀨に　打橋渡す　石橋に
飛鳥　明日香乃河之　上　瀨　石橋渡　下　瀨　打橋渡　石橋

生ひ靡ける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひをれる　川藻もぞ
生靡留　玉藻毛敍　絶者生流　打橋　生乎爲禮流　川藻毛敍

枯るれば生ゆる　何しかも　吾が大君の　立たせば　玉藻のもころ　臥やせば
干者波由流　何然　毛　吾　乃　立　者　玉藻之母許呂　臥　者

川藻の如く　靡かひし　宜しき君が　朝宮を　忘れ給ふや　夕宮を　背き給ふ
川藻之如久　靡相之　宜　君之　朝宮乎　忘賜　哉　夕宮乎　背賜

や　うつそみと　思ひし時に　春べは　花折りかざし　秋立てば　黄葉かざし
哉　宇都曾臣跡　念之時　春部者　花折　挿頭　秋立　者　黄葉　挿頭

敷妙の　袖たづさはり　鏡なす　見れども飽かず　望月の　いやめづらしみ
敷妙之　袖　携　鏡成　雖見不厭　三五月之　益　目頻　染

思ほしし　君と時時　いでまして　遊び給ひし　みけむかふ　木題の宮を　常
所念之　君與時時　幸　而　遊賜之　御食向　木題之宮乎　常

宮と　定め給ひて　あぢさはふ　目言も絶えぬ　然れかも　あやに悲しみ　ぬ
宮跡　定賜　味澤相　目辭毛絶　奴　然有鴨　綾　爾憐　宿

え鳥の　片恋夫　朝鳥の　通はす君が　夏草の　思ひ萎えて　夕星の　か行き
兄鳥之　片戀嬬　朝鳥　往來爲君之　夏草乃　念　之萎而　夕星之　彼往

かく行き　大船の　たゆたふ見れば　慰むる　心もあらず　そこ故に　すべ知
此　去　大船　猶預不定見　者　遣悶流　情毛不　在　其　故　爲便知

らましや　吾のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　偲び行かむ　御
之也　吾耳　母　名耳　毛不　絶　天地之　彌　遠長久　思　將　往　御

名に懸かせる　明日香河　萬代までに　愛しきやし　吾が大君の　形見にここ
名爾懸　世流　明日香河　及　萬　代　愛　早布　屋師　吾　王　乃　形見何此

を
爲

【釋】○明日香皇女　天智天皇の皇女で、御母は阿倍倉梯麻呂大臣の女橘娘である。文武天皇の四年四月四日に薨去せられた。其の御名は飛鳥川に因んでゐる。○木題殯宮之時　キノヘノアラキノミヤノトキと訓む。「題」は攷證の説に據れば、「甑」の偏傍を左右したのであると云ふ。「木題」は又「城上」とも記す。和名抄に「廣瀬郡城戸」とある地で、廣瀬郡は今の北葛城郡の一部に當り、城戸郷は今の馬見村に含まれてゐる。殯宮の行はれた城上の岡は、『大和志料』に馬見村大字大塚に在ると云ひ、又『北葛城郡史』に大塚の南方の六道山の畑地であると云つてゐる。要するに今の大軌（大阪電氣軌道）櫻井線築山驛の北に續く丘陵地帶であらう。○柿本朝臣人麻呂作歌　考には「人麻呂」の下に「獻忍坂部皇子」の六字を補つてゐる。其の理由として考に述べてゐる

阿倍橋娘
└明日香皇女
└新田部皇女
└天智天皇
└天武天皇
└忍壁皇子
└磯城皇子
└泊瀬部皇女
蠻媛娘

所は下の通りである。――此の長歌の前にある(一九四)の題詞に「柿本朝臣人麻呂獻二泊瀬部皇女忍坂部皇子一歌云々」とあつて、其の歌の左註に「右或本曰葬二河島皇子越智野一之時、獻二泊瀬部皇女一歌也云々」とある。右の題詞に河島皇子の妃なる泊瀬部皇女の御名の外に、皇女の御兄の御名の「忍坂部皇子」を併せ記したのは亂入であつて、「忍坂部皇子」は此の(一九六)の題詞のが脱ちたのである。また此の歌に皇女の背の君が歎き慕ひつつ木廻の御墓に通ひ給ふ由が歌つてあるのは、忍坂部皇子が即ち明日香皇女の夫君に坐しましたからである。――といふのである。然し明日香皇女が忍坂部皇子の妃であらせられたと云ふのは、何等歴史的根據の無い說であるから、此の說には容易に從ひ難い。

飛鳥の川上流

○飛ぶ鳥の　「明日香」の枕詞。(既出)○明日香の河の　今の飛鳥川である。高市郡高取山に源を發し、北流して同郡高市村及び飛鳥村を流れ、磯城郡川西村に至つて大和川に注いでゐる。○石橋渡し　「石橋」を流布本にイハハシ、神田本・細井本にイシハシと訓んでゐる。「石」を古くはイハと訓んだ例が多いから、イハハシと訓むのがよい。「石橋」は川の淺瀨に岩石を列べ据ゑて、其の上を踏んで渡るやうにしたものを云ふ。今も朝鮮の川には到る處に用ゐてゐる。○打橋渡す　流布本にウチハシワタシ(考・攷證同訓)と訓んでゐるが、古義・美夫君志などの訓のウチハシワタスに從ふべきである。「打橋」は河中に岩石を据ゑ、それを中繼として板を架け渡して橋としたもの。○玉藻もぞ　「も」は感動助詞であり、「ぞ」は係助詞であつて、「ぞ」の結は下の「生ふる」にである。「も」と「ぞ」を重ね用ゐた例に、「立ちて思ひ居て毛曾思ふ」(二五五〇)「汝を曾母吾に依すとふ吾を毛曾汝に依すとふ」(三三〇五)などがある。○生ひをれる　原文の「生乎爲禮流」を流布本にオフルヲスレル、代匠記精撰本にオヒヲセレルと訓んでゐるが何れも意味を成さない。童蒙抄には「生」を「靡」に、又「爲」を「鳥」に改めてナビキヲヲレルと訓み、考には「爲」を「鳥」に改めてオヒヲヲレル(略解・攷證・檜嬬手・古義等同說)と訓んでゐる。又木村博士の『萬葉集字音辨證』には、「爲」の音ヰをヲに轉用したので、斯樣な例は外にもあるから、是は誤字ではないと述べてある。さて「ををる」といふ動詞のあつた事は、「春べは花咲き乎遠里」(九二三)「春されば乎呼理爾乎呼里鶯の鳴く吾が島ぞ」(一〇二二)などの例によつて明かである。又「春さりぬれば山邊には花咲き乎爲里」(四七五)「坂の麓に咲き乎爲流櫻の花を」(一七五二)などの「乎爲里」「乎爲流」も右の例によつてヲヲリ・ヲヲルと訓むべきは明かであるから、「爲」は美夫君志の說の通り、ヲの假名として用ゐたものと見るべきである。さて「ををる」はラ行四段活用の動詞で撓む意である。「ををる」と同系統の語に「たわむ」「とをむ」等の動詞、又「たわわ」「とをを」「たをたを」「とをとを」等の副詞がある。「ををる」は此等の「を」を語幹として活用させたのであらう。「ををれる」は「ををる」の命令形に、動作の存續を表す完了の助動詞の「り」が附いたもの。ここは橋杭の用をなしてゐる水中の石に生えてゐる藻が、水のまにまに撓み靡いてゐるのを云ふ。○枯るれば生ゆる　「上つ瀨に」以下十二句は對句であつて、「上つ瀨に云々」と「下つ瀨に云々」とが二句對句をなし、更に「石橋に云々」と「打橋に云々」とは前の對句を承けた四句對句であつて、全體が六句連對句を構成

してゐる。以上は飛鳥川の藻を素材として、藻は一旦絶え又は枯れても再び發生する事を敍べて、皇女は薨去になつて再び歸り給はぬ事を歌ふための前提とし、又修辭の上では後に「玉藻のもころ」「川藻の如く」を言ふ爲の序としたのである。○何しかも　〔一六三〕に講じた「何しか」に、感動助詞の「も」を添へた形である。何故にといふ意味で、「か」は下の「忘れ給ふや」「背き給ふや」の二句に懸る。○吾が大君の　ここは明日香皇女を指し奉る。○立たせば　「立者」を流布本にタチタレバ、代匠記にタタセレバ（攷證・檜嬬手同訓）、考にタタスレバと訓んだのは何れも穩かでない。字面の上からはタテバと訓むべきであるが、略解の訓のタタセバ（古義・新考等同訓）に從つて、敬語の助動詞の「せ」を入れて訓んで置く。○玉藻のもころ　此の句と次の句とは流布本に「玉藻之如許呂臥者云々」とある。從來「ころ伏す」をころりと伏す意であると解いて、異論は無かつたのである。然るに先年山田孝雄博士は「ころぶ」といふ語はあるが、「ころぶす」といふ語は古來無いと言つて、原文の「玉藻之如許呂」を一句とし、其の「如」は金澤本に「母」となつてゐるのに據つて、タマモノモコロと訓むべきであるといふ說を發表せられた。（『アララギ』第十四卷第十號所載「萬葉訓義考」參照）而して氏の說に據れば、「もころ」の「もこ」は本來「仇」「匹」「敵」などの字義に當るのであつて、「もころ」は「沖に住む小鴨の母己呂八尺鳥息づく妹を置きて來ぬかも」（三五二七）「松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりし母己呂」（四三七五）などの用例によつて知られるやうに、「如し」と同じ意味を表す古語であるといふ事である。此の說に從つてタマモノモコロを一句とし、次の句は「臥者」を以て一句とするのが妥當である。○臥やせば　「臥者」はフセバと訓むべきであるが、上の「立たせば」に倣つてコヤセバと訓んで、敬語の助動詞を添へる方がよい。「こやす」は四段に活用する「こゆ」に、敬語の助動詞を添へたもので、横に臥し給ふ意である。「こやす」の用例には「飯に飢て許夜勞る其の旅人あはれ」（日本紀）「うち靡き許夜斯ぬれ」（七九四）などがある。○靡かひし　「靡かひ」の「ひ」は繼續作用を表す助動詞の「ふ」の連用形。代匠記に皇女の立居振舞がしなやかである樣を賞め奉つた詞と解いてゐる。然し攷證に述べてゐる通り、立居につけて水に靡く藻のやうに、背の君のお側を離れず寄り靡いて居られた事を云つたのである。○宜しき君が　「よろし」は〔五二〕で說いた通り、物が足り具はつてゐる、即ち結構なといふ意である。次の「君」に就いては皇女を指し奉ると見る說もあるが、皇女の背の君を申すのである。ここの「が」は主語を示す助詞ではなく、「君が朝宮」と續いて、「の」と同じ意を表してゐる。立派な君の坐します御殿の意。○朝宮を忘れ給ふや　此の二句は次の「夕宮を云々」と對句である。「朝宮」「夕宮」によつて、朝夕常に背の君の坐します宮の意を表したのである。次に「給ふや」の「や」を疑問の助詞と見る時は、（前に「何しかも」といふ句があつて、其の疑問の助詞「か」が此の句に懸つてゐるから、）疑問の助詞が重複する事になる。よつて古義には「天離る鄙も治むる丈夫や何かもの思ふ」（三九七三）などの例を擧げて、ここの「や」も意味は輕いのであると述べ、又講義には上の「か」の結は「給ふ」であつて、此の「や」は間投助詞であると云はれてゐる。即ち是は疑問の助詞ではなくして、文の終に附いて感動を表し語調を強める助詞と見るべきである。○夕宮を背き給ふや　宮を忘れ給ひ背き給ふと歌つたのは、皇女が宮に在しまさなくなつた事、即ち薨去せられた事を間接に表したのである。以上が此の歌の第二段である。○うつそみと思ひし時に　「うつそみ」は此の世に現在生きてゐる身をいふ。〔一三〕參照。「念之時」は拱解所引の直好の說にオモヒシトキと訓んでゐるが、今は考の訓に從つて「に」を添へた。此の「思ふ」は輕く添へた語である。即ち皇女

が此の世に御生存遊ばした時にはの意。○春べは花折りかざし云々　春には咲き匂ふ花を手折つて挿頭とし、秋になると美しい黄葉を髪に挿しての意で、皇女の野山での御遊びの有様を追懐して敍べた句である。此の四句と略同一の詞句は(三八)に出てゐる。○敷妙の　「袖」の枕詞。(既出)○袖たづさはり　「たづさはる」は「たづさふ」(携)から派生した語であつて、兩者の關係は(三八)に說いた「たたなはる」に對する「たたなふ」(「たたぬ」に「ふ」の附いた語)、「よばはる」に對する「よばふ」、「まはる」(廻)に對する「まふ」(舞)などの關係と同じである。卽ち「たづさふ」に、其の狀態を示す「あり」の附いた「たづさひある」が約まつたものである。「袖たづさはる」は互に袖を連ね睦じく連れ立つてゐる事である。轉じて「たづさはる」は物事に關係する意味にもなる。此の語の假名書の用例には「思ふどち馬うち群れて多豆佐波理出で立ち見れば」(三九九三)「袖泣き濡らし多豆佐波里別れかてにと引き止め」(四四〇八)などがある。○鏡なす　「見る」の枕詞。鏡のやうに見るといふ意で懸けたのである。「なす」は前に說いた通り何々の如くといふ意。○見れども飽かず　流布本の訓にミレドモアカズとあつて、諸註之に從つてゐるが、古義にはミレドモアカニと訓み、新訓・新解は之を採用してゐる。然しナ行に活用した否定の助動詞の連用形の「に」の假名書の例は、「知らに」及び「かてに」の二つに限られてゐるから、此處はアカズと訓む方が穩かである。○望月の　原文に「三五月」と記したのは、ククを「八十一」、シシを「十六」と記すのと同類の戲書で、十五夜の月の意である。「の」はの如くの意。滿月は人が愛で賞するものであるから、「いやめづらしみ」に懸けて枕詞としたのである。○いやめづらしみ　「いや」はいよ〳〵の意を表す接頭語。「めづらし」は今は專ら「珍」の意に用ゐるが、元來は動詞の「めづ」(愛)から派生した形容詞であつて、愛すべきの意である。「み」は形容詞の語幹に附いて副詞的修飾語を作る語尾。○君と時時　流布本の訓並に諸註にキミトトキドキ、考にキミトヲリヲリ(略解・檜嬬手同訓)と訓んでゐる。これは流布本の訓の儘でよい。「君」は皇女の背の君を指す。○みけむかふ　「木廻」の枕詞。此の外「淡路」「味原」「南淵」などの地名に冠した例もある。「みけ」は御饌で、「むかふ」は向ふ卽ち供へる義である。冠辭考の一說に、此の語は御食饌に供へる物の名に冠したのであつて、「木廻」は酒の廻、「淡路」は粟、「味原」は美味或は味鴨・味魚、「南淵」は蜷貝に通ずるので、此等に言ひ懸けたのであらうと說明してゐる。なほ枕詞解には「木廻」に懸けたのは葱の韮の義により、又「南淵」に懸けたのは其の肉の音に續けたのであると解してゐる。○常宮と　とこしへに御魂の鎭まりますべき宮と。○あぢさはふ　「目」の枕詞。冠辭考に「あぢ」は味鳧、「さは」は多く、「ふ」は經の義であつて、味鳧は多く群れて渡るから、「むれ」の約言の「め」に懸けたのであると解いてゐる。又枕詞解には「味澤相」をウマサハフと訓み、味粟田の義で(粟田は粟畠をいふ)粟の群生といふ意で「むらはえ」の約言の「め」に懸けたのであると云つてゐる。外に首肯すべき說を見ないから、姑く眞淵の說に從つて置く。○目言も絕えぬ　「目言」を考に相見る事と解いてゐるが、「目」は見ること「言」は言ふことであつて、お目に掛る事も物を申し上げる事も無くなつたといふ意である。「目言」の用例に「海山も隔たらなくに何しかも目言をだにもここだ乏しき」(六八九)などがある。以上が第三段である。○然れかも　「然有鴨」は略解にシカレカモと訓んだのがよい。然あればかもの義で、其の爲であらうかといふ意。此の句は註に「一云所已乎之毛」とある。「そこ」は其の事の意で、「しも」は意を强め感動を表す助詞である。前後の關係上一云の句の方が意味がよく通じるので、考・檜嬬手・古義などには是を本文に採用してゐる。○あやに悲しみ　此の句の「憐」を流布本にカシコミと

訓んでゐるが、代匠記精撰本にカナシミと訓んだのに從ふべきである。此の句は(一五九)に講じた通り、非常に悲しまれての意。○ぬえ鳥の　「片戀」の枕詞。「ぬえ鳥」は前に出た「ぬえこ鳥」と同じで虎鶫をいふ。其の鳴聲が哀調を帶びてゐて恨み歎くやうに聞えるので、鵺のやうに妻を慕つて泣くといふ意味で、「片戀」に冠したのである。尤も集中には鵺に限らず、容鳥や霍公鳥をも片戀の譬喩に用ゐた例がある。○片戀夫　先立たれた皇女を戀ひ慕つて歎かれる背の君をいふ。此の句は前後の關係上多少落著きが悪いので、註に「一云爲乍」とあるのに據つて、考には此の句を「片戀しつつ」に改め、檜嬬手・古義等はこれに從つてゐる。然し今は本文の儘で解いて置く。○朝鳥の　「通ふ」の枕詞。早朝鳥が塒を立つて、彼方此方へ行き通ふ意によつて懸けたのである。〔四五〕に「坂鳥の」を「朝越え」に冠したのと相似た枕詞である。○通はす君が　流布本の訓にカヨヒシキミガ(代匠記・童蒙抄・檜嬬手同訓)とあるが、考にカヨハスキミガと訓み、諸註は考の訓を採用してゐる。「かよひし」と訓めば「し」は過去を表す助動詞となり、「かよはす」とすれば「す」は敬語の助動詞となる。皇女の御墓へ通ひ給ふ背の君がの意。○夏草の思ひ萎えて　此の二句は(一三一)に出た。○夕星の　「夕星」を流布本にユフヅツ、神田本・温故堂本にユフボシと訓んでゐる。牽牛星を「比故保思」(三六五七)と言つた例があるから、「星」は一般にホシと云つた事が知られる。然し夕星の場合は、和名抄に「兼名苑云、太白星一名長庚(此間云、由布都都)暮見二於西方一爲二長庚一耳」とあるから、ユフヅツと訓むべきである。「夕星」は「明星」に對する稱呼で、前者は宵の明星、後者は曉の明星で共に金星の異名である。夕星即ち金星は夕には西の空に輝き、曉には東天に輝くので、「か行きかく行き」の枕詞に用ゐたのである。○か行きかく行き　「か」と「かく」を對にした例は(一三一)に「彼より此より」がある。彼方へ行きの意で、「たゆたふ」の修飾語である。○大船の　「たゆたふ」の枕詞。ゆた〳〵と海上を漂ふ大船の如くといふ意で懸けたのである。○たゆたふ見れば　原文の「猶預不定」は義訓によつてタユタフと訓む。假名書の例に「大船の絶多經海に碇下し」(二七三八)がある。「たゆたふ」と同系統の語と思はれるものに、「たゆら」(「たよら」ともいふ)及び「たよたよ」といふ副詞がある。而して「たゆら」の「ゆら」と同系統の語に、「ゆらぐ」「ゆるぐ」(搖)「ゆるし」(緩)「ゆらゆら」などがある。さすれば「たゆたふ」の「た」は接頭語である事は疑ない。「ゆたふ」は單獨の動詞としても用ゐ、又其の「ゆた」は「ゆたゆた」「ゆたか」(豐)「ゆたけし」(寬)などの語根ともなり、又「大船の由多爾あるらむ」(二三六七)「潮干の由多爾思へらば」(三五〇三)「吾が心湯谷絶谷浮き尊」(一三五二)などとも用ゐる。從つて「たゆたふ」は緩慢に動く事、若しくはゆら〳〵と搖れる事を云ふ。さて此の句は心落著かずして、ふら〳〵とお歩きになるのを見るとの意。○慰むる　「遣悶流」を流布本にオモヒヤル(代匠記・童蒙抄・考・攷證・美夫君志・講義同訓)、略解にナグサモル(檜嬬手同訓)、古義にナグサムル(註疏・新考・新解同訓)と訓んでゐる。「遣悶」はオモヒヤル・ナグサムル孰れに訓んでも差支ない文字であるが、澤瀉氏が述べて居られる通り、(『國語國文の研究』第二十八號並に第三十號誌上)人麻呂の作にある「吾が戀ふる千重の一重も遣悶流心もありやと」(二〇七)と同一の詞句が、笠麻呂の作にあつて、これには「吾が戀ふる千重の一重も名草漏心もありやと」(五〇九)と記してあるから、「遣悶流」はナグサムルと訓むべき事が知られる。なほ此の語の一字一音の假名書の例には、「奈具左武」「那具左牟流」とあるから、此處もナグサムルと訓んで置く。「慰む」は物思ひを晴らし遣ること。○そこ故にすべ知らましや　「そこ故に」はそれ故にの意。(既出)次の「爲便知之也」は從來種々に訓まれてゐる。流布本にスベモ

シラシヤ、神田本にスベシルヤ、童蒙抄にスベモシルシヤ、考にスベシラマシヤ（略解・攷證・美夫君志講義同訓）と訓んでゐる。其の他小琴にはセムスベヲナミ又はセムスベシラニなどあるべき所であると云ひ、檜嬬手には「之也」は「良爾」の誤であらうとしてセムスベシラニと改め、新考には「爲便不知之止」と改めてある。然し此處は姑く原文の儘を考の訓に從つて訓むのが穩かである。「まし」は非現實の事柄を假想するときに用ゐる助動詞であるが、ここでは「む」と同樣に用ゐられたものとし、「や」は反語の助詞と見て、如何ともする術を知らうか知らないといふ意に解いて置く。○音のみも名のみも絶えず　「音」は其の原義から轉じた、噂又は評判の意であり、「名」は名聲の意である。次に「のみ」は或事を指してそれだけに限る意の助詞で、此の場合は「聲耳乎聞きてあり得ねば」（二〇七）「音耳乎聞きてや戀ひむ」（二八一〇）などの「のみを」と同じ資格を有してゐる。即ち此の二句は、せめて君の御噂だけでも、又君の御名だけでも、それを永久に云々といふ意で、下の「偲び行かむ」の補格になつてゐる。是と同類の句に「萬代の語らひ草と未だ見ぬ人にも告げむ於登能未毛名能未母聞きて美しぶるがね」（四〇〇〇）がある。○天地のいや遠長く　天地の遠く久しきが如くいよいよ長久にの意。○偲び行かむ　流布本にオモヒユカム、代匠記精撰本にシノビユカムと訓んでゐるが、考の訓シヌビユカムに從ふべきである。「行かむ」の「む」は連體形で「御名」に續いてゐる。○御名に懸かせる　「懸かせる」の「せ」は敬語の助動詞、「る」は動作の結果の存續を示す所謂完了の助動詞である。さて「懸く」は「子らが名に關の宜しき朝妻の」（一八一八）、又櫻兒傳說を詠んだ歌に「妹が名に繫有櫻花咲かば」（三七八七）等の如く用ゐられてゐる。此の一句は皇女が御名に懸けて居られる所のといふ意である。○明日香河　明日香皇女の御名に通ふ此の明日香河をといふ意で、最後の「形見にここを」に續く。○愛しきやし　「はしき」は形容詞「はし」の連體形。愛すべきの意。「はし」の用例には古事記に「波斯豆麻」（愛妻の意）、集中に「吾妹子が奥津城と思へば波之吉佐保山」（四七四）「長き日を待ちかも戀ひむ波之伎妻らは」（四三三一）などがある。「や」「し」は前に說いた「よしゑやし」のそれと同じで、共に語調を整へ感動を表す助詞である。從つて意味は「愛しき吾が大君」と續く。「愛しきやし」を「愛しきよし」「愛しけやし」などと云つた例もある。例へば「波之吉也思吾家の毛桃」（一三五八）「波之吉余思妹を相見ず」（三九六四）「波斯祁夜斯吾家の方よ」（古事記）などの如きである。○形見にここを　原文の「形見何此焉」を流布本にカタミカココモ、代匠記にカタミカココヲ（童蒙抄・考・攷證同訓）と訓み、略解には「何」を「荷」の誤とする宣長の說に從つて、カタミニココヲ（檜嬬手・古義同訓）と訓んでゐる。なほ木村博士は『萬葉集文字辨證』に於て、支那では「何」は「荷」に通じて用ゐる文字である事を考證してカタミニココヲと訓まれてゐる。「何」と「荷」と通用した例には、澤瀉氏が指摘せられてゐる通り、「妹と吾と此何有跡なのりその花」（一二九〇）「射等籠荷島の珠藻苅ります」（二三）があるから、今は姑く木村博士の說に從つて置く。さて「形見に」の下には「せむ」の如き語を補つて解くべきである。次の「ここを」は前の明日香河を指してゐる。

【譯】飛鳥川の上流の瀨には石橋を並べ渡し、下流の瀨には板橋を架け渡してある。其の石橋に生えて水の流れに靡いてゐる美しい藻も、切れて絶えれば又新しく生え、板橋に生えて水に撓み靡いてゐる川藻も、枯れれば又新に生えるものである。然るに我が皇女の君は、背の君がお立ちになると、美しい藻のやうに、又臥し給へば川藻の如く、常に靡き寄り添うて居られた所の、申し分のない立派な背の君の朝に夕に住み給うてゐる御殿を、一體

何故に見限り給うたのであらうか。皇女は御在世の當時、春は花を手折つて頭挿とし、秋になると黄葉の枝を頭挿にし給うて、背の君と互に御袖を連ねて、いつまでも見飽きもなさらず、いよ〳〵いとしく思し召されてゐた背の君と共に、時折お出ましになつてお遊びになつたあの木廸の地に營まれた宮を、今は永久に鎮まり坐すべき御殿と定め給うて御隱れになつたので、再び互にお逢ひになる事もお話しになる事も無くなつた。その故であらう非常に悲しみ給うて、獨り皇女をお慕ひになり、木廸の殯宮にお通ひ遊ばす背の君が、炎天の下に萎れてゐる草葉のやうに、物思ひに萎れかへつて、彼方へ行き此方へ行きして、ぶら〳〵とお歩きになつてゐる樣をお見受けすると、我々も心の慰めようもなく歎かれ、其の爲にどうしてよいか、到底なす術も判らないのである。せめて皇女の御噂だけでも、又御名だけでも、天地が遠く久しいやうに、いつまでも絶えずお偲び申さうと思ふ、其の御名前に懸け給うてゐる此の飛鳥川を、萬代の後までもいとしい我が皇女の君の形見としてお慕ひ申さう。

【評】此の歌も修辭的技巧が巧緻を極めて居り、悲歎の情緒が痛切に表れてゐるので、人麻呂の長歌の代表作の一に數へられてゐる。全體の構造は、前に講じた石見國から妻に別れて上り來る時の長歌二首、並に此の歌の前にある河島皇子を越智野に葬り奉つた時、泊瀬部皇女に獻つた歌（本書には省いた）の場合と略同一である。卽ち前半を敍事的表現に用ゐ、後半を抒情的に歌ふのは、人麻呂の作に屢見受ける長歌の常型とも云ふべきである。而して一般に敍事的部分に大規模な對句を用ゐ、抒情的部分には寧ろ枕詞を多く用ゐるのであつて、此の作に在つても半以後に十句の枕詞が頻繁に挿入せられてゐる。なほ「春べは云々秋立てば云々」の對句と略同一のものは、前に講じた人麻呂の作にあり、「夏草の思ひ萎えて」も後の作ではあらうが（一三一）に見えて居るから、此等は人麻呂の好んで用ゐた句である。次に此の歌の特色とすべき點を擧げるならば、先づ初を飛鳥川の敍景に起し、藻が生え代つて絶える事のない事を敍べた裏に、人生の去つて再び歸らぬ事を暗示して中心主題への伏線としたのが、此の挽歌の序として巧みである。更に最後に皇女の御名となつてゐる飛鳥川を再び出して、此處を永久の記念としようと結んだのは首尾の照應である。此等の構想は作者の用意の存する所であらう。其の他背の君が皇女の御墓へ通ひ給ふ樣を歌つた「ぬえ鳥の」以下數句は、（一九四）に泊瀬部皇女が背の君河島皇子の御墓に詣でられる事を歌つた、「そこ故に慰めかねて、けだしくも逢ふやと思ひて、玉垂れの越智の大野の、朝露に玉裳はひづち、夕霧に衣は沾れて、草枕旅寢するかも云々」と好一對を成す詞句で、共に感銘が深い。

短歌二首

一九七　明日香川　しがらみ渡し　塞かませば　流るる水も　のどにかあらまし

明日香川　四我良美渡之　塞益者　進留水母　能杼爾賀有　萬思

【釋】○しがらみ渡し　「しがらみ」（筋）は川の中に杭を打ち渡し、それに木の枝や竹を繁く絡みつけて、水を塞く爲に設けたものを云ふ。此の語は本來は「萩が枝を石辛見散らしさ男鹿は妻呼び響む」（一〇四七）の如く四段に活用する動詞であつて、其の連用形を名詞としたのである。○塞かませば　「塞く」は形容詞の「狹し」と同根語で、「關」「咳」などは「塞く」の連用形から轉成した名詞である。「ませ」は非現實的假想を表す助動詞の「まし」の未然形。斯樣に「ませ」を以て假設的條件を表した場合には、終は同じく「まし」で結ぶのが通則である。他の例を擧げ

るならば「出でて行く道知ら末世ばあらかじめ妹を留めむ關も置かま末思を」(四六八)「ぬばたまの夜渡る月にあら麻世ば家なる妹に逢ひて來麻之を」(三六七一)の如くである。○流るる水も　「も」と云つたのは、水の外に明日香皇女の事をも含めてゐるのである。○のどにかあらまし　「のど」は「のどか」「のどけし」「のどむ」「のどやか」「のどらか」等の語根であつて、意味は「のどか」と同じく、靜かでゆつたりしてゐるのを云ふ。「か」は疑問の助詞。

【譯】明日香川に筏を掛け渡して流れを塞き止めたならば、流れてゐる水でも靜かにゆつたりと淀むことであらうか。(其の川の名に通ふ明日香皇女の御命を、塞き止める事の出來なかつたのが如何にも殘念である。)

【評】歌の詞句の上には皇女の薨去の事を表さず、專ら飛鳥川の流れに就いて敍べ、而も其の中に流水の去つて歸らぬ如く、此の世を去り給うた皇女に對する哀悼の情を籠めたのは巧みな表現である。聲調もア列音が過半數を占めてゐて、詠歎的であり流麗な調をなしてゐる。　壬生忠岑が姉の身まかつた時に詠んだ「瀨をせけば淵となりてもよどみけり別れをとむるしがらみぞなき」(古今卷十六)は、此の歌と同一趣向の作であるが、格調の上には時代的變遷が認められる。

一九八　明日香川　明日だに見むと　思へやも　吾が大君の　御名忘れせぬ
明日香川　明日谷　將見等　念　八方　吾王　御名忘　世奴

【釋】○明日香川　下に「明日」を言ふ爲に置いた枕詞であるが、一方では皇女の御名に通ふ川の名であるから出したのである。○明日だに見むと　「だに」は或事を最小限度として示し、其の他を推量させる意を表す助詞であるから、此の句はせめて明日にでもお目に掛れようとの意。○思へやも　「や」を古義に後世の「やは」と同じであるとし、此の歌の上三句を「明日香川を明日さへもまた見むとおもはむやは」と解いてゐるのは穩當でない。「思へや」は「思ふ」の已然形を以て既定事實を條件とし、それに疑問の助詞の「や」を添へたのであつて、思へばにやの意である。最後の「も」は感動助詞。○御名忘れせぬ　「忘れせぬ」は「忘れぬ」と同じ意。「忘る」の連用形に動詞の「す」を添へてサ行變格の動詞としたのである。「ぬ」は係助詞の「や」に對する結である。

【譯】我が皇女の君に今はお目に掛ることも出來ないが、明日香の御名の如く、せめて明日にでもなつたならば、お目に掛れようと思つてゐるからであらうか、皇女の御名をつひぞ忘れる事が出來ない。

【評】反歌の第一首に、長歌の冒頭に歌つた飛鳥川を譬喩として哀悼の情を敍べたのに對して、此の反歌には、長歌の末節の「音のみも名のみも絶えず」以下の意味を別な氣持で歌つたのである。

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌

一九九　かけまくも　ゆゆしきかも　言はまくも　あやに畏き　明日香の　眞神の原に
挂　文　忌　之伎鴨　言　久母　綾　爾畏伎　明日香乃　眞神之原爾

ひさかたの　天つ御門を　畏くも　定め給ひて　神さぶと　磐隱ります　やす
久堅　能　天津御門乎　懼　母　定　賜　而　神佐扶跡　磐隱　座　八隅

みしし　吾が大君の　聞こしめす　背面の國の　眞木立つ　不破山越えて　高
知之　吾　大王乃　所　聞見爲　背友乃國之　眞木立　不破山越　而　狛

麗劍　和射見が原の　行宮に　天降りいまして　天の下　治め給ひ　食す國を
劍　和射見我原乃　行宮爾　安母理座　而　天　下　治　賜　食　國乎

定め給ふと　鶏が鳴く　東の國の　御軍士を　召し給ひて　ちはやぶる　人を
定　賜　等　鳥之鳴　吾妻乃國之　御軍士乎　喚　賜　而　千磐破　人乎

和せと　從服はぬ　國を治めと　皇子ながら　任さし給へば　大御身に　太刀
和爲跡　不奉　仕　國乎治　跡　皇子　隨　任　賜　者　大御身爾　大刀

取り帶かし　大御手に　弓取り持たし　御軍士を　あともひ給ひ　齊ふる　鼓
取　帶　之　大御手爾　弓取　持　之　御軍士乎　安騰毛比賜　齊　流　鼓

の音は　雷の　聲と聞くまで　吹き鳴せる　小角の音も　あたみたる　虎か吼
之音者　雷　之　聲登聞　麻低　吹　響　流　小角乃音母　敵　見有　虎可吼

ゆると　諸人の　脅ゆるまでに　捧げたる　幡の靡きは　冬ごもり　春さり來
吼　登　諸人之　恊　流麻低爾　指擧有　幡之靡　者　冬木成　春去　來

れば　野毎に　著きてある火の　風の共　靡くが如く　取り持てる　弓弭の騷
者　野毎　著　而有　火之　風之共　靡　如久　取　持　流　弓波受乃騷

ぎ　み雪降る　冬の林に　飄風かも　い卷き渡ると　思ふまで　聞きの恐く
三雪落　冬乃林爾　飄　可毛　伊卷　渡　等　念　麻低　聞　之恐久

引き放つ　箭の繁けく　大雪の　亂れて來れ　從服はず　立ち向ひしも　露霜
引　放　箭　繁計久　大雪乃　亂　而來禮　不奉　仕　立　向　之毛　露霜

の　消なば消ぬべく　行く鳥の　爭ふ間に　渡會の　齋宮ゆ　神風に　息吹き
之　消　者消　倍久　去　鳥乃　相競端爾　渡會乃　齊宮從　神風爾　伊吹

惑はし　天雲を　日の目も見せず　常闇に　覆ひ給ひて　定めてし　瑞穗の國
惑　之　天雲乎　日之目毛不令見　常闇爾　覆　賜　而　定　之　水穗之國

を　神ながら　太敷き坐して　やすみしし　吾が大君の　天の下　奏し給へば
乎　神　隨　太敷　座　而　八隅　知之　吾　大王之　天　下　申　賜　者

萬代に　然しもあらむと　木綿花の　榮ゆる時に　吾が大君　皇子の御門を
萬代　然之毛將　有登　木綿花乃　榮　時爾　吾　大王　皇子之御門乎

神宮に　裝ひ奉りて　使はしし　御門の人も　白妙の　麻衣著て　埴安の　御
神宮爾　裝束奉　而　遣　使　御門之人毛　白妙乃　麻衣著　埴安乃　御

門の原に　あかねさす　日の盡　鹿じもの　い伏しつつ　ぬば玉の　夕に
門之原爾　赤　根刺　日之盡　鹿自物　伊波比伏　管　烏　玉能　暮爾

なれば　大殿を　振り放け見つつ　鶉なす　い俯ひ廻り　侍へど　侍ひ得ねば
至者　大殿乎　振放見乍　鶉成　伊波比廻　雖侍候　佐母良比不得者

春鳥の　さまよひぬれば　嘆きも　未だ過ぎぬに　憶ひも　未だ盡きねば　言
春鳥之　佐麻欲比奴禮者　嘆毛　未過爾　憶毛　未盡者　言

喋ぐ　百濟の原ゆ　神葬り　葬りいまして　あさもよし　木上の宮を　常宮と
左敝久　百濟之原從　神葬　葬伊座而　朝毛吉　木上宮乎　常宮等

定め奉りて　神ながら　鎮まりましぬ　然れども　吾が大君の　萬代と　思ほ
高之奉而　神隨　安定座奴　雖然　吾大王之　萬代跡　所

しめして　作らしし　香具山の宮　萬代に　過ぎむと思へや　天の如　振り放
念食而　作良志之　香來山之宮　萬代爾　過牟登念哉　天之如　振放

け見つつ　玉襷　懸けて偲ばむ　恐かれども
見乍　玉手次　懸而　將偲　恐有騰文

【釋】○高市皇子尊　高市皇子は天武天皇の皇子で、御母は胸形君德善の女尼子娘である。孝德天皇の十年に生れ給ひ、壬申の役に於ては御年僅かに十九歲で、天武天皇の勅命を奉じて軍を率ゐ給うた。壬申の役に於て勳功を立て給うた事は日本書紀に詳かであるが、此の長歌にも歌はれてゐる。御異母弟の草壁皇子(日並皇子)は天武天皇の十年に皇太子に立たれ、天皇の崩後も引續き皇太子の御位に在らせられたが、持統天皇の三年に薨じ給うたので、其の後は高市皇子が皇太子に立ち給うたものの如くである。かくて持統天皇の四年に太政大臣に任ぜられ給ひ、同十年七月十日に御年四十三(公卿補任及び扶桑略記による。)で薨去遊ばされた。○城上殯宮之時　「城上」は飛鳥皇女の殯宮の地の木廸と同じく、古の城戸郷である。延喜諸陵式に「三立岡墓、高市皇子、在二大和國廣瀨郡一、兆域東西六町、南北四町、無二守戸一」とある通り、高市皇子の山陵は城上の三立岡に在つたのである。其の位置は今の北葛城郡馬見村字大垣内の西北にある三立山であると言はれてゐる。

尼子娘
天武天皇(四〇)―高市皇子―長屋王
持統天皇(四一)―草壁皇子

○かけまくも　「かけまく」はかけむことの義。此の「かく」を考に心に懸けて慕ひ奉る意に解いてゐる(略解・攷證・檜嬬手・美夫君志同說)のは妥當でない。「かく」は口にかけて言ふ意。此の句は言葉に出して申すのもといふ意で、下の「言はまくも」と同じ意である。○ゆゆしきかも　「ゆゆし」の假名書の例には「言に出でて言はば由遊思美」(四〇〇八)「かけまくの由由志恐き」(四二四五)などがある。「ゆゆし」は講義の說の通り、「ゆむ」(齋)「ゆまはる」などの語幹の「ゆ」を重ねて形容詞としたのであつて、忌み憚るべき樣をいふ。ここは下の「畏し」と同じく畏れ多いの意である。助詞の「かも」は活用語の下に附く場合には連體形を承ける。○あやに畏き　「あやに」は譬へやうもなく不思議にの意。既出(一五九)參照。「かしこし」は畏れ多いの意であるが、又「沖つ浪恐き海に」(一〇〇三)の如く恐ろしの意にも用ゐる。以上の四句は二句對句であつて、天皇や神の御事を歌ふ長歌の冒頭に據ゐる常套語句である。外にも「掛卷母綾爾恐之言卷毛齋忌志伎可物吾が大君御子の命の」(四七五)「可旣麻久波阿夜爾可斯故斯足日女神の命」(八一三)など多くの用例がある。尤も此處の「畏き」は連體形であつて、直接には下の地名の「眞神」

に懸つてゐる事は、新考及び講義の説の通りである。○明日香の眞神の原　此の地は日本書紀崇峻天皇の元年春三月の條に「壞二飛鳥衣縫造祖樹葉之家一始作二法興寺一。此地名二飛鳥眞神原一、亦名飛鳥苫田。」とある地で、今の飛鳥村大字飛鳥の法興寺舊址、卽ち安居院（俗稱飛鳥大佛）のある邊の野原を指すやうである。代匠記及び考に、此の地名を天武天皇の御陵の所在地と見て、以下天皇の崩御の事を敍べたものとして解釋して以來、一般に此の説に從つてゐるが、童蒙抄には眞神の原を天武天皇の皇居、卽ち淨御原の一名と見てゐる。天武天皇の御陵卽ち大内陵は日本書紀に據れば、持統天皇の元年に築き始め、同二年十一月に葬り奉つたのである。大内陵は延喜式に謂ふ檜隈大内陵で、天武持統兩帝の合葬陵であつて、今の高市村大字野口（大軌吉野線岡寺驛より東南約十五町）に在る。（一四三頁地圖參看）此の附近は古の檜前郷であつて、飛鳥の眞神の原からは西南十五六町を距ててゐるので、地理上從來の一般説は穩當でない。因つて喜田博士は眞神の原に山陵があるべき筈はないとし、此處が淨御原宮の所在地であると認めて、以下數句は天武天皇が眞神の原に都を奠め給うた事を敍したものと見て居られる。（『帝都』七八―九頁）今は童蒙抄及び喜田博士の説に從つて解く。○ひさかたの　「天」の枕詞。（既出）○天つ御門を　從來一般に神上り給うた天皇の天上の御殿、卽ち御陵を云ふと解いたのであるが、これは皇居を尊んで云つたものと見るのがよい。○畏くも定め給ひて　畏れ多くも奠め給うて。此處までは奠都の事を敍べ、以下二句は轉じて崩御の事を敍べてゐる。○神さぶと磐隱ります　神としての行爲を遊ばされるとて、岩戸の中にお隱れになつてゐる所のといふ意。此の句の前には、さて今はといふやうな語を補つて解くべきである。「磐隱る」は前に「石戸を開き云々」とあつたのと同じ意味であつて、崩じ給うて陵墓の石槨に斂めて葬り奉つた事を、天皇御自ら隱れ給うたやうに歌つたのである。「隱る」は四段活用。「ます」は連體形で次の「大君」に續いてゐる。○吾が大君の　天武天皇を申す。○聞こしめす　「知らしめす」「聞こし食す」などと同義で、天下を治め給ふ意。○背面の國の　「背面」は（五〇）に説いた通り北方をいふ。此處の「背面の國」は、大和國から遙かに北に在る美濃國を指してゐる。此の句から以下は壬申の役の事を敍べてゐるのである。○眞木立つ　流布本の訓にマキタテルとあるが、考にマキタツと訓んだのがよい。（四五）に述べた通り、檜や杉などの大木が生ひ茂つてゐる所のといふ意。○不破山越えて　「不破山」は美濃國不破郡の山で、今の伊增峠のことであらう。伊增峠は不破郡今須村から關ヶ原へ出る間にある山道である。西北に伊吹山、東に松尾山が聳えてゐて要衝の地である。天武天皇紀元年六月の條に據れば、不破に遣はされて軍事を掌つて居られた高市皇子の奏請によつて、桑名に坐しました天皇は、野上の行宮に還り給うたのであつて、其の時に不破山を越えさせ給うたのである。○高麗劍　「わ」に懸る枕詞。代匠記に――唐土の劍には柄の頭に鐶を著けるから、高麗の劍にも著けたのであらう。鐶の類を「わ」と云ふから、「和射見」の「和」に續けたのである。――と解いてゐるのが妥當である。卽ち「高麗劍」は考古學上の所謂「環頭の大刀」であつて、朝鮮及び支那に發達した劍である事は、遺物によつて明かである。なほ高橋健自氏は「實際上古の大刀の中に環狀の柄頭のあるものが屢ある。さうして見るとワは輪の意で、狛劍といふ劍は何所かに輪狀のものがあつたと見える。まして東大寺獻物張に高麗樣大刀といふのが擧げてあつて、その註に環頭とあるから、その輪は柄頭に該當することが明

高麗劍の柄頭

瞭である。さてこの環頭は内部に何も裝飾がないのが固有の様式であつたらうが、後には(中略)環中に鳥の首を表した如き類が出た。(中略)日本の古墳から發掘される遺物中にも、環中に龍を入れたり、獸首を覗かせたりしたものがある。」(『考古學』九六―七頁)と述べて居られる。(なほ『鏡と劍と玉』の第百一圖には、種々の環頭大刀の圖版が揭げてある)○和射見が原　日本書紀には「和蹔」とある。上田秋成の『膾大小心錄』には今の關ヶ原であるとし、『大日本地名辭書』にも同樣に述べてある。然し一說には、關ヶ原より更に東の不破郡靑野原であるともいふ。關ヶ原は不破郡關原村の地で、其の原野は今須峠及び松尾山を以て西南を限り、東は桃配山及び野上に至る、東西約一里南北二十餘町に亙る地である。○行宮に　「行宮」は和名抄に「日本紀私記云、行宮賀利美夜、今案俗云頓宮」とある通り、假宮卽ち行在所の事でカリミヤと云ふ。天武天皇紀元年六月の條に、「(天皇)到二于野上一、高市皇子自二和蹔一參迎、(中略)皇子則還二和蹔一、天皇於レ玆行宮興二野上一而居焉。」とある。「野上」は和名抄に謂ふ「不破郡野上」で、今の關ヶ原村大字野上に其の名が遺つてゐる。此の地は關ヶ原の東北隅に當つてゐて、中世野上驛の在つた所である。○天降りいまして　「あもり」は「あまおり」の約まつた語で「天降り」と同じ意であるが、ここは現つ神なる天皇が京から鄙へ幸し給ふ事を云ふ。天武天皇は此の時は未だ御卽位前であるが、此の歌には旣に天皇と見奉つて詠んでである。日本書紀に據ると、高市皇子は和蹔に陣を敷いて近江の軍に當り給ひ、天皇は野上行宮に坐して、其處から屢和蹔に行幸せられて軍事を聞こし召したのである。○食す國を定め給ふと　「定賜等」を流布本にシヅメタマフトと訓み、攷證美夫君志等は之を採用してゐる。併し童蒙抄の一訓及び考にサダメタマフトと訓んだのがよい。天皇の治め給ふ國を平定遊ばすとての意。○鷄が鳴く　「東」の枕詞。原文の「鳥」は金澤本・神田本に「雞」、類聚古集細井本等に「鷄」とある。語義に就いては仙覺抄(冠辭考も同說)に、鷄は夜の明けるのを見て鳴くから、「明く」の「あ」に懸けたのであると言ひ、古義に鷄が鳴いてゐるぞさあ起きよ吾夫の意で續けたのであると解き、『枕詞の研究と釋義』に曉鷄が二聲三聲鳴くや東の方から赤くなり行くので、「東」に冠したのであると解いてある。最後の說が妥當であらう。○東の國　汎く東國といふ場合は、畿內以東の諸國を指すのであつて、美濃・尾張なども含まれてゐる。○御軍士を　「いくさ」は古事記に「黃泉軍」、日本書紀に「軍卒」とある通り、古くは專ら兵士を云つたのである。○ちはやぶる　威力を振ふといふ意。これは「ちはやぶ」といふ上二段活用の動詞の連體形である。「ちはやぶ」は「いちはやぶ」の「いち」が「ち」に約まつたのであつて、「いちはやぶ」は形容詞の「いちはやし」から轉成した語である。「いちはやし」の用例は遺つてゐないが、それの轉訛した「うちはやぶ」は天平神護元年正月の宣命に、「如レ此久宇治方夜伎時乞、身命乎不レ惜之天」と用ゐられてゐる。又古事記に「知波夜比登宇治の渡に云云」とあるのは、「うちはや人」の義で同音の「宇治」に冠した枕詞であつて、「ちはやし」の語幹を直ちに名詞に續けたのである。又「いちはやぶ」の用例は、鎭火祭の祝詞に「皇御孫能御廷爾御心一速比給波志止爲氏」があつて、暴威を振ふ意である。さて「いちはやぶ」の「いち」は、「いつ」の轉訛で稜威の義であり、「はや」は「はやし」の語幹で迅速の義であつて、終の「ぶ」は「荒ぶ」「健ぶ」などの「ぶ」と同じ接尾語である。なほ日本書紀に「殘賊强暴」をチハヤブルと訓ませて居るのによつても其の意は知られる。此の句は荒ぶる神の意で、一般に「神」に懸けて枕詞とするが、ここは次の「人」の修飾語になつてゐる。○人を和せと　「やはせ」は「やはす」の命令形。「やはす」は「やはし」(禾)「やはらか」などと同根の動詞で、やはらげる意。暴威を振つて抵抗する者を鎭定せよとの意。○從服はぬ

「まつろふ」は「まつる」に繼續を表す助動詞「ふ」が添加した語で、歸順する・服從するの意。（なほ「麻都呂倍のむけのまにまに」（四〇九四）「麻都呂倍ぬ人をも夜波之」（四四六五）は共に下二段活用の例であつて、前者は他動詞に用ゐてある。）○國を治めと　此の句を流布本にクニヲオサムト、代匠記初稿本にクニヲシラセト、又考には註に「一云掃部等」とあるのを採つてクニヲハラヘトと訓んでゐるが、略解の訓のクニヲヲサメトが妥當である。當時の語法では、四段・ラ變・ナ變に活用する動詞の命令形には通常「よ」を添へず、又屢下二段及びサ變・カ變に活用する動詞にも「よ」を添へずして命令を表した。前の「和せ」及びここの「治め」は「よ」の無い例である。外にも「著く標多底人の知るべく」（四〇九六）「苅薦の亂れば美陀禮」（古事記）などがある。○皇子ながら　此の句と次の句とを、流布本にワカミコノママニタマヘバと訓み、代匠記精撰本に「皇子隨」を一句として、之をミコノマニと訓んでゐるが、童蒙抄にミコナガラ（考以下同說）と訓み改めたのが妥當である。「ながら」は「神ながら」の場合と同義で、ここは皇子であらせられる故にの意。○任さし給へば　原文の「任賜者」を代匠記精撰本にヨサシタマヘバ、童蒙抄にマカセタマヘバ、考にマケタマヘレバと訓んであるが、略解にマケタマヘバと訓んで以來諸註は之に從つてゐる。併し講義には代匠記精撰本の訓が妥當である旨を述べて居られる。其の說の概要は左の如くである。――「まけ」は元來罷り遣す意であつて、集中の用例は何れも此の意味である。而して「まけ」は「大君の麻氣能麻爾麻爾丈夫の心振り起しあしびきの山坂越えて」（三九六二）の如く用ゐられる體言の資格を有する語であつて、當時「まけ」「まく」といふ用言があつた確實な證據は見當らない。なほ又高市皇子の場合は、日本書紀の記載によつて明かである通り、單に派遣せられた部將ではなくして、征討の全權を委任せられ給うたのであるから、此の點から見ても從來の訓のマケタマヘバは妥當でない。一體「任」の字は上代ではヨサシと訓んだのであつて、「よさし給ふ」といふ語は古事記にもあつて、委任し給ふ意である。即ち「よさす」は四段活用の「よす」に、敬語の助動詞「す」を添へたものである。――といふのである。今は講義の說に從つて代匠記の訓ヨサシタマヘバを採用することにした。さて以上の數句に歌つてある部分は、日本書紀の次の記載に相當する。即ち「天皇謂二高市皇子一曰、其近江朝左右大臣及智謀群臣共定レ議、今朕無二與計レ事者一、唯有二幼少孺子一耳、奈之何。皇子攘レ臂按レ劍奏言、近江群臣雖レ多、何敢逆二天皇之靈一哉、天皇雖レ獨、則臣高市賴二神祇之靈一、請二天皇之命一引二率諸將一而征討、豈有レ距乎。爰天皇譽之携レ手撫レ背曰、愼不レ可レ怠、因賜二鞍馬一、悉授二軍事一。」とある。「皇子ながら任さし給へば」の意味も是に據つて愈明かになる。以下高市皇子の御奮戰の有樣を敍してゐる。○太刀取り帶かし　原文の「取帶之」を西本願寺本・細井本・温故堂本等にトリハカシ（代匠記・童蒙抄・攷證同訓）、考にトリオバシ（略解・古義・檜嬬手・新解等同訓）と訓んでゐる。集中に「劍太刀腰に刀利波枳」（八〇四）の例があり、又「帶刀」をタチハキと訓むから、太刀の場合は一般に「はく」（佩）と云つた事が知られる。從つてここもトリハカシと訓むのが正當である。最後の「し」は敬語の助動詞。○あともひ給ひ　「あともふ」は誘ひ率ゐる意。其の用例には「み船子を阿騰母比立てて喚び立てて御船出でなば」（一七八〇）「朝なぎに水手等登能倍夕潮に機引きをり安騰母比て漕ぎ行く君は」（四三三一）などがある。「あともふ」の語原は詳かでないが、『鐘の響』には「後伴」の約であると解いてゐる。然し「あともふ」は「ともなふ」（伴）と同系統の語で、語根は「とも」（友・伴）であつて、「あ」は接頭語で、「ふ」及び「なふ」は動詞を作る接尾語であらうと思はれる。此の二句は軍勢を統率し給うての意。○齊ふる　「ととのふ」は從來一般に呼び集める

意と解かれてゐた。然し集中の用例を見ると、「網引すと網子調流海人の呼び聲」(二三八)「さ牡鹿の妻整登鳴く聲の」(二一四二)の如く、「調」「整」などの字を用ゐて居る。又日本書紀には「卯始朝之、已後退之、因以鐘爲節」の「節」をトトノヘと訓んである。而も一方前に掲げた「朝なぎに水手等登能倍」(四三三一)や、宣命の「又竊六千万兵乎發之等等乃比」「汝等乃心乎等等能倍直之」などの「ととのふ」は何れも呼び集める意味ではない。要するに上代に於ける「ととのふ」は、「整」「齊」「調」「節」などの字義の儘であつて、今日用ゐるのと同じ意と見て差支ないのである。(講義參照)此の歌の場合は童蒙抄に「軍列を立て前後左右の備へをととのへる」義と述べてゐる通り、隊伍を整頓することである。「齊ふる」は連體形で、下の「鼓の音」の修飾語である。○鼓の音は　「音」を流布本にコヱ(攷證・美夫君志同訓)と訓んでゐるが、童蒙抄にオトと訓んだのがよい。「つづみ」は今は小鼓を指すが、ここは和名抄に「大鼓和名於保豆豆美」とある大鼓即ち軍鼓である。軍防令に「凡軍團各置二鼓二面・大角二口・少角四口」と見え、又「凡私家不レ得レ有二鼓鉦弩弁矟具裝・大角・少角及軍幡一。唯樂鼓不レ在二禁限一」とある。鼓は鉦・角などと共に、軍陣に於て進退を節度する爲に鳴らしたのである。○雷の聲と聞くまで　「雷」は和名抄に「雷公」を註して「和名以加豆知、一云奈流加美」とある通り、ナルカミとも云つたのであるが、ここは下に「聲」といふ語があるからイカヅチと訓むべきである。雷の音かと思ふ程にの意であつて、下に「轟きわたり」の如き語を補つて見るべき所である。○吹き鳴せる　「吹響流」の訓には從來異說は無かつたが、新考には「流」を衍字と見てフキナスと訓み、新訓・新解には原の儘をフキトヨムルと訓んである。併し從來の訓のフキナセルが穩當である。「なす」は「なる」(鳴)に對する他動詞の「鳴らす」の古語である。古事記の訓註に「訓レ鳴、云二那志一」と見え、又日本書紀の歌謠に「末邊をば笛に作り吹き儺須云々」とある通り、サ行四段に活用した。○小角の音も　「小角」は天武天皇紀十四年十一月の條に「丙午詔二四方國一曰、大角・小角・鼓吹・幡旗及弩・抛之類不レ應レ存二私家一云々」と記し、和名抄に「角」を註して「兼名苑注云、角本出二胡中一、或云出二吳越一、以象二龍吟一也。楊氏漢語鈔云、大角波良乃布江・小角久太能布江」とある。小角は軍中に用ゐる笛の一種であつて、古くは角笛であつたものと思はれる。因みに大角は法螺貝の笛であると云ふ說がある。○あたみたる　原文に「敵見有」とあるので、此の句を童蒙抄・考・略解・檜嬬手・全釋等に、敵に向ひたるの意に解釋してゐるのは妥當でない。「あたみ」は動詞「あたむ」の連用形である。「あたむ」は名詞の「あた」(仇)から派生した四段活用の動詞で、怨む又は憤るの意を表す。新撰字鏡に「怏、强也、心不服也、宇良也牟又阿太牟又伊太牟」と註してあり、類聚名義抄に「讎」をアタムと訓んである。「あたむ」の用例は源氏物語に「この監にあたまれては聊かの身動ぎせむも所狹くなむあるべき」の如きがある。ここは憤る意である。○虎か吼ゆると　「か」は疑問の助詞。虎が吼えるのかと思はれての意。○脅ゆるまでに　原文の「恊」は「恊」「脅」に通じて用ゐた字である。「脅ゆ」は驚き怖れること。さて上の「齊ふる鼓の音は云々」の四句と、次の「吹き鳴せる小角の音も云々」の六句とは、鼓の音と小角の音とを對句にして敍べたもので、四句と六句の異體の對句である。○捧げたる幡の靡きは　高く指し擧げてゐる旗の風に靡く樣はの意。軍防令の義解に「幡者旌旗惣名也。將軍所レ載曰二纛幡一、隊長所レ載曰二隊幡一、兵士所レ載曰二軍幡一也。」とあるのに據つて、種々の旗を立てた事が判り、又旌旗の數の夥しかつた事も知られる。○冬ごもり春さり來れば　「冬ごもり」は「春」の枕詞。春になるとの意。(既出)○野毎に著きてある火の野毎に燃え附いてゐる火がといふ意。古は春先になると野に火を放つて枯草や雜木を燒き拂つたのであつて、そ

れは燒畑を作る爲であると云ふ。此の野燒の事は、集中の「冬ごもり春の大野を燒く人は燒き足らねかも吾が心燒く」(一三三六)や、古今集の「春日野は今日はな燒きそ若草のつまも隱れり我も隱れり」(卷一)などに歌はれてゐる。さて幡の靡きを野火に譬へたのは、古事記の序文に壬申の役を敍して「皇輿忽駕、淩渡山川、六師雷震、三軍電逝。杖矛擧威、猛士烟起、絳旗耀兵、凶徒瓦解。」とある通り、絳旗卽ち赤旗を用ゐたからである。又日本書紀にも「恐下其衆與二近江師一難也別、以二赤色一著二衣上一。」とあるから、赤旗及び赤印をかざした軍勢の押し寄せる樣は、宛ら野火の如くであつた事と思はれる。○風の共　風の吹くのにつれて。「むた」は〔一三一〕に解いた。○取り持てる　流布本の訓にトリモタルとあつて、一般に此の訓を採用してゐるが、今は考の訓のトリモテルに從ふ。「持つ」の命令形に助動詞「り」の連體形が附いたのが「持てる」である。手に持つてゐるの意。○弓弭の騷ぎ　「弓弭」は元來「ゆみはず」であるが、約めて「ゆむはず」「ゆはず」とも言つた。和名抄に「釋名云、弓末曰彌(由美波末)」とあるやうに、弓の上下の端をいふ。此の場合は古事記に「弓端之調」とあるのと同類で、「弭」は輕く添へた語であつて、唯弓のことである。「弓弭の騷ぎ」は弓を射る時發する弦音を云ふ。○み雪降る　「み」は「み空」「み山」などの「み」と同じ美稱の接頭語。此の句は「冬」の修飾語である。○飄風かも　此の句を流布本にアラシカモと訓んであるが、考にツムジカモと訓んだのがよい。「飄」は類聚名義抄にツムジカゼとある。「つむじ」は「つむじかぜ」の略で旋風をいふ。旋毛を「つむじ」と云ふのも是と同系語である。「つむじ」の音が約まつて「つじ」となつて、今は主として辻を云ふが、古くは旋毛や旋風を「つじ」と云つた例がある。「か」は疑問の助詞で、「い卷き渡る」に懸つてゐる。○い卷き渡ると思ふまで　「い」は動詞に冠して語調を強める接頭語で、前にも「い寄り」「い隱る」「い行き」などの用例があつた。旋風があたり一帶に亙つて卷き起つたのかと思はれる程にの意。○聞きの恐く　「聞き」は「聞く」の連用形を名詞に轉用したもので、聞くことの意。外にも「百鳥の來居て鳴く聲春されば伎吉のかなしも」(四〇八九)の如き用例がある。聞くのが恐ろしくの意。さて前の「捧げたる幡の靡きは云々」の八句と、次の「取り持てる弓弭の騷ぎ云々」の八句とは、幡の靡きと弓弦の音とを以てした八句對句である。○箭の繁けく　飛ぶ矢の繁きことはの意。「繁けく」の「繁け」は「戀は思氣家む」(四三三六)のそれと同じで、「繁し」の未然形に相當する上代に於ける特殊の活用形である。次の「く」は活用語を體言化する語尾であるから、「繁けく」は繁きことの意である。これと同じ語形の用例に、「世間の宇計久都良計久」(八九七)「安志家口も與家久も見むと」(九〇四)「短き命も乎之家久もなし」(三七四四)などがある。○大雪の亂れて來れ　「來れ」は已然形で、既定事實を條件として下へ續ける形である。後の語法では「來れば」と云ふべき所である。大雪が亂れ降る如くに矢が亂れて來たのでといふ意。前の「大御身に太刀取り帶かし」以下此の句までは、高市皇子の統率し給ふ軍勢の奮鬪の樣を敍したのである。壬申の役に就いては、日本書紀に更に精細な記述が見えてゐる。此處に歌つてある部分は、天武天皇紀元年七月二十二日の條に、瀨田の戰の樣を敍して「時大友皇子及群臣等共營二於橋西一而大成レ陣不レ見二其後一、旗旟蔽レ野埃塵連レ天、鉦鼓之聲聞二數十里一、列弩亂發矢下如レ雨云々」とある記事と大體に於て記述を等しくしてゐる。○從服はず立ち向ひしも　歸順する事なく頑強に抵抗した軍勢も。最後の「も」に依つて、此方は素より必死と戰つたのであるが、といふ意味が含まれてゐる。○露霜の　〔一三一〕には「置く」の枕詞に用ゐてあつたが、此處は「消ゆ」の枕詞である。○消なば消ぬべく　「消なば」の「け」は、「消ゆ」の連用形の「きえ」が約まつた形である。「消

ゆ」の未然形及び連用形を「け」と云つた例は、「梅の花早くな散りそ雪は氣ぬとも」(八四九)「朝露の既やすき我が身」(八八五)「降り置ける雪の常夏に氣すてわたるは」(四〇〇四)などがある。此の句は命が消えてしまふならば消えてしまへといふ意であつて、身命を擲つてといふのである。○行く鳥の　「爭ふ」の枕詞。群つて飛ぶ鳥は先を爭つて行くものであるから、「爭ふ」に懸けたのである。○爭ふ間に　兩軍相戰つてゐる際にの意。新解に「消えを爭つてゐる間に」と解かれたのは妥當でない。「はし」は元來物の末端をいふ語で、「端」「嘴」「初」などの「はし」は其の意であるが、轉じては兩端を連絡するものを指すに至つたのであつて、「橋」「階」「箸」或は「梯」「艀」「柱」などは此の意味に基づく語である。此處の「はし」は間の義である。○渡會の　「渡會」は伊勢國の郡名であつて、今も皇太神宮の所在地は度會郡に屬してゐる。○齋宮ゆ　原文の「齊宮」を流布本にイツキノミヤ、考にイハヒノミヤ(古義・註疏・新訓同訓)と訓んでゐる。「齊」は「齋」と通じて用ゐられるのであつて、「齋」はイツク・イハフ何れにも訓み得る文字である。集中に「祝部らが齋經社の」(二三〇九)といふ例もあるから、ここをイハヒノミヤと訓んでも差支ないが、姑く流布本の訓に從つて置く。「齋く」は齋み清めて仕へる事をいふ。古事記に「阿曇連等之祖神以伊都久神也伊以下三字以音」集中に「住吉に伊都久祝が神言と」(四二四三)等の用例がある。さて此の歌の「齋宮」は、大御神の御杖代として仕へ給ふ齋王の坐す齋宮ではなくして、大御神を齋き祀つてある宮卽ち皇太神宮の事である。○神風に　神風にての意。「神風」は神の吹かしめ給ふ風であつて、伊勢神宮の攝社なる風宮(內宮及び外宮にある)の神が吹かしめ給うたのである。弘安の役の神風も、此處から吹いたものであると太平記に記してゐる。○息吹き惑はし　「い吹き」の「い」を、代匠記・童蒙抄・新考等に接頭語としてゐるのは妥當でない。「いぶき」の「い」は「息」の古語であつて、「いぶく」は息吹くの義である。雄略天皇紀に「呼吸氣息」をイブクイキと訓んで居り、又神代紀の訓註に「氣噴、此云二伊浮岐一」とあるのを以て、「いぶく」といふ動詞、又其の連用形を名詞に用ゐた「いぶき」といふ語の存した事は明白である。上代人が風は神の呼吸によつて起ると考へてゐた事は、(八一)に述べた通りである。ここは神風であるから、「息吹く」と云つたのである。尤も神風が吹き起つた事は史書には記載せられてゐない。○天雲を　天にたなびく雲をの意で、下の「覆ひ」といふ動詞に懸つてゐる。○日の目も見せず　「日の目」は今も用ゐるやうに、目に見える日の姿をいふ。此の「目」は「君が目を欲り」(二六七四)「君が目を見ず久ならば」(三九三四)「母が目離れて」(四三三一)などの「目」と同じで、目に見えるものをいふ。○常闇に　晝夜の分ちなき永久の闇黑を「常闇」といふ。「に」は此處では動作の結果を示してゐる。○覆ひ給ひて　上の數句を續けて解くならば、天雲を以て日の光も見えぬまでに、眞暗に空を覆ひ給うてといふ意である。此の下には近江の軍を混亂せしめてといふ意味の句が省かれてゐる。さて「渡會の」以下此の句までは、高市皇子の軍勢に對して伊勢神宮の神が加護を垂れ給うた由を敍べたのである。これは天武天皇紀元年六月丁亥(二十七日)の條に、「此夜雷電雨甚。則天皇祈之曰、天神地祇扶朕者、雷雨息矣。言訖卽雷雨止之。」とあるのと相似た敍事である。○定めてし　「てし」は「つ」の連用形に「き」の連體形を添へた過去の完了を表す助動詞である。斯くの如くして高市皇子が御平定遊ばされた所のといふ意。以下此の歌の主題である高市皇子尊の薨去の事を敍べてゐる。○神ながら太敷き坐して　此の二句は既に講じた。此處の主格に就いては、代匠記に天武天皇であると云ひ、攷證・美夫君志などに天武天皇から持統天皇までを申すのであると述べ、又講義には以下「天の下奏し給へば」までは皆高市皇子の御事

を敍したのであると云はれてゐる。講義に、此の二句は同じく人麻呂の作歌(四五)にも、輕皇子の御事を敍して「神ながら神さびせすと太敷かす云々」と歌つた例があるので、ここも高市皇子の御事を歌つたのであると云はれたのは一應の道理がある。然し「瑞穗の國を……太敷き坐して」とあるのは、國を治め給ふ意であるから、此所はやはり天武・持統兩帝の御治世を指したものと解するのが穩當である。○やすみしし吾が大君の　此の「吾が大君」を代匠記に持統天皇であると見て居る。(攷證・古義・美夫君志等同說)然し此の二句は次の「天の下奏し給へば」の主語であるから、古事記傳の說(註疏・新考・新解・全釋等同說)の通り、高市皇子と見るのが妥當である。「やすみし吾が大君」を、人麻呂の作歌(四五)には輕皇子を申すのに用ゐてゐるから、ここも高市皇子と見て差支ないのである。○天の下奏し給へば　天下の政を執り行うて天皇に奏上し給ふのでといふ意。前述の通り、持統天皇の三年四月に草壁皇子が薨去遊ばされたので、四年七月から高市皇子は太政大臣として、政を執奏し給うたのである。○萬代に然しもあらむと　「然しも」の「し」は、(一六三)の「何しか」の「し」と同じく意味を强める助詞、「も」は感動助詞である。「然」は上に敍べた事を指す。萬代の後までも此のやうに天下の政を執奏し給ふ事であらうとの意。○木綿花の　「榮ゆ」の枕詞。「木綿」は一に「白和幣」「白栲」などとも呼ばれる。楮又は穀の木の樹皮の纖維を原料として織つた白布を通例「木綿」と云ふ。然し又白布を造る原料卽ち緒を指す場合もある。例へば「肥人の額髮結へる染木綿の」(二四九六)「か黑き髮に眞木綿持ちあささ結ひ垂り」(三二九五)などの「木綿」はそれである。なほ「木綿」を「楮」と云つた例もある。「楮衾」「楮領巾」等の場合は織物を云ひ、「楮綱」「楮繩」等の場合は緒を云ふ。「木綿」は之を祭祀に使用する時に呼ぶ名稱で、普通の場合には「たく」又は「たへ」といふ名稱を用ゐたのである。さて「木綿花」は、其の白布を以て造つた造花であると云ふ冠辭考の說が一般に行はれてゐる。造花は凋む事も散る事もなく常に變らぬものであるから、「榮ゆ」に懸けたのであらうと云ふ。一說に豐田八十代氏及び彌富破摩雄氏は、「木綿花」は綿の木の果實が裂けて綿毛の吹出したもの、卽ち所謂綿花を指すのであつて、「山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は」(九〇九)「泊瀨女の造る木綿花み吉野の瀧の水沫に咲きにけらずや」九一二)などの用例に徵しても、斯く見る方が妥當であると云はれてゐる。(『萬葉集の基礎的研究』並に『萬葉集纜攷』所載論文參照)○榮ゆる時に　皇子の榮え給ふ折しもの意であつて、此の下には思ひもよらずといふ意味の句が省かれてゐる。○神宮に裝ひ奉りて　薨じ給うて神とならせられたので、御殿を神宮に設備し申しての意。○使はししし御門の人も　「使はししし」の上の「し」は敬語の助動詞、下の「し」は時の助動詞である。お使ひになつてゐた御所の人人卽ち舍人達をいふ。考・古義・美夫君志に、「御門の人」を宮の御門を守る舍人と見てゐるのは從ひ難い。○白妙の　「たへ」は布の汎稱であるから、「白妙」は白布の總稱となる。(尤も「たへ」は「楮」の意にも用ゐるから、「白楮」は前述の通り白木綿である。)「小垣内の麻を引き干し妹なねが作り著せけむ白細乃紐をも解かず」(一八〇〇)は、麻の白布を「白細」と云つた例であつて、ここの場合も此と同じ用法である。卽ち此の句は次の「麻衣」の修飾語である。○麻衣著て　「白妙の麻衣」を考・童蒙抄・略解・攷證・美夫君志などに喪服であると解いてゐる。一體上代に於ては、白色の衣服は平常も著用し、又祭祀に携はる場合には特にこれを用ゐたのであるから、ここは舍人等が神に仕へる爲の祭服として著用したのである。○埴安の御門の原に　「埴安」は藤原宮の東方、天の香久山の麓の地で、埴安池のあつた所である。「御門」は皇子の御所で、下に「香具山の宮」と歌つてゐるのと同じである。「御門

の原」は御所の附近の原をいふ。攷證美夫君志などに、是を藤井が原即ち藤原宮の地と見てゐるのは妥當でない。都が飛鳥から藤原へ遷されたのは持統天皇の八年十二月であつて、高市皇子は遷都後二年足らずで薨去されたのである。○あかねさす　「日」の枕詞。（既出）○日の盡　「日之盡」の訓は代匠記精撰本にヒノコトゴトと訓んだのがよい。終日の意。既出（一五五）參照。○鹿じもの　「い匍ひ伏し」の枕詞。「しし」は和名抄に「肉（字亦作宍、之々）」とある通り、元來禽獸の肉を云ふのであるが、轉じて肉を取る獸の總稱として用ゐるやうになつた。古くは「獸」を更に區別して鹿を「かのしし」羚羊を「かましし」と言つた例があり、なほ猪は今も「ゐのしし」と言つてゐる。ここの「しし」は「鹿の獸」である。次に「じもの」は（五〇）の「鴨じもの」の條に説いた通り、何々の樣したる物の義であるから、「鹿じもの」は鹿の如くといふ意で「い匍ひ伏す」の枕詞としたのである。○い匍ひ伏しつつ　「い」は接頭語。地にひれ伏しての意。攷證に天武天皇紀十一年の條に、「九月辛卯朔壬辰、勅自今以後、跪禮匍匐禮並止之、更用二難波朝廷之立禮一。」とあるのを引いて、此處は舍人等が終日匍ひ伏して禮を亂さず侍つてゐるのをいふと解いてゐる。なほ續日本紀文武天皇の慶雲元年正月の條に、「辛亥始停二百官跪伏之禮一。」とあるから、此の頃までは舊慣が改まらず、猶實際には跪伏の禮が行はれてゐたものと思はれる。從つて「い匍ひ伏しつつ」は匍匐の禮を行つてゐる樣を云ふのである。○ぬば玉の　「夕」の枕詞。（既出）○鶉なす　鶉の如くの意で、「い匍ひ廻り」の枕詞。○い匍ひ廻り　「もとほる」は古事記の歌謠に「神風の伊勢の海の大石に波比母登富呂布細螺の伊波比母登富ノ擊ちてしやまむ」といふ用例がある。「もとほる」は原文に「廻」と記してある通り、廻ることで、「もとほろふ」は是に繼續反復を表す助動詞の「ふ」が添つたものである。此の語は今も「舌がもとほらぬ」などと用ゐてゐる。「もとほる」の連用形から出た名詞が「もとほり」であつて、回若しくは邊の意を表す。用例には「大殿の此の母等保里の雪な蹈みそね」（四二二八）がある。又他動詞は「もとほす」であつて、廻す意味である。其の用例には「豐壽ぎ壽ぎ母登本斯獻り來し御酒ぞ」（古事記）がある。思ふに「もとほる」は、「もと」（本）「もどる」（戻）などと同根の語であらう。上の「あかねさす日の盡云々」の四句と、「ぬば玉の夕になれば云々」の六句とは對句である。○侍ひ得ねば　原文に「佐母良比不得者」とある。小琴には「者」を「天」の誤字と見て、此の句をサモラヒカネテと訓み（檜嬬手・美夫君志・新考同説）、古義には「者」を「豆」の誤字と見て（註疏同説）小琴と同樣に訓んでゐる。然し原文を尊重して、流布本の訓に從つてサモラヒエネバと訓むべきである。皇子の御所に伺候してはゐるが、侍するに堪へられないのでといふ意味で、下の「さまよふ」に懸る條件の句となつてゐる。○春鳥の　「さまよふ」の枕詞。卷二十に「春鳥乃聲の佐麻欲比」（四四〇八）と歌はれてゐる通り、春の鳥が呻吟ふ如くといふ意味で冠した枕詞である。○さまよひぬれば　此の「さまよふ」は彷徨する意味の語とは別である。新撰字鏡に「呻吟也、歎也、左萬與不、又奏介久」と見え、類聚名義抄に「吟」「愧」などをサマヨフと訓んでゐるやうに、歎き呻吟するのを云ふ。○憶ひも未だ盡きねば　此の「ねば」は從來「ぬに」の意であると解かれてゐる。先づ此の種の「ねば」の用例を見ると、「見まつりて未だ時だに變らねば、年月の如思ほゆる君」（五七九）「霜雪も未だ過ぎねば、思はぬに春日の里に梅の花見つ」（一四三四）「秋立ちて幾日もあらねば、此の寢ぬる朝明の風は袂寒しも」（一五五五）などがある。此の「ねば」の「ね」は否定の助動詞の已然形であるが、「ば」の用法は普通の條件を表す場合とは稍趣を異にしてゐる。即ち此の「ば」は、元來は前に講じた「かくばかり戀ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを」（八六〇）の「ずは」の「は」と同じ用法であつて、

意味は輕いのである。而して上代に於ては、既定事實を條件として表す場合に、活用語の已然形の下に「ば」を必ずしも添へなかつたのであるから、「憶ひも未だ盡きね」「秋立ちて幾日もあらね」で、其の既定事實を條件として下へ言ひ續ける事が出來たのである。「ば」は其の條件の句を輕く承けた接續助詞である。此の事は古事記の歌に、「太刀が緒も未だ解かずて襲(おすひ)をも未だ登加泥(トカネ)婆少女の寢(な)すや板戸を押そぶらひ云々」とある「解かねば」が、眞福寺本に據れば「登加泥(トカネ)」とあつて、「ば」が無いのによつても明かである。從つて「憶ひも未だ盡きねば」は、思ひも未だ盡きないでの意味であるが、前後の關係上それが盡きないのにといふ意味に解釋されるのである。○言喚(こと)ぐ　「百濟」の枕詞。(既出)○百濟の原ゆ　「百濟の原」は北葛城郡百濟村大字百濟の地。「ゆ」は「より」と同義の古い助詞で、ここでは經由して行く地を示してゐる。卽ち百濟の原を通つての意。百濟は東は曾我川(一名百濟川)、西は葛城川によつて挾まれた細長い平野であつて、舒明天皇が都せられた百濟宮の舊址及び百濟大寺の址の存する地である。應神天皇の御代に、百濟・新羅人等が歸化して此の地に多く居住したので、此の地名が生じた。さて百濟の原は、香具山の宮から城上の御陵墓に行く途中にあるから、御葬列が此の原を通過し給ふ意を歌つたのである。○神葬り葬りいまして　「神」は神の事を云ふ時に用ゐる接頭語。「はふる」は古事記傳に元「放(はふ)る」から出た語で、屍を住み馴れた家から出して、野山に送り遣る意であると解いてゐる通りであつて、葬(はうむ)ることである。「神葬り葬りいまして」は前に講じた「神集ひ集ひいまして」或は「神上り上りいましぬ」などと同じ形であつて、葬る事の專ら行はれる事を表す。なほ原文の「葬伊座而」の訓義に關しては異說がある。考・略解・攷證・美夫君志等は訓は流布本にハフリイマシテとあるのに從ひ、「いまして」を往きますの意であると解いてゐる。又新考には『犬鷄隨筆』の說に從つて、「はふる」は他動詞であるから、「います」をも他動詞としてハフリイマセテと訓み、又別にハフリマツリテ(葬奉而)の誤であらうかとも述べてある。然し是は從來の訓に據つてハフリイマシテと訓み、「いまして」は動詞の「います」を、尊敬を表す爲に助動詞的に用ゐたものと見るのが妥當である。「いまして」は自動詞であつて、葬りを行ふ主體に對する敬語である。其の主體は講義の說の通り朝廷であるから、此の句は葬り奉つての意ではなく、葬り給うての意に解くべきである。○あさもよし　「木上(きつへ)」の「き」に懸る枕詞。(既出)○木上の宮を　「木上」は題詞に「城上」とあるのと同じ地である。殯宮の行はれた位置は既に述べた。○定め奉りて　原文の「高之奉而」を流布本にタカクシタテテと訓み、神田本にタカクマツリテと訓んでゐる。童蒙抄には「之」を「久」の誤とし、考には「高知座(タカシリマシテ)而」の誤とし、小琴には「高之」を「定」の誤と見てサダメマツリテと訓み、攷證には原の儘をタカシリタテテと訓み、講義にはタカクシマツリテと訓んである。從來一般に行はれたのは小琴の說である。原文の儘では訓義ともに穩かでないから、〔一九六〕に「木廼之宮乎常宮跡定(キノヘノミヤヲトコミヤトサダメテ)賜」とあるのに倣つて、サダメマツリテと訓む小琴の說に姑く從つて置く。「定め奉る」の主體は朝廷である。○鎭まりましぬ　「安定座奴」を神田本にサダマリマシヌと訓んであるが、今は流布本の訓に從つてシヅマリマシヌと訓む。神として永久に鎭まり給うたことを云ふ。以上が皇子の薨去に就いての敍述であつて、以下は抒情的部分である。○吾が大君の　高市皇子を申す。○萬代と思ほしめして　萬代の後までも搖ぎなきやうにと思し召されての意。○作らしし　造り給うた所の。○香具山の宮　香久山の麓、埴安池の畔に在つた皇子の御所をいふ。○萬代に過ぎむと思へや　「萬代に」の下には搖ぐ事なくしての如き意味の語が省かれてゐる。「過ぐ」は推移する或は空しく失せる意。「思へ

や」の「思ふ」は動詞としての意味は寧ろ輕いのである。是と同じ用例に「片絲にあれど絶えむと念也」(一三一六)がある。更に「一日も妹を忘れて於毛倍也」(三六〇四)などの「思ふ」には、動詞としての意味は全く無く、「忘れめや」を專ら强める爲に用ゐられてゐる。「や」は反語を表す。全體の意味は此の宮は永久に變る事なくして、空しく失せるやうな事は決してあるまいといふのである。○天の如振り放け見つつ　「ごと」は「如し」の語幹で、「如く」と同じに用ゐる。(既出)天を振り仰いで見るやうに御殿を仰ぎ眺めながらの意。○玉襷　「懸く」の枕詞。(既出)○懸けて偲ばむ　流布本にカケテシノバム、考にカケテシヌバムと訓むのがよい。心に懸けてお慕ひ申さうといふ意。○恐かれども　長れ多いことではあるけれどもの意。上の「懸けて偲ばむ」に懸る副詞的修飾語である。

【譯】我々が口に掛けて申し奉るのも憚るべき事であり、斯く申し奉るのも誠に長れ多い事であるが、飛鳥の眞神の原に、神の御殿を長れ多くもお定め遊ばして、さて今では神樣としての行動を遊ばされるとて、岩戸の中に隱れ遊ばされてゐる我が大君の天武天皇が、治め給うてゐる國の北方の地方の、眞木の生ひ繁つてゐる不破の山をお越えになつて、和蹔が原の行宮にお降り遊ばされて、天下を治め給ひ國内を御平定遊ばさうとして、東國の軍兵を御召集になつて、暴威を振ふ人々を鎭めよと、又歸順しない國々を平定せよと、皇子であらせられる高市皇子に御委任遊ばされると、皇子は御身に太刀をお佩きになり、御手に弓をお執りになつて、軍勢を統率し給うて御出陣になると、隊伍を整へる太鼓の音は、恰も百雷の轟くが如く響き渡り、吹き鳴らしてゐる笛の音も、猛り怒つた虎が吼えるのかと思はれて、人々の膽を寒からしめる程に鳴り響き、又押し立てて行く赤い旗の風に靡く樣は、春になると方々の野原に火を放つて草を燒く、其の炎が風につれて靡くが如くに見え、人々が手に持つてゐる弓の弦音は、恰も雪の降り頻る冬の枯木林を、旋風が卷き渡るのかと思はれる程に聞くも恐ろしく、引いては放つ矢の繁く飛び交ふ樣は、恰も大雪が亂れ降るやうに入り亂れて來るので、歸服せずして頑强に抵抗した軍勢も、死ぬなら死ねと身命を擲つて鬪つてゐる折しも、渡會に齋き祀つてある伊勢神宮から吹き起つた神風によつて吹き惑はし、天雲を以て日の光も見せぬまでに眞暗に空を覆ひかぶせて、斯くして御平定になつた此の日本國を、現つ神なる天皇がお治め遊ばされて、我が仰ぎ奉る高市皇子が天下の政を奏上し給ふので、萬代の後までも此の通りであらうと思はれ、あれ程お榮えになつてゐた際に、思ひも掛けず我が皇子の君の御殿を、神の宮に模樣換へをし奉つて、今までお使ひになつてゐた御所の舍人共も眞白な麻の衣を著て、埴安の御所の附近の原に、日の暮れるまで鹿のやうに地にひれ伏して居り、夜になれば御殿を仰ぎ眺めながら、鶉のやうに邊を匍ひ廻つて伺候してはゐるが、ぢつと伺候してゐるのに堪へられないので、歎息の聲を放つてゐると、其の嘆きも未だ過ぎ去らないのに、悲しい思ひも未だ盡きない中に、早や百濟の原を通つて御葬儀を執行し給ひ、城上の宮を永久の御所とお定め申し上げて、其處に神樣としてお鎭まり遊ばしてしまつた。然しながら我が皇子の君が、永遠に搖ぎなきやうにと思し召して、御造營になつた香久山の麓の御所は、萬代の後までも搖ぐ事なくして、空しく滅びよう筈は決してないから、せめては此の御殿を、大空を仰いで見るやうに仰ぎ眺めながら、長れ多い事ではあるけれども、皇子の御事を心に懸けてお慕ひ申し上げよう。

【評】此の長歌は百四十九句から成る萬葉集中の最大長篇である。内容は高市皇子の壬申の役に於ける偉勳鴻業を

讃へた前半の敍事詩的部分と、皇子の薨去を傷んで哀悼の情を敍べた後半の抒情詩的部分とから成つてゐる。而して此の歌の内容の特色であり、又傑出してゐる所以は、其の前半に於て戰を扱つてゐる點に在る。戰を素材に採り入れた歌は記紀歌謠の中にも數首あるが、斯くの如く具體的に且精細に亙つて、一篇の敍事詩とした作は未だ無く、又萬葉集中にも唯此の一首が存するのみである。其の意味で此の歌の前半の素材及び内容は、戰爭詩として極めて注目すべき特異性を有して居る。次に表現法を見ると、一首百四十九句を通じて、語法上の終止は僅か一二箇所あるのみであつて、殆ど一氣呵成に歌ひ去つたかの如くである。而も些かも冗長散漫に流れる事なく、讀者をして終始緊張と感激とを覺えさせるのは、作者の勝れた修辭及び技巧的手腕に依存するのである。即ち表現の勝れてゐる所以は、(イ)全篇の規模が雄大で而も組織體制が整然としてゐる事、(ロ)譬喩が巧みで莊重雄渾である事、(ハ)大膽なる對句形式の頻繁に使用せられてゐる事などに在るものと思はれる。

先づ組織體制に就いて述べると、人麻呂の長歌は何れも前半を敍事的に後半を抒情的に歌つてゐる事は既に屢述べた通りである。此の歌も其の例に洩れず、冒頭の「かけまくもゆゆしきかも」以下「神さぶと磐隱ります」まで十二句は序曲的に歌ひ、次いで「やすみしし吾が大君の」以下「覆ひ給ひて定めてし」まで七十五句は、高市皇子の御勳功並に激戰の有樣を歌つた敍事詩的部分である。次に「瑞穗の國を」以下が、此の歌の詠まれた直接動機である皇子の薨去に對する挽歌であつて、是が更に二小段から成つてゐる。即ち「神ながら鎭まりましぬ」までの四十九句は是亦抒情詩中の敍事的部分であつて、皇子の薨去、舍人の愁嘆の樣、御葬儀の事などを順次に歌つてゐる。最後に「然れども」以下結尾まで十三句が純粹抒情的部分であつて、作者の主觀としての皇子を哀悼し追慕する情を敍べてある。斯樣に敍事詩と抒情詩との二首に歌ふべき内容を一首に歌ひ、更に各部をそれぞれ二段に分けて、而も一篇の統一を失はず、巧みに全體を混然融合して挽歌の體裁を整へてゐるのは、驚嘆に値する所以である。

次に譬喩は主に戰の模樣を寫した所に用ゐられてゐる。陣太鼓の轟きを雷に譬へ、小角の音を虎の怒聲に譬へ、絳旗の靡きを野火に、弦音を飄風の唸りに、又弓箭の繁さを大雪に譬へて、激戰の有樣を或は耳の方面から、或は眼の方面から宛らに活寫してゐるのが巧みである。斯樣な巧みな譬喩の上には、支那文學の影響も少からず認められるのである。其の他「高麗劍」といふ武器の名を枕詞に用ゐたのも適切であり、又「行く鳥の」「木綿花の」「鹿じもの」「鶉なす」等の枕詞も、表現效果を極めて大ならしめてゐる。最後に對句は大小各形式が數多用ゐられてゐるが、中でも注意を惹くのは、句數不均齊の大形式の對句を試みてゐる點である。即ち「齊ふる鼓の音は」以下は四句と六句の對句であり、「捧げたる幡の靡きは」以下は八句の長對句であり、又「あかねさす日の靈」以下も四句六句の對句である。此等は何れも大膽な對句の用ゐ方であり、殊に其の形式が破格であるのは、動もすれば單調に流れる長詩形に、適當の變化を與へてゐる。

要するに此の一首は、敍事詩としての戰爭詩と、抒情詩としての挽歌とを一首に調和結合したのであつて、思想及び感情は其の素材及び内容の推移に應じて、或は勇壯雄勁に、或は莊重森嚴に、或は悲痛哀愁に、それ〴〵變化があつて、單調に陷らず而も之を統一するに、神の御裔としての天皇及び皇子に對する敬虔仰慕の態度を以してゐる。又譬喩や枕詞・對句などの修辭技巧も、此の雄篇に相應しく用ゐられてゐて、内容表現相俟つて此の一篇の價値を高からしめてゐる。

短歌二首

二〇〇　久堅の　天知らしぬる　君故に　日月も知らず　戀ひ渡るかも
久堅之　天所知流　君故爾　日月毛不知　戀渡鴨

【釋】○天知らしぬる　此の訓は考に據つた。講義には、アメヲシラセルと訓むべきではあるまいかと言はれてゐる。神となつて天を治め給うてゐる君といふ意で、薨去遊ばされたことをいふ。○君故に　君は皇子を指し奉る。此の「故に」を小琴以下諸註に「なるものを」の意と解いてあるが、君の爲にと解くのが妥當である。〔二一〕の「人妻故に」の條に說いた通り、此等の「故に」がなるものをの意味に取られるのは、一首全體の意味によるのであつて、「故に」はやはり理由を表すのである。○日月も知らず　原文の「日月」を流布本にヒツキと訓んであるが、考にツキヒと訓み、略解・古義・檜嬬手・美夫君志・新考等は考の訓に從つてゐる。然し「日月」は〔一六七〕で述べた通り、ヒツキと訓むべきであらう。次に「不知」は流布本にシラズ（代匠記・童蒙抄・考・攷證同訓）、略解にシラニ（古義・新考・新解・全釋同訓）と訓んである。ここはシラズと訓んで差支ない。月日の經過するのも忘れてといふ意。○戀ひ渡るかも　「渡る」は永い月日に亙つて或動作を續ける意を表す。

【譯】既に神去りまして天上を治め給うてゐる皇子の君の爲に、我々は月日の經つのも覺えず、ひたすらお慕ひ申してゐることである。

【評】第三句までに、今は神として天上に坐しますものと知りながら、直接に逢ひ奉る期のない悲しさを歌ひ、第四句以下に、追慕の情の薄らぐ時のない事を歌つてゐるのは、前後相應じて哀悼の情を深からしめてゐる。

二〇一　埴安の　池の堤の　隱沼の　行方を知らに　舍人は惑ふ
埴安乃　池之堤之　隱沼乃　去方乎不知　舍人者迷惑

【釋】○隱沼の　初句から此の句までは、次の「行方を知らに」の序である。「隱沼」の意義に就いては二三の說がある。童蒙抄には堤を圍らした池の水の、流るる方なく隱つてゐるのを云ふと解き、考・略解・攷證・美夫君志等も同樣に解いてゐる。檜嬬手には「隱沼」に二義があるとし、其の一は草木の葉などに埋もれて水の見えぬ沼を云ひ、今一つは堤に包みこめられて水の行方の無い沼を云ふと述べて居る。又古義には草などの生ひ茂つてゐる下に隱れて流れる沼で、水の流れて行く行方が見えないので序としたのであると解いてゐる。（新考・全釋・新釋同說）「隱沼の」の用例を見ると「あぢの住む須沙の入江の許母理沼乃あな息づかし見ず久にして」（三五四七）「許母利奴能下ゆ戀ひあまり」（三九三五）「隱沼乃下延へ置きて」（一八〇九）などがあり、他に又「行方無み隱れる小沼の下思ひに」（三〇二二）などの例がある。「隱る」は外部との交渉を斷つて、一定の所に在つて動かぬことであり、「ぬ」は和名抄に「沼和名奴波池沼也」とある通り沼の古語である。從つて「隱沼」は堤に圍まれて水が外へ流れ出ずに淀んでゐる沼を云ふ。此の歌では次の「行方を知らに」の譬喩になつてゐる。（是を「下戀ふ」「下延ふ」などの枕詞に用ゐるのは、「下」は「上」に對する「下」ではなく心の中の義で、心中に思つて外に發表出來ないのを、隱沼に譬へたのである。）○行方を知らに　流布本の訓にユクヘヲシラニと訓み、考以下の諸註はこれに從つてゐる。集中の「さ夜更けて由久敝乎之良爾」（三六二七）「爲る術のたどき乎之良爾音のみしぞ泣く」（三七七七）などの例に據つて、シラニと訓むべきである。「に」はナ行に活用する打消の助動詞の連用形。（既出）

今後行くべき先も判らないので、途方に暮れてといふ意。

【譯】皇子の君が神去り給うたので、恰も埴安池の堤に圍まれた水が行き方なく淀んでゐるやうに、舍人共は仕へ奉る君もなく、途方に暮れ惑うてゐる。

【評】埴安池の水面が動くともなく靜かに淀んで居る光景は、皇子の薨去に遭つて銷沈してゐる舍人達の心持の象徴となつてゐる。自然と人事とが巧みに調和せられた作と謂ふべきである。

或書反歌一首

二〇二　哭澤の神社に神酒する　祈れども　我が大君は　高日知らしぬ

哭澤之神社爾三輪須惠雖禱祈　我王者高日所知奴

右一首類聚歌林曰、檜隈女王怨泣澤神社之歌也。案日本紀曰、持統天皇十年丙申秋七月辛丑朔庚戌、後皇子尊薨。

【釋】○哭澤の神社　「神社」をモリと訓むのは義訓である。「卯名手之神社」を「卯名手乃杜」とも記し、又「石田社」を「石田之森」とも記してゐるのによつて、「神社」又は單に「社」と記して之をモリと訓んだ事は明瞭である。「もり」の原義は森であるが、神は普通森に祀るから、神社を「もり」と言ふのである。（「杜」は支那では甘棠の事で、元來森の意は無いのであるが、我が國では「社」を「もり」とも云ふので「社」を「杜」に作つて、森と同じ意を表すのに用ゐたのである。）さて「哭澤の神社」の祭神泣澤女神は、記紀の神話によれば、伊邪那美命が火神を生んで神去り給うた際に、伊邪那岐命が泣き給うた御涙から成つた神である。此の神社の所在地を、古事記に「坐二香山之畝尾木本一」と記してゐるのは、延喜式神名帳の畝尾都多本神社の位置と同じであらう。今磯城郡香久山村大字木之本（香久山の西麓に當る）に啼澤森といふのがあつて、畝尾都多本神社の遺跡であると言つてゐる。○神酒する　「みわ」は（一一七）の「うま酒」の條に說明した通り神酒をいふ。「する」と言つたのは、神酒を容れた甕を神前に据ゑる意である。甕は酒を釀造するのに用ゐる大型の瓶で、形は種々あるが、（五三九頁圖版參看）神前に供へる時には甕の儘地を掘つて据ゑ付けたのである。「齋瓮を齋ひ掘りする竹珠を間なく貫き垂り天地の神をぞ吾が祈む」（三二八四）と歌はれてゐるのを見て、神祭の古俗を知る事が出來る。○祈れども　原文の「雖禱祈」をクミノメド（代匠記精撰本）、コヒノメド（小琴新解）など訓む說もあるが、流布本の訓イノレドモが穩かである。○高日知らしぬ　「高日」は天日の意。日を知ろしめすと云ふのは、前の「天知らしぬ」と同じく、薨じ給うて天に上り給うた事である。○右一首云々　「檜隈女王云々」は檜隈女王が、高市皇子の御事を祈られたが其の效がなかつたので、哭澤神社を怨んで歌はれた作であると云ふのである。檜隈女王は續日本紀に檜前王と記されてゐる方と同一人であるらしいが、傳記が詳かでない爲、皇子と如何なる關係があつたか不明である。「案日本紀曰云々」は高市皇子の薨去の年を註したのである。

【譯】哭澤の神社に神酒を供へ奉つて、皇子の御命の長きやうに祈つたけれども、遂に我が皇子の君は神去り給うて、天を知ろしめす事になつてしまつた。

【評】泣澤女神に皇子の御平癒を祈られたのは、此の神が香具山の宮の近くに祀つてあつたが爲でもあるが、又古事記傳に記してゐるやうに、此の神が伊邪那美命の神上り給うた時の、悲しみの御涙から成りました神であるの

にも依るものと思はれる。

柿本朝臣人麻呂妻死之後、泣血哀慟作歌二首幷短歌

(二〇七)

天飛ぶや　輕の路は　吾妹子が　里にしあれば　ねもころに　見まく欲しけ
天飛也　輕　路者　吾妹兒之　里爾思有　者　懇　欲　見

ど　止まず行かば　人目を多み　まねく行かば　人知りぬべみ　さね葛　後も
騰　不　止行　者　人目乎多見　眞根久往　者　人應　知　見　狹根葛　後毛

逢はむと　大船の　思ひ憑みて　玉かぎる　磐垣淵の　隱りのみ　戀ひつつあ
將　相等　大船之　思　憑　而　玉　蜻　磐垣淵之　隱　耳　戀　管　在

るに　渡る日の　暮れ行くが如　照る月の　雲隱る如　沖つ藻の　靡きし妹は
爾　度　日乃　晚　去　之如　照　月乃　雲隱　如　奥津藻之　名延之妹者

黄葉の　過ぎて去にきと　玉梓の　使の言へば　梓弓　聲に聞きて　言はむす
黄葉乃　過　伊去　等　玉梓之　使乃言　者　梓弓　聲爾聞　而　將　言爲

べ　せむすべ知らに　聲のみを　聞きてあり得ねば　吾が戀ふる　千重の一重
便　世武爲便不知爾　聲耳　乎　聞　而有　不得者　吾　戀　千重之一隔

も　慰むる　心もありやと　吾妹子が　止まず出で見し　輕の市に　吾が立ち
毛　遣悶流　情毛有　八等　吾妹子之　不　止出　見之　輕　市爾　吾　立

聞けば　玉襷　畝火の山に　鳴く鳥の　音も聞えず　玉桙の　道行く人も　一
聞　者　玉手次　畝火乃山爾　喧　鳥之　音母不所聞　玉桙　道行　人毛　獨

人だに　似てし行かねば　すべを無み　妹が名喚びて　袖ぞ振りつる
谷　似　之不　去者　爲便乎無見　妹之名喚　而　袖曾振　鶴

【釋】○妻死之後　茲に妻の死を傷んだ長歌が〔二〇七〕と〔二一〇〕と二首並べてあつて、題詞は此所にある通り「妻死之後泣血哀慟作歌二首幷短歌」とある。是に就いて考には、〔二〇七〕は忍んで通ふ女の死を傷んだ歌であり、〔二一〇〕は子までもあつた嫡妻の死を悲しんだ歌であるから、同じ題詞の下に載せるべき作ではないとし、前者の題詞を「柿本朝臣人麻呂所竊通娘子死之時悲傷作歌」と改め、後者のを「柿本朝臣人麻呂妻之死後悲傷作歌」とあるべき所であるとしてゐる。略解・攷證・古義・美夫君志等は題詞は原の儘にして、〔二〇七〕と〔二一〇〕に歌はれてゐる妻は考の說の通り別人であると見てゐる。然るに講義には人麻呂の作歌の傾向として、短歌又は長歌を一首詠んだものよりも、同時に二首以上を連作したものが多く、殊に吉野離宮への行幸に陪從した時の歌は、長歌一首に反歌一首を添へた歌を二組連作して居り、又石見國から上京する時の歌も、長歌一首に反歌二首を添へたものを二組歌つてゐる事などを指摘して、ここもそれらと同樣に長歌二首を連作して、一人の妻の死を傷んだのであつて、一回の連作であるとの說を述べて居られる。思ふに考の如く題詞を改める事は獨斷の謗を免れ難いが、〔二〇七〕と〔二一〇〕とは內容上同一人の死を傷んだ作とは見難い節があるから、前者は忍び妻、後者は嫡妻の死を歌つたものとする考以下諸註の見解に從ふべきである。題詞を一纏めにして記したのは、身まかつた妻は

二人の別人であるが、同じく人麻呂の妻であるが爲に、便宜上編纂者が二首の長歌を一括して、斯樣に記したのであらうと思ふ。○泣血哀慟　ナキカナシミテと訓んで置く。「泣血」は泣き盡して血の涙を流すこと。「哀慟」は悲しみ歎くこと。

○天飛ぶや　「輕」の枕詞。代匠記の說の通り、天飛ぶ雁といふ意で「かり」の類音の「かる」に云ひ懸けたのである。「や」は「高知るや」「石見のや」などの「や」と同じく、語調を整へる爲に添へた助詞である。○輕の路は　「輕」は今の高市郡畝傍町の大字大輕・見瀨・五條野・石川・和田あたり一帶の地の古名であつて、畝傍山の東南二十町足らずの所である。下に「輕の市に」とあるやうに、此處は市の立つ村邑であつたのである。「輕の路」は輕へ通ふ道路及び輕の地內の道の孰れをも云ふ。なほここは新考の說の通り、「輕は吾妹子が里にしあれば云々、其の道を止まず行かば云々」と云ふべき所を省略して、「輕の路は」と一つに歌つたのであつて、「路」は下の二つの「行かば」に續くのである。○吾妹子が　「吾妹子」は「和伎毛故」「和藝毛古」などの假名書の例に據つて總てワギモコと訓む。ワガイモコの約音である。「吾妹子」は「吾が背子」に對する語で、妻愛人或は女兄弟などを指して云ふ。「子」は親しみを表す接尾語。ここは我がいとしい妻のといふ意。○里にしあれば　「里」は人の集まり住んでゐる所卽ち人里の意味にも用ゐるが、ここは妻の實家のある地をいふ。「し」は强く指示する助詞。○ねもころに　今云ふ「ねんごろに」の古語。「根毛己呂爾思ひ結ぼれ歎きつつ」（四一一六）「根毛居侶見れど飽かぬ河かも」（一七二三）などの假名書の例がある。又「ころ」を重ねて「禰母許呂母許呂母許呂其呂爾降り置く白雪」（四四五四）と云つた例もある。「ねもころ」の意は、懇切丁寧などの意に限らず、講義の說の通り、至らぬ所なく或は十分にといふ意味が基本をなしてゐる。○見まく欲しけど　「見まく」は見むことの意。（一六四）參照。「欲しけ」は形容詞の「欲し」の已然形に相當する古い活用形である。見たいと思ふけれどもといふ意。因みに平安朝時代以後に用ゐられる「まほし」といふ願望を表す助動詞は「――まく欲し」で、助動詞の「む」と、語尾の「く」と、形容詞の「欲し」とが合體して約まつて生じた語である。○止まず行かば　絕えず行つたならば。○人目を多み　此の「目」は見えること或は見られることの意で、此の句は人の目に附く事が多いのでの意である。さて此の句は次の「人知りぬべみ」と同格で、文脈は下の「隱りのみ云々」に續く。○まねく行かば　「まねく」は形容詞「まねし」の連用形。「まねし」は（八二）の「さまねし」の條に解いた通り、物事の繁く多い意である。繁々と通つたならばの意。○人知りぬべみ　「べみ」は助動詞「べし」の語幹に、「人目を多み」の「み」と同じ接尾語が附いたのである。此の「み」は一般に形容詞の語幹に附いて、副詞的修飾語を作るのであるが、助動詞にも「べし」には附くのである。「霍公鳥鳴く羽觸にも散りぬ倍美袖にこき入つ藤浪の花」（四一九三）「秋萩を散り過ぎぬ蛇手折り持ち見れどもさぶし君にしあらねば」（二二九〇）などの用例がある。此の句は人がそれと知るであらうからといふ意。○さね葛　「さな葛」に同じ。旣出（九四）參照。其の蔓が彼方此方に這ひ伸びて末は又廻り逢ふので、ここは「後も逢はむ」の譬喩的枕詞に用ゐてある。○大船の　「思ひ憑みて」の枕詞。（旣出）○玉かぎる　原文の「玉蜻」を流布本にカゲロフノ、考にカギロヒノと訓んでゐるが、美夫君志の訓タマカギルが正しい。「磐垣淵」の枕詞である。旣出（四五）參照。○磐垣淵の　磐が垣のやうに周圍を圍つてゐる淵の意。水が流れ出る事なく隱つてゐるので、次の「隱りのみ」の譬喩になつてゐる。○隱りのみ　「隱る」を家に隱る意と解くのが一般の說であるが、是は古義の說の通り、表面に表さず心の中でばかり戀ふ意で

ある。同様の例に「隱りのみ戀ふれば苦し山の端ゆ出で來る月の顯れば如何に」(三八〇三)がある。○暮れ行くが如　原文の「晚去之如」の訓は流布本を始め諸註にクレユクガゴトとあるが、考にはクレヌルガゴト(略解・檜嬬手・新解・全釋等同訓)と訓んでゐる。字面の上では何れとも決し難いが、此の句は下の「雲隱る如」と對句であるから、クレヌルと過去にせず、クレユクと進行狀態に訓むべきである。○沖つ藻の　「靡く」の譬喩的枕詞。○靡きし妹は　自分に靡き寄り臥した妻は。○黃葉の　「過ぎ」の枕詞。既出(四七)參照。○過ぎて去にきと　「過伊去等」の訓は流布本にスギテイユクト、考にスギテイニシトとあるが、攷證にスギテイニキトと訓んだのがよい。死んで此の世を去つたとの意。○玉梓の　「使」の枕詞。語義に就いては諸說があるが、未だ首肯すべきものに接しない。從來の說で比較的有力な小琴の說に據れば、上代では梓の木に玉を著けたのを、使者の印に持つて歩いたのであらうと云ふ。なほ講義には「玉」は美稱で、「梓」を「使」の枕詞としたのは、古の「丈部」(馳使部の意)は其の文字の上から見て、「丈」は卽ち「杖」であるから、必ず杖を携行したもので、其の杖は通常梓で造つたのであらう、といふ說を發表して居られる。思ふに「玉」は美稱の接頭語であつて、昔は一般に人に贈物をする時木の枝に附けて遣る風習があつたから、手紙も梓の枝に結び著けて送つたのであらう。從つて「玉梓の」を手紙等を持たせて遣る使者の枕詞とし、更に後世では「玉梓」を直ちに玉章の意に轉用するに至つたものと思はれる。○梓弓　「音」の枕詞。弓を引いて放てば弦音を發するから「音」に冠したのである。○聲に聞きて　「聲爾聞而」を流布本にオトニキキツツと訓み、考には一云の「聲耳聞而」を採つて之をオトノミキキテと訓んでゐるが、略解に原文の儘をオトニキキテと訓んだのがよい。古くは「おと」を聲の義にも用ゐたのであつて、ここは「於等(オト)」のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を」(四〇三九)の場合と同じく、話又は噂の意である。○せむすべ知らに　爲すべき術も知らずにの意。「知らに」の「に」は既に述べた。○聲のみを聞きてあり得ねば　使の話だけを聞いて、其の儘にして置く譯に行かないからの意。○吾が戀ふる千重の一重も　原文の「吾戀」は流布本の訓にワガコヒノとあるのを、考にワガコフルと訓み改めてゐる。何れでも差支ないが姑く考の訓に從つて置く。我が戀ひ慕ふ心の千重にも繁き其の一重なりともの意。卽ち深い戀の幾分なりともの意である。○慰むる心もありやと　原文の「遣悶流」を流布本にオモヒヤルと訓んだのがよい。次に「情毛有八等」に就いては、流布本にコロモアレヤト(童蒙抄・小琴・略解・攷證・美夫君志・新考同訓)と訓み、神田本・溫故堂本にココロモアリヤト(古義・註疏・童蒙抄・考・講義同訓)、小琴にナグサモル(略解・檜嬬手同訓)、古義にナグサムル(攷證・美夫君志・新考同訓)と訓んでゐる。これは(一九六〇)に述べた通り、ナグサムルと訓む方がよい。次に「情毛有八等」に就いては、流布本にコロモアレヤト(童蒙抄・小琴・略解・攷證・美夫君志等同訓)と訓み、神田本・溫故堂本にココロモアリヤト(古義・註疏・新考・新解・講義等同訓)と訓んでゐる。思ふにアレヤと訓めば、「あれ」は已然形で「や」は疑問の助詞と見なければならぬから、此の歌の場合に適當しない。「ありや」は「あり」の終止形に疑問の助詞を添へた形であつて、意味はあるであらうかとなるから、此處はアリヤと訓むのが正しい。此の二句は幾分なりとも心が慰む事もあらうかと思つての意である。○止まず出で見し　妻が常に出て見た市の意。○輕の市に　輕の位置は前に說明した。日本書紀に據れば、輕は懿德天皇が曲峽(まがりを)宮を營んで都し給ひ、又其の後天武天皇の御代には、輕市及び輕寺等が存してゐた地であつて、古くから繁華な場所であつた。輕の市は、大和の海柘榴(つば)市・河內の餌香(ゑか)市・攝津の難波市などと共に、當時の屈指の市場である。市に就いては關市令に「凡市(ハニ)恒以午(ノヲ)時(レ)集。日入前擊(ラムニチ)鼓三度(アカシコ)散。」令義解に「謂日中爲(ニ)市(イチチフ)致(ストイヘル)天下之民(ヲ)是也(ソ)。」と見えてゐる。市は物品を交易賣買する爲に、諸方の人が多數集まる所